

昭和41年4月12日・第1巻第1号 発行

昭和58年3月31日・第16巻 発行

——(財)日本学校体育研究連合会機関誌——

学校体育研究

第16巻

昭和58年3月

財団法人 日本学校体育研究連合会

目 次

対応する二変量の管理図による解析表	会長 大石三四郎	1
のびのびと意欲的に活動する子どもを育てる体育の指導		7
— 楽しい体育の授業と遊びの指導を通して—	山形県上市市立南小学校	
体育の生活化とたくましい子どもづくり		16
— 自らとりくみ、確かめ、のびる活動を通して—	愛知県豊川市立東部小学校	
ひとりひとりが、すすんでとりくむ体力づくりをどう進めるか		25
	和歌山県東牟婁郡太地町立太地小学校	
強いからだと豊かな心を求めて		34
— ひとりひとりが喜んで参加する運動学習 —	島根県江津市立郷田小学校	
健康でたくましい子供の育成		43
— めあてをもって楽しく活動する体育学習 —	長崎県長崎市立横尾小学校	
心身ともに健全な生徒をめざす格技指導		52
— ねばり強い気力と体力の育成 —	福井県丹生郡清水町清水小学校	
運動の喜びや楽しさを味わい、親しみながら体力を高めていく生徒の育成		61
— 意欲的に取り組む体育活動をめざして—	香川県高松市立勝賀中学校	
より深くより楽しい体育学習		70
— 「自主性を生かした体育学習をめざして」 —	神奈川県立金井高等学校	
あ と が き		80

対応する二変量の管理図による解析法



会長 大石 三四郎

対応する二変量の解析には、一般に母相関係数と標本相関係数との間の差の有意性の検討がよく使われてきた。

しかし、この場合の仮説に含意されるものは母集団と標本の対比である。したがって、標本に含まれる一つ一つの個体そのものを解析するものではない。

標本に含まれる個体として測定値をその出現の時と場所に従って解析するためには、Walter. A. Shewhart の標本平均値の管理図法（1931年に発表）によらなければならない。

そして、個体としての一つ一つの測定値はその標本平均を媒介することによって解析できるのである。次に対応する二変量（A, B）の規準型の平均値と標準偏差を定義してみよう。

$$X = (A - \bar{A}) / SD_a \quad \text{①}$$

$$Y = (B - \bar{B}) / SD_b \quad \text{②}$$

XとYの性質

$$\begin{aligned} \bar{X} &= \Sigma X / N = \Sigma (A - \bar{A}) / SD_a / N \\ &= (\Sigma A - \Sigma \bar{A}) / SD_a / N \\ &= 0 / SD_a / N \\ &= 0 \end{aligned} \quad \text{③}$$

同様に

$$\bar{Y} = \Sigma Y / N = 0 \quad \text{④}$$

$$\begin{aligned} SD_x^2 &= \Sigma (X - \bar{X})^2 / N \\ &= \Sigma (X - 0)^2 / N \\ &= \Sigma X^2 / N \\ &= \Sigma [(A - \bar{A}) / SD_a]^2 / N \\ &= \Sigma [(A - \bar{A})^2 / N] / SD_a^2 \\ &= 1 \end{aligned} \quad \text{⑤}$$

同様に $SD_y^2 = 1$ ⑥

ここで規準得点 XとYの差の平均は

$$\begin{aligned} \overline{(X - Y)} &= \Sigma (X - Y) / N \\ &= \Sigma X / N - \Sigma Y / N \end{aligned}$$

$$= 0 - 0 = 0 \quad (7)$$

XとYの差の分散は

$$\begin{aligned} SD^2(x-y) &= \Sigma [(X-Y) - (\overline{X-Y})]^2 / N \\ &= \Sigma (X-Y)^2 / N \\ &= \Sigma (X^2 - 2XY + Y^2) / N \\ &= \Sigma X^2 / N - 2 \Sigma XY / N + \Sigma Y^2 / N \\ &= 1 + 1 - 2 \Sigma XY / N \\ &= 2 - 2 \Sigma XY / N \end{aligned} \quad (8)$$

同様に規準得点 XとYの和の平均は

$$\begin{aligned} (\overline{X+Y}) &= \Sigma (X+Y) / N \\ &= \Sigma X / N + \Sigma Y / N \\ &= 0 + 0 \end{aligned} \quad (9)$$

XとYの和の分散は

$$\begin{aligned} SD^2(x+y) &= \Sigma [(X+Y) - (\overline{X+Y})]^2 / N \\ &= \Sigma (X+Y)^2 / N \\ &= \Sigma (X^2 + 2XY + Y^2) / N \\ &= \Sigma X^2 / N + 2 \Sigma XY / N + \Sigma Y^2 / N \\ &= 1 + 1 + 2 \Sigma XY / N \\ &= 2 + 2 \Sigma XY / N \end{aligned} \quad (10)$$

ところで

$$\begin{aligned} \gamma &= 1 / N \cdot \Sigma (X - \overline{X})(Y - \overline{Y}) / SD_a / SD_b \\ &= 1 / N \cdot \Sigma XY / 1 / 1 \\ &= \Sigma XY / N \end{aligned} \quad (11)$$

であることから

$$\begin{aligned} \textcircled{8}\text{式} \quad SD^2(x-y) &= 2 - 2 \Sigma XY / N \\ \text{は} \quad SD^2(x-y) &= 2 - 2 \gamma \end{aligned} \quad (12)$$

$$\begin{aligned} \textcircled{10}\text{式} \quad SD^2(x+y) &= 2 + 2 \Sigma XY / N \\ \text{は} \quad SD^2(x+y) &= 2 + 2 \gamma \end{aligned} \quad (13)$$

となり

相関係数 γ は、XとYの差か、もしくは和の分散によって示すことができる。

$$\gamma = 1 - SD^2(x-y)/2 \quad (14)$$

$$\gamma = (-1) + SD^2(x+y)/2 \quad (15)$$

相関係数のとりうる値は、-1.0より+1.0であるので、⑫式より

$$2 - 2(+1.0) \leq SD^2(x-y) \leq 2 - 2(-1.0) \\ 0 \leq SD^2(x-y) \leq 4 \quad (16)$$

同様に⑬式より

$$2 + 2(-1.0) \leq SD^2(x+y) \leq 2 + 2(2.0) \\ 0 \leq SD^2(x+y) \leq 4 \quad (17)$$

もし $\gamma = 0$ ならば

$$SD^2(x-y) = 2 \quad (18)$$

$$SD^2(x+y) = 2 \quad (19)$$

となる。

規準化されたXとYの差及び和の分散は⑫・⑬のように表わされる。

これを表1(規準型化されたXとYの差及び和の分散と相関係数の関係)に示す。

正の相関を $1.0 \geq \gamma \geq 0.5$ とすれば

$$0 \leq SD^2(x-y) \leq 1.0$$

$$3.0 \leq SD^2(x+y) \leq 4.0$$

無相関を $0.5 \geq \gamma \geq -0.5$ とすれば

$$1.0 \leq SD^2(x-y) \leq 3.0$$

$$1.0 \leq SD^2(x+y) \leq 3.0$$

負の相関を $-0.5 \geq \gamma \geq -1.0$ とすれば

$$3.0 \leq SD^2(x-y) \leq 4.0$$

$$0.0 \leq SD^2(x+y) \leq 1.0$$

に各々対応する。

この値を利用して、測定単位ごとの、XとYの差あるいは和を平均値または範囲の管理図にプロットすることにより管理可能となる。

すなわち、 $X - Y$ は正の相関の管理

$X + Y$ は負の相関の管理

という仮説をすることが可能となる。

例をぜんそく有症率と気温の関係にとろう。

昭和54年5月4日から6月21日の7日を1単位として7回の49日間の

ぜんそく有症率(A) 平均2.242 SD1.83

気温(B) 平均20.55 SD3.37

$$\gamma = -0.3895$$

XとYとが逆相関するとの仮説をもうけて、1週ごとの(X+Y)の範囲Rをとり7回の平均をとると、 $\bar{R}=1.78$ となる。

この平均、SD、 r 、Rをもとに、この次の日である6月22日(夏至)より8月7日(立秋の前日)までの47日間の対応する二変量の和(ぜんそく有症率X、気温Y)の管理を平均の管理図法によって行なう。

ぜんそく有症率の規準型化 $X=(A-2.242)/1.83$

気温の規準型化 $Y=(B-20.55)/3.37$ としてみると、二変量の和の平均は0であるので、範囲による管理は、 $(X+Y) \pm A_2 \bar{R} = 0 \pm 0.419 \times 1.78 = \pm 0.746$ この数値を上・下限とする管理図をもとに1週を単位としての管理図に記入してみると、図1〔ぜんそく有症率と気温の和の管理〕でみると、二変量の和は7月6日からの一週間と7月27日からの一週間の二週が管理限界に入る。これを、管理限界を表1の和の標準偏差SD(x+y)から、管理限界を $(X+Y) \pm 2$ とすれば、5週が管理限界に入る。

これを日々の管理に置きかえてみよう。図2(ぜんそく有症率と気温の和の管理)に示す。

ぜんそく有症率は、6月22日から30日までの9日間連続して、-3の外にある。

気温は6月22日から29日までの8日間連続して+1より+3の範囲にあり、前49日よりも有症率はきわめて低く、気温はかなり高い段階にあることを示している。前49日は $r=-0.3895$ と負の相関を示しているので、次は一応負の相関と仮定して次の管理を行う。

これは、気温が高いと有症率が低くなるという観点からのチェックである。

(X+Y)の幅を±3という広い管理限界でみると、7月23日、24日の2日間は、気温が28.0、29.6度と高いにもかかわらず、有症率2.41%、2.3.2%と平均よりも高く、(X+Y)が3.12、3.11と大きくなっている特異日であることを示している。

$(X+Y) \pm A_2 \bar{R} = \pm 0.746$ は±1に近い値であるが、その管理限界に入る日は9日間と少なく、±1としてみると、19日間が管理限界に入るが、前49日の有症率、気温と大きく値がことなっているので、管理限界については、更に検討を必要とする。

仮説としては、この場合逆相関を想定したが、実際には結果が順相関の場合もあり得るし、また、仮説として、順相関を想定しても、実際には逆相関の場合もあり得るので、二つの図には、いずれの場合でも推論できるように、順、逆の場合を記入しておいた。

なお、二変量の和の範囲の管理については、図を略して、 $\bar{R}D_4$ (D_4 は管理図係数表より読みとる)で計算で処理することとした。本例においては、下記数により管理した。

$$\bar{R} \times D_4 = 1.78 \times 1.924 = 2.4247$$

第三週の範囲が3.52で有意を示している。相関が順か逆に変わる様子がよくわかる。

仮説としての順相関の場合の計算表は略した。

(現職 国立特殊教育総合研究所長)

表1 規準型化されたXとYの差及び和の分散，標準偏差と相関係数の関係

γ	$SD^2(x-y)$	$SD(x-y)$	$SD^2(x+y)$	$SD(x+y)$	$SD(x+y)$
1.00	0.0	0.0	4.00	2.00	2.00
0.90	0.20	0.45	3.80	1.95	1.95
0.80	0.40	0.63	3.60	1.90	1.90
0.70	0.60	0.77	3.40	1.84	1.84
0.60	0.80	0.89	3.20	1.79	1.79
0.50	1.00	1.00	3.00	1.73	1.73
0.40	1.20	1.10	2.80	1.67	1.67
0.30	1.40	1.18	2.60	1.61	1.61
0.20	1.60	1.26	2.40	1.55	1.55
0.10	1.80	1.34	2.20	1.48	1.48
0.0	2.00	1.41	2.00	1.41	1.41
-0.10	2.20	1.48	1.80	1.34	1.34
-0.20	2.40	1.55	1.60	1.26	1.26
-0.30	2.60	1.61	1.40	1.18	1.18
-0.40	2.80	1.67	1.20	1.10	1.10
-0.50	3.00	1.73	1.00	1.00	1.00
-0.60	3.20	1.79	0.80	0.89	0.89
-0.70	3.40	1.84	0.60	0.77	0.77
-0.80	3.60	1.90	0.40	0.63	0.63
-0.90	3.80	1.95	0.20	0.45	0.45
-1.00	4.00	2.00	0.0	0.0	0.0

図1 ぜんそく有症率と気温の和の管理(7日を1単位として)

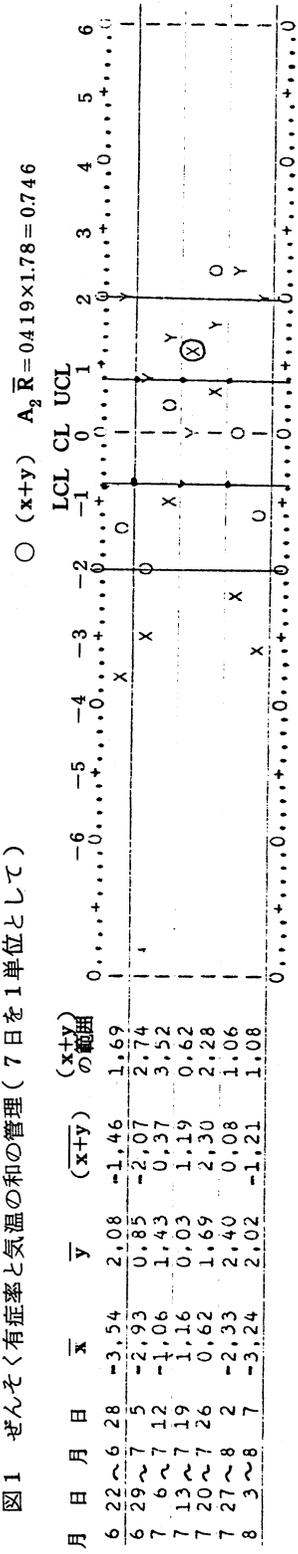
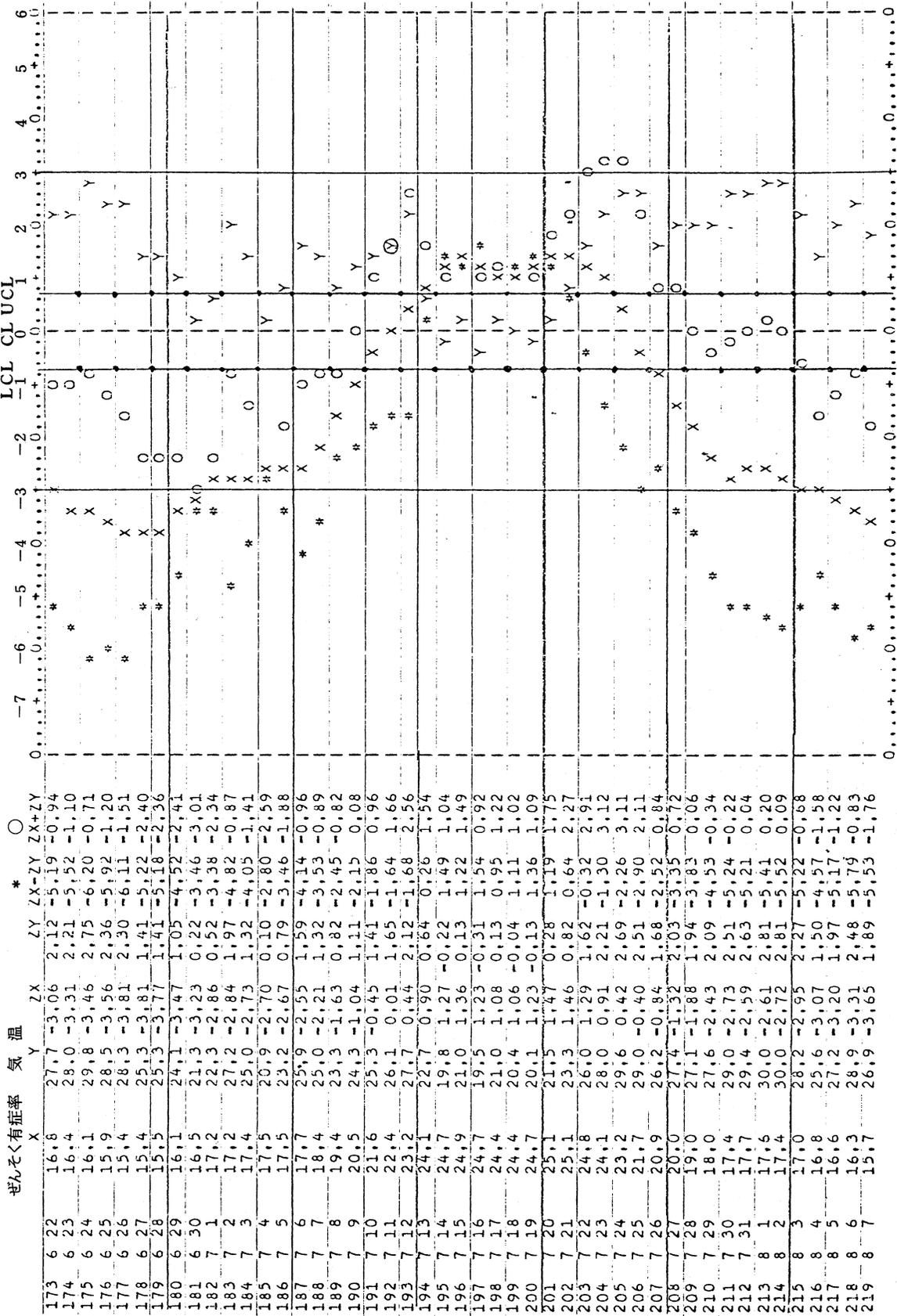


図2 ぜんそく有症率と気温の相関の管理



のびのびと意欲的に活動する子どもを育てる体育の指導

— 楽しい体育の授業と遊びの指導を通して —



山形県上市市立南小学校

校長 北澤 利光



学級数 25 (含特殊1)

児童数 931名

研究主任 教諭 戸田 芳雄

〒999-31 山形県上市市長清水字石崎411番 ☎(02367)3-3130・3131

1. 主題設定の主旨及び研究の経過

本校は、昭和53年4月に上山小学校より分離・独立して創られた新しい学校である。実質的には、翌年(54年)4月に全校児童が新校舎に移転し、そのスタートを切った。分離前の学校は、児童数2千人を越えるマンモス校で、校舎、校地に余裕がなく、遊びや学習など子ども達の生活が極端に制限された不自由な学校となっていた。そんな実態から、市民や父兄の間から「新しい学校を建設し、広い場所で、のびのびと明るくたくましい子どもを育てたい」という願いが強まり、遂に本校の誕生に至った訳である。

建設された本校は、これまでの学校のイメージを破った新しい学校、即ち、子どもが生活し、自ら学ぶ姿勢を大事にし、学習や生活の機能を考えて建設された学校である。具体的には、空間の広がりやつながりを大切にし、ゆとりを持った構成となっており、校舎の周囲には、子ども達がのびのびと遊べるような、多くの広場が設けられた。21世紀の学校と某建築誌などにも掲載されたほどである。

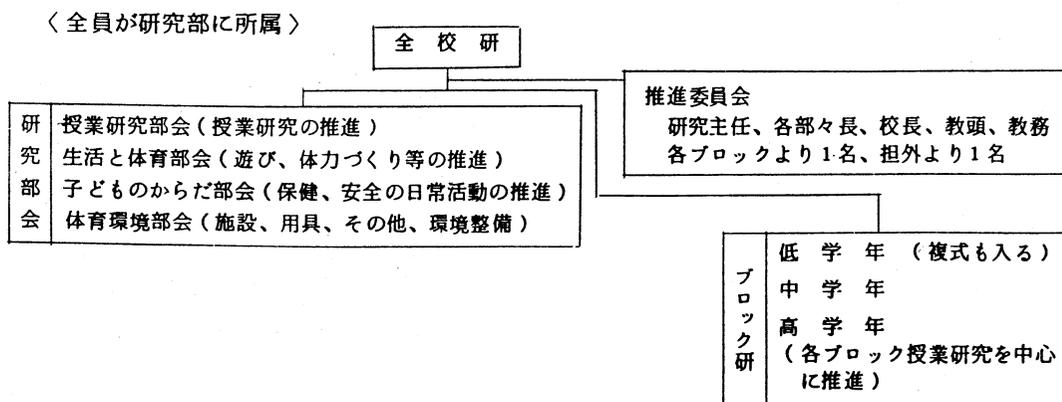
ところが、児童の実態を見ると、分離前の学校での制限された中での行動様式がそのまま残っており、広場や体育館があるのに、教室やろうかでしか遊ばない、遊べない状態であった。多くの子どもが、休み時間になっても、何をすることもなく時を過ごしているのであった。その他の活動や学習においても、集団に埋没し切った行動の消極さ、依頼心の強さが目立ち、もっと明るくたくましく、積極的な活動をする子どもにしたいものだという話し合いが何度か行われた。更に、家庭や地域での遊びの貧しさ、長幼の心の交流の少なさも指摘され、まず、学校での生活でその関係を掘り起こし、思いやりや忍耐、協調心などを育て上げたいものだということになった。そんな討論を元に、学校教育目標に、「ものごとく耐え得る強い子どもの育成」を掲げ、「心身共に健康な子どもの育成」が第一項に据えられることになった。その討論の中で、ゆとりある空間や広場を生かし、明るく粘り強い子ども、意欲的なのびのびと活動する子ども作りを目指し、有効な研究領域として体育を選ぶことにした。

まず、教科体育の充実で、のびのびと活動することの楽しさを体験させ、創意工夫の時間や業間遊びでの遊びの指導を通して上・下学年の交流を促進し、みんなで仲良く遊ぶことの楽しさを体得させる。これらの実践を、学校行事や他教科等での活動にも生かしながら、子どもの姿を、のびのびと意欲的な姿に変えていこうというねらいである。そのためには、楽しく遊ぶための環境づくり、子どもの保健・安全の日常の指導が基礎になることも確認し、「1人で百歩進むより、百人で一歩ずつ着実に進もう。」を合言葉に、昭和54年より研究に入り、満4年が過ぎている。昭和56年10月14日には、上山市委嘱の公開研究会を実施している。

2. 研究組織

全員が、4つの研究部会のいずれかに所属し、研究を進める。また、授業研究の実践を行うために低・中・高の三ブロックに分かれ、それぞれの研究の柱に沿って全員で研究を進めている。下図を参照されたい。

図1 研究組織



3. 研究部会の柱

(1) 授業研究の柱

低学年ブロック 「多様な動きを見つけ、たっぷり運動する楽しい学習」

中学年ブロック 「動きをくふうし、仲間と共に学ぶ楽しい学習」

高学年ブロック 「くふうし合い、協力し合って力を高める楽しい学習」

(2) 生活と体育部会の柱

「運動に親しみ、のびのびと遊ぶ子ども。みんなと仲良く、楽しく遊べる子ども。」の育成

(3) 子どものからだ部会の柱

健康に関心を持ち、体力づくりに励む子どもの育成

(4) 体育環境部会の柱

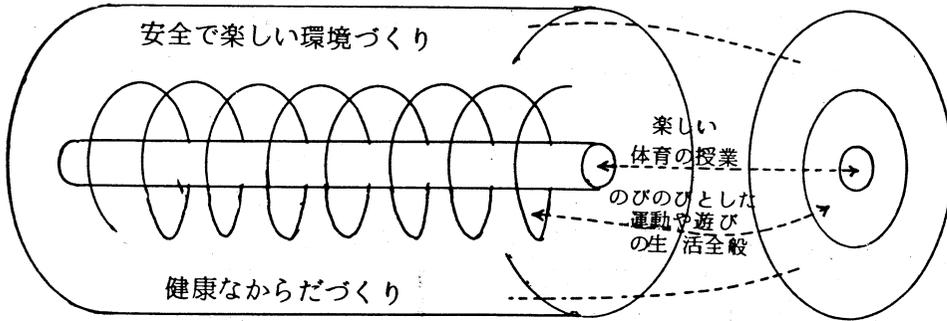
楽しく、安全に運動できる環境づくり

4. 研究内容与方法

(1) 研究領域

教科体育の指導を中心として、それを取りまく子どもの遊びや運動活動の充実を図っていく中で子どもを、のびのびと意欲的な姿に変えていくという願いから、領域を限定していない。従って、教育体育の全領域、創意くふうの時間、業間あそびを研究の主対象とし、統合的に研究を進めている。図に示すと下図のようになる。

図2 研究領域概念図

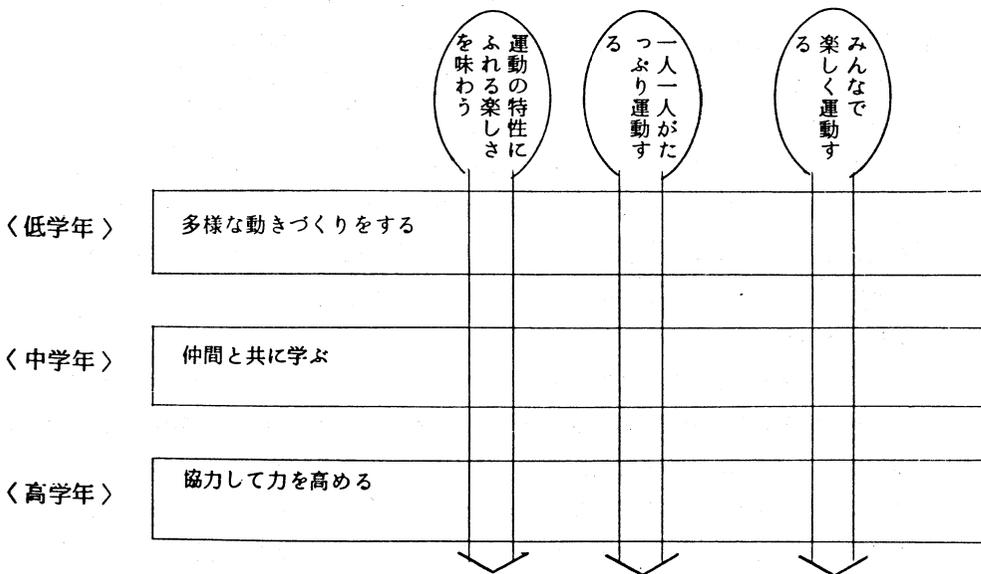


(2) 研究方法と内容

ア. 授業研究

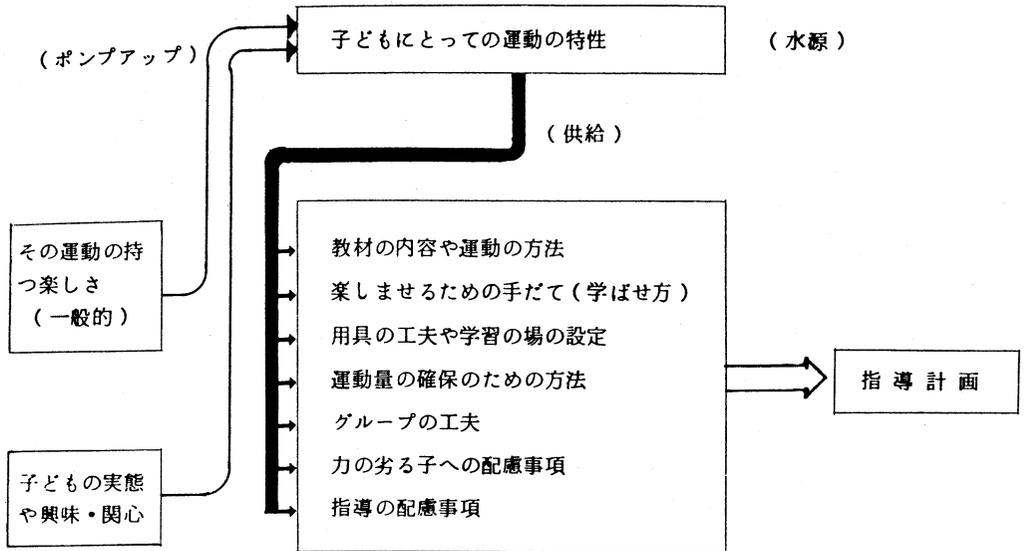
子どもをのびのびと意欲的にするために、まず、体育の授業を楽しめるものに、子どもに運動の楽しさを味あわせることが、大切であると考えます。楽しい授業とは、高田先生によれば、運動量の確保、技能の高まり、新しい発見、仲間と共に、の4つの条件が満たされることが必要である。この考え方で、新指導要領に基づき、運動の特性に触れる楽しさを充足する授業を実践するために、本校では、下図のような考え方で授業研究を進めている。

図3 授業研究の基本的な考え方



具体的な手順としては、下図に示したように、まず、その運動の持つ一般的な楽しさ（特性）と子どもの実態や興味・関心から、子どもにとっての運動特性を明確にして、教材内容や方法を決定し、指導計画の作成へと至る道筋で教材研究が行われる。実践中には、子ども達の様子を勘案、評価して、指導計画や運動内容、方法の変更も有り得るといふ、子ども側に立った授業を目指している。

図4 教材研究の手順概念図



イ. 遊びの指導

のびのびと遊ぶ子どもにしたい。みんなと仲良く遊べる子どもにしたい。そんな考え方から、授業研究と共に、業間遊びと創意くふうの時間を通して、あそびの奨励を行った。その際に、子どもの実態から、上学年から下学年まで幅広く交流できるように、次のような活動を行った。

㍻) 共遊の時度の設定

創意くふうの時間の中心活動として、共遊の時間を設定した。20時間前後になるが、通学班や兄弟学年、兄弟学級、近接学年などの集団を作り、タイヤ転がし、長なわとび、自由遊びなどの運動遊びや、廃品工作、雪の芸術祭その他の文化的な活動も実施している。子どもの考えを大事にするために、リーダー会議などを開き、計画を立てさせている。

(イ) 業間遊びの奨励

本校では、2校時と3校時の間の休みを単なる休けい時間とは考えず、積極的な遊びの時間ととらえている。昭和54年度の15分から、55年度20分、56年度25分間（本鈴までは30分間）と時間を延長し、いろいろな集団で、いろいろな広場で、楽しく遊ぶ体験を多く持たせている。

さらに、遊びを広げ、楽しくするために、竹馬、リム、輪、棒、なわとびを各所に配置して自由に使用できるようにしている。また、朝会時等に、楽しい遊びの紹介や楽しく遊んでいるグループなどを紹介するなどの奨励活動を行っている。

ウ. 子どもの体づくり

授業や遊びを底面から支える条件として、健康で粘り強いからだの育成が重要であり、保健・安全の習慣育成も重要である。骨折などの大きなけが、肥満の予防や対策と保健に関する諸調査や観察・統計などを行い、日常の指導に役立てていくことにしている。

エ. 体育環境づくり

子どもが安全に、楽しく遊び、意欲的に遊びに取りくむような環境づくりを目指す。授業や遊びに必要な用具の整備、ラインその他の整備を実施する。グラウンド周辺の固定施設や遊具・環境の整備を推進する。

5. 研究の成果

(1) 授業研究

運動を子どもの欲求や関心からとらえ、その特性に触れる楽しさを味あわせることが、本校における授業研究の中心主題になっている。今年度までの研究のあゆみの中で、子どもから見た運動特性が徐々に明らかにされつつあり、その楽しさを体験させるための教材づくりが、意欲的に行われてきた。その中で明らかになったことは、次のようなことである。

ア. 自分の現在できることから始め、自己の課題を持ちながら進める学習は楽しい。

イ. 学習の場の設定、教具の工夫が運動の楽しさを引きだし、それが、特性と一致した時は、意欲的に学習に取りくむようになる。例えば、達成型の特性を持つ陸上運動などは、自己の記録がわかるようなラインやテープなどの活用で、子どもは生き生きと学習に取りくむ。

ウ. 自己評価や相互評価のできる学習は、子どもの意欲を引き出す楽しい学習となる。例えば、体操型や克服型の運動で、自己の技能や力の実態を知り、その伸びを認める場合に特に有効となる。その際に、学習カードの使用などで、記録を容易にすることは、更に有効となる。

エ. 子どもの考えが大事にされる学習は、楽しい学習となる。アンケートや会話、そして、子どもの遊びなどから、子どもの心理をさぐり、授業を進める際も、子どもの考えを大事にして、ルールづくりや学習の進展を進めていくことは、子どもの意欲を増す。

オ. 音楽や絵などは、子どもの想像力などを高め、より良い動きづくりや雰囲気づくりにも役立つ。

カ. みんなで運動し、教え合い、助け合って進め、1人1人が認められる学習は楽しい。

などである。アンケートなどによる調査では、徐々に体育に対する意欲が増し、特に、女子や技能の低い子ども達が、だんだん好きになっているといううれしい変容が見られる。

(2) 遊びの指導

感想文などを見ると、初めは、「知らないから遊べない。おもしろくない。」などと言って泣きべそをかいていた子どもが、ようやく手をつなぎ、喜々として走り回るようになり、「休み時間が待ち遠しくなった。」などと書き始めた。遊びの奨励の大きな成果である。特に通学班や兄弟学年でのあそびは活発で、学年が違ったり、これまでよく遊ばなかった人でも、遊ぶのが楽しくなってきたと言う感想を持つようになった。そして、少しずつではあるが、集団が特に指定されていない自由遊びの中で、上・下学年の交流が行われるようになってきている。児童朝会でのあそびの紹介やグループ紹介なども子どもの遊びを活発にしつつある。

(3) 子どもの体づくり

研究を始めた昭和54年度は、頭を打ったり、歯を折ったり、骨折したりの大きな傷害が多く、その原因はいったい何だろうかと真剣に討論し合ったことがある。その結果、子どもの体のつくりや動きが弱くなっているのではないか、新校舎に入ったばかりで適応できないのではないかということになった。安全への配慮をしながらも、もっと積極的に子ども達を活動させていく必要があることに結論が達した。あれから約3年、今では、大きなけがが少なくなり、小さな挫傷などが多くなっており、子ども達の動きが良くなっていることの証明になっている。肥満傾向児も減少しており、成果が見え始めている。

(4) 体育環境づくり

昭和56年10月初めまで、グラウンドができず、固定施設等の総合的な設置までには至らなかったが、ラインの整備、竹馬等の遊び道具の整備で、子ども達が楽しく遊ぶようになった。更に、56年10月にグラウンドが使用可能になり、周辺の整備や固定施設等の計画が完成した。更に、たくましい子どもの育成を目指して、PTAの協力により、古電柱130本と総経費百万円余をかけて、手造り遊具施設「南小ランド」の建設が実施された。57年11月に本年度分が完成し、子ども達は、この遊具に名前をつけ、休み時間になると先を争って遊びに出かけるようになった。

6. 今後の課題

(1) 授業研究

ア. 運動の特性の分析とそれに基づく指導計画の修正と集積

イ. 運動の楽しさを深めるための教師の役割り、評価方法・内容の研究

ウ. 個に応じた指導の徹底

(2) 遊びの指導

ア. 遊び集団の固定化をなくし、多くの子ども達との積極的な交流の推進

イ. 近接学年どうしの遊びの不振の解消

ウ. 創意くふう、業間遊びの定着と積極的推進

(3) 子どもの体づくり

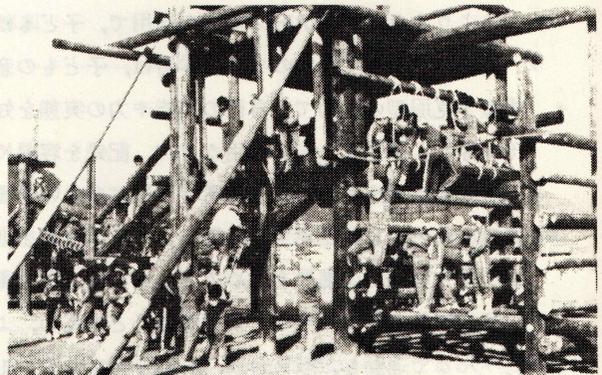
ア. 諸調査、統計の継続的実施

イ. 基本的な保健習慣の育成と肥満児等の指導の継続

(4) 体育環境づくり

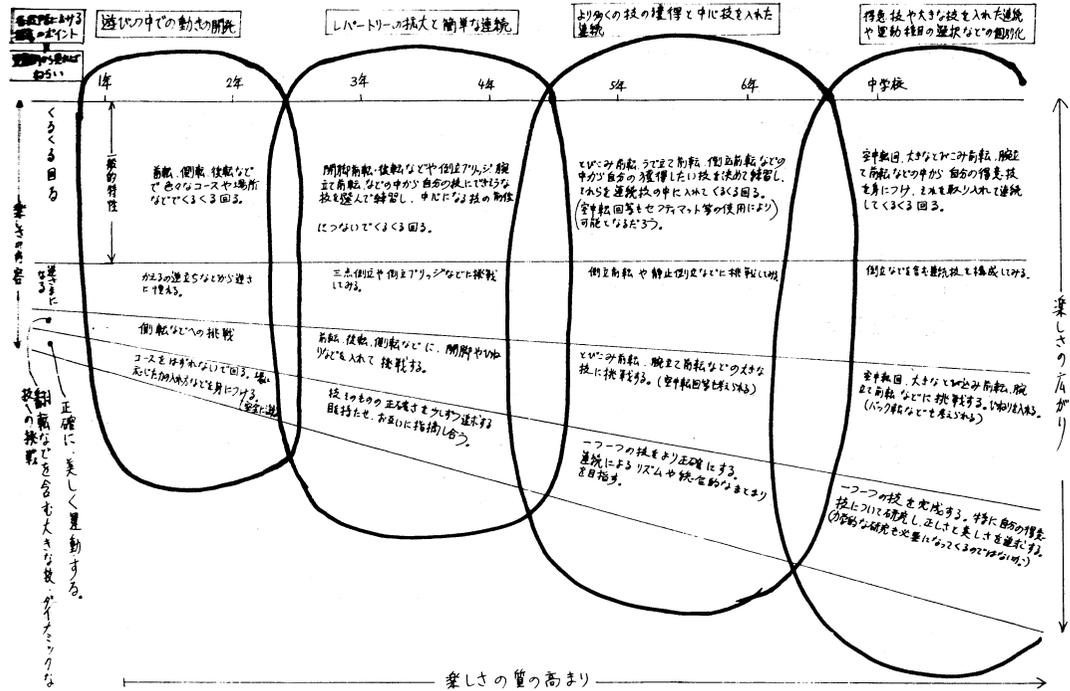
ア. グラウンド周辺の整備と緑化、固定施設（鉄棒等）の設置

イ. 既施設、用具の日常的な点検と整備



南小ランドで遊ぶ子ども達

7. マット運動の楽しさの変容



8. マット運動の指導票

第4学年3組体育科学習指導案

昭和57年5月19日第5校時

指導者 戸田 芳雄

児童数 41名(男21名 女20名)

連続技づくり(マット運動)

I 単元

II 子どもの欲求からみた運動の特性

① 子どもたちは、まず、現在できる技で何回も連続して回ることにより楽しさを感じ、次いで、同じ技の連続の前後に新しい技を入れて、変化のある回り方に楽しさを感じるようになる。さらに、これまでできなかった技ができるようになったり、同じ技が上手にできるようになった時にも楽しさを感じるようになり、それらをスピード感にあふれ、しかも途切れなく連続できるようになった時に大きな楽しさを感じる。

したがって、まず同じ技の連続から始め、次にその前後に別な技を入れるように指導し、さらに自分のできなかった技を練習して取り入れたり、現在できる技を上手になるように練習したりして、連続技を構成させていく。

② 腕の力が弱くて、つぶれてしまったり、目が回ってふらふらするのでいやだという子ども、自分は上手にできないからいやだという子、友だちから笑われたり、批判されたりするのがいやだという子どもたちがいる。そういう子どもたちのために、まず、現在できるものをやらせ、認め、ほめ、励まして自信を持たせたり、グループ中での協力や励ましを大事にして、下手な子でも少しでも上手になったらほめてあげる場(機会)を多くとりながら意欲を高めていく。

Ⅲ 学習のねらいと道筋

マット上で、転回運動を中心としながら、自己の課題を持ち、新しい技を加えて、スピード感があふれ、途切れない連続技をつくり楽しむ。

ねらい1 自分のできる技を何回も連続して練習し、楽しむ。

ねらい2 同じ技の連続を中心としながら、その前後に自分のできる技の中から新しい技を取り入れ、変化のある連続技をくふうして練習する。

ねらい3 自分のできそうな技を練習し、それを取り入れて、連続のしかたをくふう、修正しながら練習する。

ねらい4 自己の課題を持ち、自分の連続技をスピード感があふれ、途切れないものにする。

Ⅳ 単元の学習と指導

① 時間配当

○印本時

時間	数時	1	2	3	4	5	6	7	⑧	9	10	11	12	13
10	—	テ	連続技づくり											発 表 会
20	—	オ												
30	—	リ												
40	—	ン												

② 単元の計画

	校時	学習内容・活動	指 導
は じ め	1	<ol style="list-style-type: none"> 単元の学習計画を立てる。 ○連続技づくりのしかたを考える。 ○安全やグループの協力について考える。 グループづくりをする。 5人×8班……生活班 自分のできる技をやってみる。 柔軟性やバランスを中心とした運動セットの練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師は相談役や観察の役をし、いつでも相談に乗るが、学習は自分たちで進めることを明示する。 ○子どもたちの欲求から、同じ技の連続から始め、次に前後に新しい技を加え、更に、現在できない技に挑戦していくことを話し合わせ、方向づける。 ○協力を重視するため、生活班を活用する ○用具の準備は心を合わせて全員ですばやくやることを、はじめに上手にできた班をほめ、広げていく。 ○教え合いの大事さに気づかせ、教え方の3段階（①できた、できないを言う。②悪い点を指摘する。③解決法を教えてやる）を指示し、意欲づけをする。 ○個人のレポートリーの実態を把握し、技能のつまづきを観察し、グループの中で解決していくように方向づける。 ○かなり挑戦的な内容であるので、少しづつ上手になっていくように、種目別のポイントをモデルを使って指導する。
な か 1	2	<ol style="list-style-type: none"> 自分のできる技を何回も連続して練習し、楽しむ 例) 前転の連続 後転の連続 側転の連続 	<ul style="list-style-type: none"> ○教え合いの様子を観察し、体を動かして追いかけたり、床を使ったりして教え合わせるようにする。 ○マットは約6mで一方通行とする。 ○うでのつき方、頭の入れ方などにつまづきが見

	校時	学習内容・活動	指 導
な か 1	3	倒立ブリッジの連続 腕立て前転の連続	<p>られるので正しく、安全にできるように個人、またはグループに気づかせるような指示や発問をする。</p> <p>○教師は特に教え合いの促進と、下位児童への励ましを中心としていく。</p> <p>特に肥満傾向のU子と恐怖心の強いK子、H子、落ち着きのないN男、I男への声かけを多くして学習に参加させる。</p>
な か 2	4 . 5 . 6	<p>1. 同じ技の連続の前後に自分のできる新しい技を組み入れて練習する。</p> <p>例) 前 後 倒立→(前転の連続) (前転の連続)→腕立て前転 (側転の連続)→ひねりを入れた側転 (後転の連続)→開脚後転 (後転の連続)→三点倒立 とび込み前転→(前転の連続) 倒立→(ブリッジの連続)</p>	<p>○前転の連続には、とび込み前転やうで立て前転、倒立などが入りやすいことを、それをやっている子をモデルにしながら気づかせ、広げていく。</p> <p>○マットを一往復づつ使用させ、たっぷり練習させる。</p> <p>○後転の連続には、開脚やアンテナなどの倒立系がやりやすいことをモデルを使って広げていく。</p> <p>○できない技に挑戦し、失敗ばかりしている子どもでてくるので、もっとやりやすい、自分のできる技に変えさせていく。</p> <p>○各グループで教え合いの上手な班を見つけ、紹介し、広げていくと共に、毎校時のグループの代表の発表を、みんなで励まし、認め合いをさせる。</p>
な か 3	7 . ⑧ 9 . 10	<p>1. 自分の連続技に取り入れたい技に挑戦し、練習する。</p> <p>例) 開脚後転、腕立て前転、とび込み前転、開脚前転、側転、等</p> <p>2. 新しい技を取り入れて連続技を構成し、練習する</p>	<p>○前時までの連続技を発表させ、自分のやれそうな技、やってみたい技を上げさせ、練習に入る。</p> <p>○教師は、ここでは、徹底的に技術指導に力を入れ、グループを巡回しながら子どものつまづきを見つけて補助したり、助言をする。また、グループでの教え合いにも力を入れさせる。</p> <p>○少しでも伸びている子があつたら、ほめ、励まして意欲を高める。</p> <p>○動きが止まったり、やりにくい技同士でつなげている時は、組み合わせる内容や順序を変えさせてみる。</p>
ま と め	11 . 12 . 13	<p>1. 自分の連続技を組み合わせたり、一つ一つの技に磨きをかけたりして、スピード感があふれ、途切れないものにする。</p> <p>2. 自分の連続技を発表し合い、できばえを認め合う。</p>	<p>○技の順序や組み合わせの内容を考えさせ、モデルを使って修正させていく。</p> <p>グループでの話し合いも重視したい。</p> <p>○助走を入れたり、腰や頭による重心の移動により、スピード化に気づかせながらグループに入り、相談相手になる。</p> <p>○下位の子どもには同じ技の連続に1、2回の別のわざを入れさせる。例えば、前転の連続に開脚前転などを入れさせる。</p> <p>○みんなではめ、励まし合わせ、次单元への意欲づけとする。</p>

V 本時の学習と指導 以下紙面の都合にて省略

体育の生活化とたくましい子どもづくり

——自らとりくみ、確かめ、のびる活動を通して——



愛知県豊川市立東部小学校
校長 石黒 芳美



研究主任 教諭 大須賀 久

〒442 愛知県豊川市三谷原町石坪1-1 ☎(05338)6-4346

1. はじめに

子どもが、子どもらしい生活を送る。自由な時間には、さそい合って戸外で遊ぶ。遊びながら、子どもの世界の秩序をつくり、心身ともに健全な育生を図る。

学校は楽しいところで、いつも活気にあふれている。

こんな学校を実現させるために、本校には、“いい汗流そう東部の子、よく遊び、よく働き、よく学ぶ”というキャッチフレーズがあり、日々、実現へと努力し合ってきた。

豊川市の東端に位置し、菊や野菜の温室栽培が盛んな農村地帯を校区に持つ本校が、「学校体育」の領域の研究を始めたのが52年度、以来6カ年、地道な研究を進めてきた。

本校の研究は、生涯体育に結びつく、運動好きな子どもの育成と、温かい人間関係を育てることにより、楽しい学校を実現するとともに、体力づくりを目的として進めて来た。

2. 研究対象

豊川市立東部小学校児童、600名（男子319名、女子281名） 58, 1, 17現在

3. 研究方法

(1) 「学校体育」の研究の中心は、教科体育を充実することである。よい授業の実現をめざし、全職員が単元授業研究に取り組んだ。単元授業研究とは、次のような学習を進めることである。

ア. 運動の特性を子どもの立場に立ってとらえて、運動づくりをする。

イ. 子どもの実態と教師の願いを考え合わせ、単元の目標や学習計画などの構想を立てる。

ウ. 目標達成のための手だてを工夫する。

エ. 毎時間の学習で、子どもも、教師も、学習の確かめをする。

オ. 確かめをくり返すうちに、運動のできばえと、次時の課題を知り、教師は、指導の手だてをさらに工夫する。

カ. 学習を進める見通しを持ち、自主的に学ぶ力を持たせるために、第1時の指導を重視し、その指導法を見つける。

キ. 子どもの手による「発表会」「記録会」を行い、学習の成果を確かめ合う。

(2) 教科体育の発展として、総則体育を実践し、子どもの運動活動を活発に展開した。

ア. 生活にリズムを持たせる日課表の検討をし、運動する場と時間を保障する。

イ. 子ども自身で、運動を楽しむことができるように、「めあて」を持たせる。

ウ. 友達と一緒に、体を動かして遊ぶ楽しさを知らせる。

エ. 感動的な体育的学校行事を運営し、運動の楽しさを知らせる。

オ. 得意な運動種目を1つ以上持たせ、生活に自信を持たせる。

③ 体育の生活化とたくましい子どもづくりを研究主題に設定して進めた本校の研究は、学校生活でできる研究とともに、地域や家庭への広がりをも期待し、運動をすることが好きな子どもの育成を図った。

ア。「体育便り」を月刊で発行し、家庭への広報と理解を得る。

イ。遊び道具づくりや遊び方の紹介、指導を、PTA活動の一つとして位置づける。

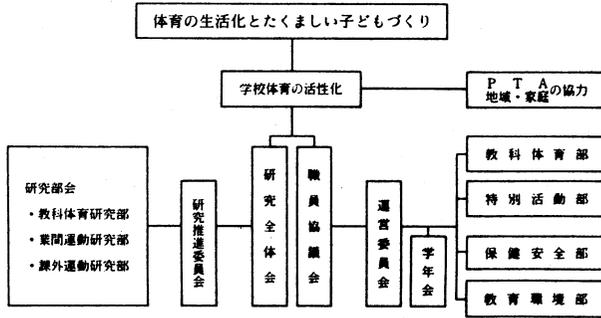
ウ。親子運動の機会を定期的に持ち、発達段階（年齢）に合った運動を親子で楽しむ。

エ。長期休業中、親子かけ足、ボールゲーム大会、親子体操などの運動の場を持ち、親子理解の場とすると共に、きまりよい生活を送るようにする。

オ。基本的な生活習慣を形成するために、生活実態調査と指導をくりかえす。

4. 研究内容

(1) 研究組織

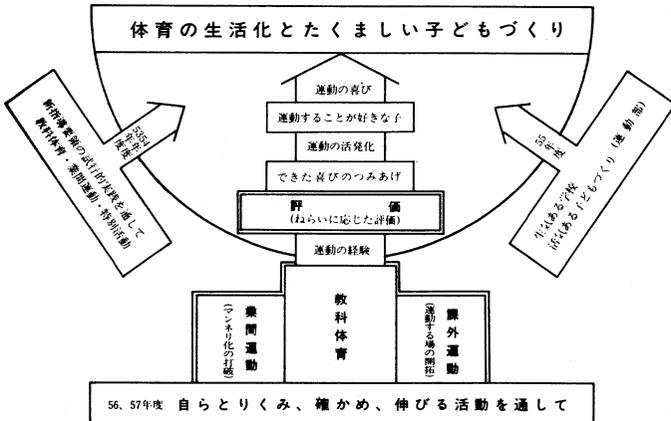


(2) 研究部のめあてと実践

研究部	めあて	内容
教科体育部	子どもが変わるよい授業を求めて	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの変容をめざした単元授業研究 運動の特性をおさえた学習評価
業間運動部	遊びの広がりや深まりを求めて	<ul style="list-style-type: none"> みんなで楽しく遊ぶ仲よしタイム
課外運動部	自己の課題を追求し、やりとげた喜びを求めて	<ul style="list-style-type: none"> めあてをもってがんばるおはようタイム 課外時間を充実させる部活動

(3) 研究主題へのアプローチ

(4) 日課



生活にリズムを

期日	月	火	水	木	金	土
8:10	全校朝の会					
8:20	おはようタイム (10)					
8:40	朝の会					
9:25	第1時 (45)					
9:35	教科体育 (道・球技)					
10:20	第2時 (45)					
10:25	第3時 (45)					
10:40	仲よしタイム (15)					
10:50	第3時 (45)					
11:35	第1時 (45)					
11:45	毎日の会					
12:30	給食 (35)					
13:05	自由遊び (25)					
13:30	自由遊び (25)					
13:50	清掃 (20)					
14:25	第5時 (45)					
14:40	毎日の会					
14:50	自由活動 (45)					
15:15	自由活動 (45)					
15:35	毎日の会					
16:00	自由活動					
16:30	部活動					

5. 研究実践

(1) 教科体育研究

ア 単元授業研究

よい授業の実現をめざす単元授業研究は、運動を丸ごととらえて指導して、子どもの変容と指導法の改善を目標とした。単元授業研究は、次のような方法で進めた。

ア) 授業前

単元の構想づくり……子どもの実態をつかむ。(観察, 先行経験, アンケート)

教材の持つ特性を子どもの立場からとらえる。

単元指導計画を立てる。(教師の願いと指導の手だて)

到達度目標を決める。(技能, 態度)

評価項目の設定をする。

(イ) はじめの段階(1~2時間)

グループ編成……運動に応じたグループを編成する。

(ボール運動の場合は、特に、子ども達が、力が同じと認めるチーム)

男女の混合チームを作成する。

(小学校では、性差より、能力差の方が問題である)

係分担……運動特性に合った係を作る。また、グループのメンバー全員に一人一役の係を担当させる。

学習の見通しを持つ……単元の総時数を知る。

単元の目標を知り、個人の課題とグループの課題を決める。

課題達成のための練習方法を考える。(学習資料を使って学習を深める)

単一時間の学習の進め方と、単元の毎時の学習内容を知る。

教師は個々の能力を把握し、指導の手だてを工夫する。

子どもの立案する学習計画の助言をする。

評価

子どもの実態をつかんだか。

(診断的評価)

ひとりひとりの子どもが目標を持ち、学習の見通しが持てたか。

はじめの段階の指導が、充実したものでなければ、子どもは学習の見通しを持ってない。この段階がきちんと学習できれば、第2時からの学習が、主体的に進められる。個人の課題は、先行経験を基盤にして決められるので、ためしの演技で、修正し最終決定する。努力したらできそうだと思う課題を持たせなければならないので、教師の助言と援助が大きく影響する。器械運動のように「できる」「できない」がはっきりしている運動では、できないと言っている子に対して、特に留意して、課題の決定をさせないと意欲的な取り組みができない。

(ウ) なかの段階(3~6時間)

児童の活動……学習方法を工夫し、課題達成をめざす。

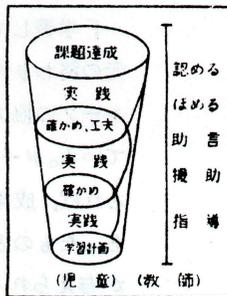
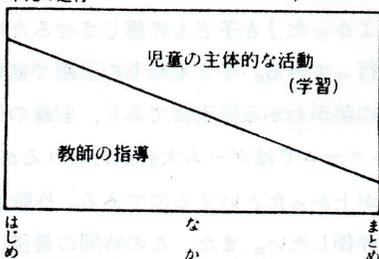
学習のできばえを、自己評価、相互評価によって確かめる。

友達と励まし合い、助け合って運動を楽しむ。

教師の指導……指導法の反省と次時の課題・手だての工夫をする。(教師の助言が、

個人、グループの意欲を高める。) 単元のどの段階であるかを押さえて、子どもの変容や、グループ活動のできばえ、教師の出場を評価する。

児童と教師のかかわり
単元の進行 →



単元の段階における児童の活動と教師のかかわり

評価	楽しく運動できたか。
(形成的評価)	励まし合いや助け合いができたか。
	どれだけ運動したか。
	新しく覚えたこと、できるようになったことは何か。

子どもの学習効果を高めるカギは、到達度、進歩度を重視して学習を進めることである。

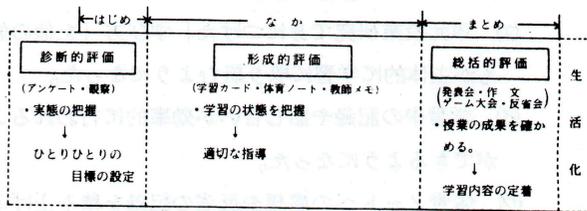
学習のできばえは、一時間一時間、グループカードで確かめ合い、一方、体育ノートに自分の運動の成果や友達の運動のようすを記録し、授業の中で思ったこと、感じたこと、さらに、次時への決意などを記録し、教師に提出する。教師は、子どもの動き、成績、指導上の問題点などを教師メモにとり、次時からの指導の指針とする。また、とにかく、目の届かないグループ活動などについても、巡視しながら記録する。体育ノートは、個人個人への指導と励ましに役立て、意欲を高めるための朱書きをする。教師に対する注文や、技能向上への悩みなどを体育ノートに書くことにより、子どもに教えられ、指導の姿勢を直すこともある。

学習のはじめに決めた、技の到達目標と運動に向かう態度や、その運動に合った学習態度の評価を、毎時行って進めて行く。

学習評価は、学習の成果を確かめるだけで

なく、子どもの運動のひとつひとつを確かめて、進めていかないと学習として成立させるのに効果的ではない。自主的に運動を楽しむ態度を育てるには、毎時の確かめて、伸びを認めることである。

単元全体の評価



評価

技能
・進歩度評価
・到達度評価

知識
技能・態度にかかわる知識

態度
態度を評価する視点

項目	安全	公正	協力	ゲーム	体育	準備運動	球上	球技	水泳	表現
A	B	C	A	B	A	C	A	B	A	C
B	A	A	A	C	B	C	C	B	B	A
C	A	A	A	B	B	C	A	C	C	C

1年 基本の運動 「にんじゃハットリくん」より

技能の評価
学習カード

態度の評価
学習カード

技能	たいど	かたじけなく	安全よく	準備よく	ゲームよく	球上よく	球技よく	水泳よく	表現よく
1じかんめ	○	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
2じかんめ	○	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
3じかんめ	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
4じかんめ	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5じかんめ	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
6じかんめ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

◎よくできた ○できた △もう少し なまえ S・M

(エ) まとめの段階（1～3時間）

「学習してよかった」と子どもに感じさせるために、みんなで認め合う記録会、発表会を単元の終わりに行っている。子どもたちの計画で進められるが、その内容は、工夫、がんばりグループの協力の跡がわかる発表会であり、記録の伸びが喜びとなる記録会となるように配慮している。ボールゲームではゲーム大会が行われるが、チームの作戦がゲームの中で生きるものであれば、成果が上がったといえるのである。作戦通りのゲームができれば、学習の成果が大変あったものと評価したい。また、この時間の最後には、手づくりのメダルや賞状、努力賞などが与えられるが、お互いの努力を認め合うのに大変効果がある。

グループでの反省会では、それぞれの努力の跡を認め合い、グループ活動の楽しさと一緒に運動できた喜びを知ることとなる。先生にほめられた、認めてもらえた、友達のはげましをとってもらい受けとめた、こんなことが、作文に書かれ、運動することの喜びを知る。

評 価	学習成果の確認
(総括的評価)	<ul style="list-style-type: none">• できるようになったことは何か、できなかったことは何か。• 疑問に思ったことは何か。• 認め合って学習できたか。• 次単元への意欲がもてたか。• 学習内容は定着したか。

イ 単元授業研究の成果

学習評価のあり方を求め、よい授業の実現をめざして単元授業研究を進めた結果、次のような成果を収めた。

- (ア) 単元授業研究で身につけた「学び方」を他の領域でも生かすことができるようになり、子どもが主体的に学習に取り組むようになった。
- (イ) 学習中の記録や話し合いが効率的に行われるようになり、リーダーを中心にして、話し合いができるようになった。
- (ウ) 体育ノートへの感想や反省の記録を積み上げることにより、技を上達させるポイントや友達の良さを見る目が育った。
- (エ) 運動ぎらいといって、学習のはじめに仲間に入れなかった子ども、態度面の確かめや、メンバーの暖かい思いやりで、前向きの姿勢に変わり、できる限りの努力をして、運動を楽しむようになった。
- (オ) 確かめのくりかえしは、学習の成果に変化がはっきりと現われ、意欲的に学習へ取り組む子が育つようになった。
- (カ) 単元授業研究を進めた結果、子どもを変容させるカギは、1～2時間めの指導で、学習の見通しを持たせることの成否にあることを理解した。
- (キ) 学習における教師の役割は、単元の前半は、学び方の規律や技の要点を指導することであり、「なか」「まとめ」の段階では、助言、援助、励ましをすることであることを理解し、指導法の改革ができた。

(2) 業間運動研究

ア 仲よしタイム

(ア) 時間

第2時限終了後、15分間を日課表に位置づける。

(イ) 目標

- ・子どもたちが夢中になって遊ぶ「仲よしタイム」を実現する。
- ・遊びの広がりや深まりを求めて、追跡研究をする。
- ・遊び道具の作成、開拓をし、遊びの資料集を作成する。

(ウ) 方法

- ・学級集団で、仲よく、力いっぱい動き、遊ぶ手だてを工夫する。
- ・月曜日に「遊び」を決めて、その後2週間遊ぶ。
- ・毎日、遊んだ後に反省会を持ち、次の日の遊びの方法を決める。
- ・楽しく遊ぶ、よく動くために、遊びの改良をする。
- ・遊びの記録表に記入し、担任の指導を受ける。
- ・2週間の遊びが終った時点で、遊びの反省をし、クラスの遊びをつくる。
- ・土曜日は、自由遊びの日とし、好きな遊びを、好きな子同士で遊ぶ。

(エ) 成果

遊びを多彩にするために、あえて子どもの好むドッチボールをある期間制限し、他の遊びに目を向けさせた。その結果、新しい遊びを知ったり、工夫して楽しく遊ぶ子になってきた。

昔から伝えられた遊びに目を向けるために、けん玉をつくったり、お手玉、竹馬、かっぼんなどをつくり設置した。既製の遊び道具では味わえないおもしろさを知った子どもは、これらの道具で、競争をしたり、教え合って遊ぶ子になった。

「遊びの資料集」に入れた遊びは、①子どもに人気のある遊び、②発達段階に応じた遊び、③子どもが工夫できる遊び、④みんなが楽しく動ける遊び、という条件を満たせるものとした。この「資料集」は月曜日の、遊びの決定をする話し合いで子どもたちに利用された。子どもたちの様子は、次のとおりである。

- ① 数多くの遊びを覚えた。
- ② みんなといっしょに遊ぶ楽しさを知った。
- ③ 工夫して遊ぶ楽しさを知った。
- ④ 全員が体を動かして遊ぶようになった。
- ⑤ 仲よしタイムで覚えた遊びが、他の場面で利用されるようになった。

(オ) 課題

体力づくりを目標に置いてスタートした本校の業間運動も、6カ年の実践で、その考え方も

◎あなたは、仲よしタイムについてどう思いますか。



子どもの声

- ・いろいろな遊びができて楽しい。
- ・みんなで遊べて楽しい。
- ・いい人と遊べない時があるからどちらともいえない。
- ・きまわりを守らない人がいるから楽しくない。

好きな遊び.....

低学年	中学年	高学年	雨天時
かんけり	トッジボール	龜の甲	お手玉
三角ドッジ	かまいれ	方影ドッジ	ハンカチとり
円ばんださらびら	フットベースボール	フットベースボール	あやとり
赤玉白玉くんだん	Sけん	かまいれ	けん玉
ありとくも	ぼうしとりたかめとり	インベーダーゲーム	おぼしき
アスレチックおに	子とりじゃんけん	真なわ	いすとり
じゃけんじんとり	色おに	ともえおに	玉おくり
空を飛たいおにごっこ	真なわ	ぼうしとりたかめとり	フルーツバスケット
手つなぎおに	アスレチックおに	Sけん	ハンカチおとし
かげふみ	インベーダーゲーム	じんとり	じゃんけんじんとり
山ぞく	さいしよの一步	ドスうま	
くつとり	水へいぼっこ (ドッカン)	せ中おに	
せつおに		おんふぼうしとり	

内容も大きく変わって来た。子どもの立場に立って、主体的に外に出て遊ぶ業間をめざして進めて来た現在、「遊びは本来子どものもの」との考え方になり、教師の遊びに対するかかわりも、低学年はガキ大将に、中学年は子どもと共に、高学年は脇役にと、学年に応じたものとなったが、地についた活動を今後も続けていくには、多くの課題をかかえている。①遊び場所のローテーションの再考、②遊び集団の多様化、③リーダーの養成、④楽しい遊びの開拓、⑤夢中になって遊べない子への配慮などがあるが、この仲よしタイムでの、子どもの健全育成への価値は、はかりしれないものがあるので、一つ一つ実践を通して解決し、次への発展をめざしたい。

(3) 課外運動研究

本校では、教科体育と業間運動以外の体育活動を課外運動と呼んでいる。課外運動の研究領域は、業前のおはようタイムと、業後の部活動、さらに、長期休業中の親子運動と、10万KM走破をめざす、かけ足運動である。

ア. おはようタイム (8:10~8:20)

自ら課題を持ち、グループまたは学級ごとに協力し、励まし合いながら運動する。

「おはようタイムがんばり表」に毎日運動の成果を記録し、1週間ごとに、できばえを確かめる。

子どもは、自分のめあてを、体力補充、教科体育の補充・発展、遊具・施設に親しむ、体育的
学校行事、部活動などとの関係で、それぞれ立てる。

子ども達の意欲を高めるために、学級担任、部活動指導者の助言、グループの話し合い、遊具
施設の充実、チャンピオン大会の開催、記録の掲示などの手だてを持った。

1週間の確かめを自分でした後、担任に提出し、朱書きの助言を受ける。

子どもは、おはようタイムについて、右図のよ
うな意識を持って、毎日運動を行っている。

イ. 部活動

4年生以上の子ども全員が入部して、授業後毎日活動する。

年間計画に基づいて、キャプテンを中心に、自主的に活動する。

学校代表として、ふさわしい態度を身につけたり、技能の向上をめざした厳しい練習をする。

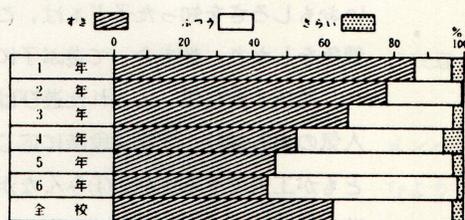
記録会、発表会を持ったり、大会に参加して、活動の成果を確かめる。

本年が、部活動を発足して3年目、選手制度をとっていた時に比べ、全員に大会や記録会へ参加の機会が与えられ、教育的にも、有意義であると評価している。また、課外時間の有効な活用と共に運動量を増すことができた。

学校代表としての技能を持つためには、苦しい

できた喜びを味わうおはようタイム

あなたはおはようタイムについてどう思いますか



すきなわけ (上位3つ)

1年	運動するのが好き	やれないことができるようになった	遊具が面白い
2年	いろいろできる	できないものができるようになった	おもしろい 楽しい
3年	運動が楽しく おもしろい	できないことがよく できるようになった	いろいろな運動が できるようになる
4年	運動が好き	できるようになった	楽しい
5年	いろいろな種目が できる	できないことがいっ ぱい練習できる	めあての種目が うまくなる
6年	みんなといっしょ に運動できる	めあてができるよ うになる	できないことに挑戦 できておもしろい

練習に耐える場面もあったが、それをのりこえて大会に出場した喜びは、子どもにとって大変なものである。選手制度を採っていないために、成績ががんばりしくなく、発足時の主旨を危ぶむこともあったが、3年間実施してみて、それから評価しようとの共通理解に立って続けてきた。本年がその3年目であった。水泳部の優勝や、器械、サッカー、陸上部などの好成績など、成績面での評価についても、それなりの成績を収めたが、それよりも、一人一人の子に、自信を持たせたことが何よりの成果だった。

57年度、部活動

陸上	67名
器械運動	53名
サッカー	43名
バスケットボール	33名
水泳(夏季)	45名
合唱	19名
バトントワーリング	16名
ドラム	24名
トランペット	46名

ウ。10万KM走破、かけ足運動

「きたえよう心と体」をスローガンに、地球一周をめざして53年度から全校で走ったかけ足運動も、本年は「ねばり強い心とじょうぶな体をつくらう」を合言葉に、15万KMを走りとげている。

(ア) 期間 11月末～3月いっぱい

(イ) ねらい

- ・全校児童が共通の目標に向かって挑戦し、やりとげた喜びを体験させる。
- ・最後までやり通す気力を養成する。
- ・冬季の体育の生活化をめざす。

(ウ) 方法

- ・各自めあてをもって取り組み、かけ足ががんばり表や地図に毎日記録する。
- ・2週間ごとに、全校の走行距離を集計する。
- ・最低の目標をクラス全員が達成した時に、学級表彰する。
- ・15万KMを走破した時に、全校で祝賀会を持つ。

(エ) 設定時間

- ・おはようタイム、仲よしタイム(冬季のみ)、自由時間、帰宅後
- ・部活動、冬休み(親子かけ足)

6. 研究結果

6カ年の研究を続けてきた本校は、常に子どものよりよき変容、運動することが好きな子の育成をめざしてきた。その結果、次のような成果を上げた。

- (1) 子どもの生活に活気が見られ、きびきびした行動が目立ってきた。
- (2) グループ活動などを通して、暖かい人間関係が育てられた。
- (3) 学習に対する教師の熱心な構えが、敏感に子どもの姿勢に反映し、主体的に学ぶ態度がでてきた。
- (4) できる喜びの積み重ねは、子どもを運動好きな子に変え、子どもらしい行動が多くとれるようになった。
- (5) 態度面を重視した学習や体育活動を展開した結果、生気みなぎる学校、活気ある学校へと変わってきた。
- (6) グループや個人の様子をカードで知った教師は、きめ細かな指導を行うことができた。
- (7) 教師自身に、個を見る目、運動の持つ特性を見る目が育ち、的確な計画と手だてをみつけられるようになった。

- (8) 到達度を重視した学習を進めることにより、通知表の改訂の必要性が生まれ、従来の相対評価による通知表を改訂する糸口となった。
- (9) 生活をリズムカルに送るようになり、基本的な生活が習慣づけられた。
- (10) 部活動、15万KMかけ足等を通して、子ども達は、めあてを達成する喜びを味わった。同時に少少の苦しさを克服していく、たくましい心が育った。

7. 反省と今後の課題

6カ年の研究も、昨年10月の研究発表会（2回目）で、一応の区切りをつけた。「子どもが変わるには、教師が変わることだ。」を合言葉に、子どものためになることは何か、を見つめながら苦しさをものりこえて進めてきた。

「単元授業研究こそ、教育の原点だ。これこそ、本当に子どもを変えることである。」と指導案づくりにも努力し、研究会を行った。

子どもは、運動ができた時が最高の喜びであり、教師は、子どもが変わった時が、喜びであった。また研究のやりがいを感じた時であった。

地域の体育研究の中心校となるには、まだまだ力不足であり、やりのこした研究や、今までの研究をふりかえり、今後も深めていく努力をしなければならない。

運動の確かめ方（学習評価研究）も、まだほんのスタートラインについたところである。生活化を進め、運動好きな子の育成を図るためには、一人一人の子を、じっくり見つめ、子どもの実態に合った手だてをもっともっと研究していかなければならない。

「継続は力なり」をモットーに、子どもの実態を見つめ、地道な活動を今後も続けていきたいと思う。

研究同人 57年度

校長	石黒芳美	教頭	小林弘司	教務主任	中野靖生	校務主任	神谷好威
研究主任	大須賀 久						
教科体育研究部長	石黒勢津子 以下8名						
業間運動研究部長	足立勝弘 以下6名						
課外運動研究部長	神谷好威 以下5名						

ひとりひとりが、すすんでとりくむ体力づくりをどう進めるか



和歌山県東牟婁郡
太地町立太地小学校
学校長 浜中 節夫



研究主任 教諭 松下 稔

〒649-51 和歌山県東牟婁郡太地町3436 ☎(073559)2029

1. 研究目的

本校児童の体位・体力を考察するとき、体位は県平均をやや上まわっているものの、体力については満足のできる状態ではなかった。

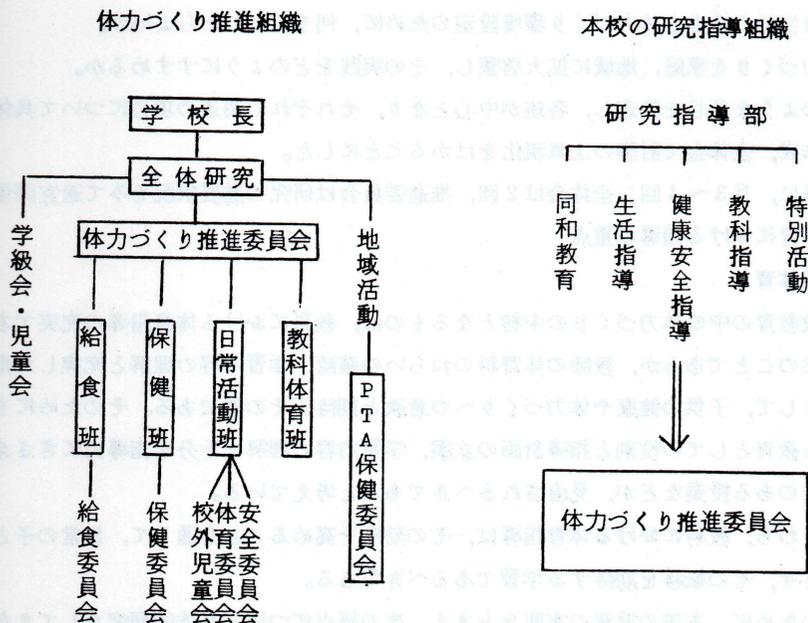
また、虫歯の治療率の低さ、土ふまずの形成や体の機能のおくれ等も無視できない状態で、これらが学習面にも影響し、受動的で依存的な傾向がつよく、生活全般に積極性に欠ける点が多く見受けられた。

こうした児童の実態の上にとって、①たくましく生きる力、②すすんで自分を鍛え、主体的に学習する態度、③さいごまでやりとげる忍耐力、④思いやりをもって協調しながらともに伸びようとする心、等を育成し、人間性豊かな児童を育てることを課題とし、その課題にせまる引き金として、体力づくりにとり組むことにした。

2. 研究内容与方法

(1) 研究組織と運営

研究の推進が円滑で、内容の深まりが期待でき、しかも、研究の積み上げが児童に直接反映していくよう留意して、研究の組織づくりと運営を考えた。



ア. 体力づくり推進委員会は、健康安全指導部があたり、研究推進の方向づけ、各班の連絡調整など全般的な企画と運営を行う。

イ. 4つの班（教科体育班、日常活動班、保健班、給食班）は、関係する内容について研究し原案を作成、全体会で討議の上、体力づくりの推進をはかる。

関連する児童の委員会活動の指導助言も行い、その活動を活発なものとする。

4つの班には、全職員が分散して所属し、班長は体力推進委員会の委員があたる。

(2) 研究項目の設定

研究主題にせまるためには、「何を、いつ、どのような方法で、どうするか、そしてどうなったか」といったことについての具現化をはからなければならない。

本校では、次の研究項目を設け、相互の関連をはかりながら研究をすすめることにした。

- 児童が主体的に喜んで、体育学習に参加するための手だてはどうすればよいか。
- 体育の内容をどうとらえ指導するか。
- 児童が体のことを認識する保健学習はどうすればよいか。
- 学級指導における保健指導、安全指導、給食指導はどうすればよいか。
- 保健衛生、正しい生活習慣、安全な生活などを身につけさせるために、何をどうしていったらよいか。
- 体力づくりに、給食指導をどうとらえ、どう指導するか。
- 教科等の時間以外のところで、体力づくりをどう進めるか。
- 日常生活の中で、どう体力を高めるか。
- 児童の自主性を伸長させる児童会活動をどう指導するか。
- 体位・体力・運動能力・健康状態を把握するための測定・調査・分析をどうすすめるか。
- 調査分析により、どのような体力づくりの計画が必要か。
- 健康生活の推進と体力づくり環境設定のために、何をどうしたらよいか。
- 体力づくりを家庭、地域に拡大啓蒙し、その実践をどのようにすすめるか。

以上のような項目を設定し、各班が中心となり、それぞれの関連の項目について具体的に研究し原案を作成、全体会で討議の上具現化をはかることにした。

班会議は、月3～4回、全体会は2回、推進委員会は研究の進展状況をみて適宜開催する。

(3) 教科体育における指導の重点

ア. 教科体育

学校教育の中の体力づくりの中核となるものは、教科における体育指導の充実である。きわめて当然のことであるが、教師の体育科のねらいの確認、学習内容の理解と充実した指導力、それにもまして、子供の健康や体力づくりへの意欲と期待がその鍵である。そのためにも、体育科における教育としての役割と指導計画の立案、学習内容の理解と十分な指導力にささえられた創意と工夫のある授業などが、見直されるべきであると考えている。

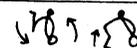
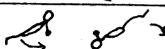
すなわち、教科における体育指導は、その効率を高めることを通して、日常の子どもの生活と関連させ、その転移を期待する学習であるべきである。

そのために、本校の児童の実態をふまえ、次の諸点について具体的研究をしてきた。

- 体力、運動能力の調査の結果から、懸垂力・握力・腹筋力の劣性が特に目立つ。そのため、力試しの運動・鉄棒運動・平行棒・肋木運動の指導に力を注いでいる。
- 瞬発力、柔軟性がなく、身体が固いために不安定で、自身の身体が調整できないため、柔軟体操・マット運動・とび箱運動を重点指導している。
- 個人個人の身体を知り、技能を高める意欲、楽しんでおこなう体育指導をめざして「個人カード」を持たせ、高揚をはかっている。
- 低・中学年は、「基本の運動」の特性を生かし、よりよい動きができるように指導している。
- 新学習指導要領の研究と体育科年間指導計画の作成。
- 器械運動の系統と指導段階、評価の研究及び実技研修。
- 児童が体のことを認識するためにも、保健学習を重視し、年間計画を立案して指導にあっている。

(個人カードの1例)

体育カード〈NO1〉

鉄棒運動 課題表		太地小()年[]						練習課題		
No	学習課題	学期						1学期	2	3
		1	2	3	4	5	6			
1	腕立てとび上がり									
2	足ぬき回り									
3	振りとび									
4	さか上がり									
5	足かけ振り上がり									
6	腕立て後転							4	5	6
7	足かけ上がり									
8	踏み越しおり									
9	足かけ前転									
10	転向前おり									
11	腕立て前転									

<記入方法>◎大変よくできた ○よくできた
●や、とできた △もう少しでできた
×できない

1. 基本の運動を生かす体力づくり

基本の運動は、子どもの遊びを通してとらえられる低次の運動であり、技能の獲得というよりも、自由な発想によって自分の体を思うように動かすことに楽しさや喜びを追求する運動である。従って、子どものねらいは、遊びそのものに熱中し楽しむことにある。

しかし、指導のねらいは、子どもが単に体を動かし遊んで楽しければよいというものではない。自由な遊びを行わせただけで体力や技能は高まらないし、勝手気ままな遊びは持続性がなく、学習としては成立しない。

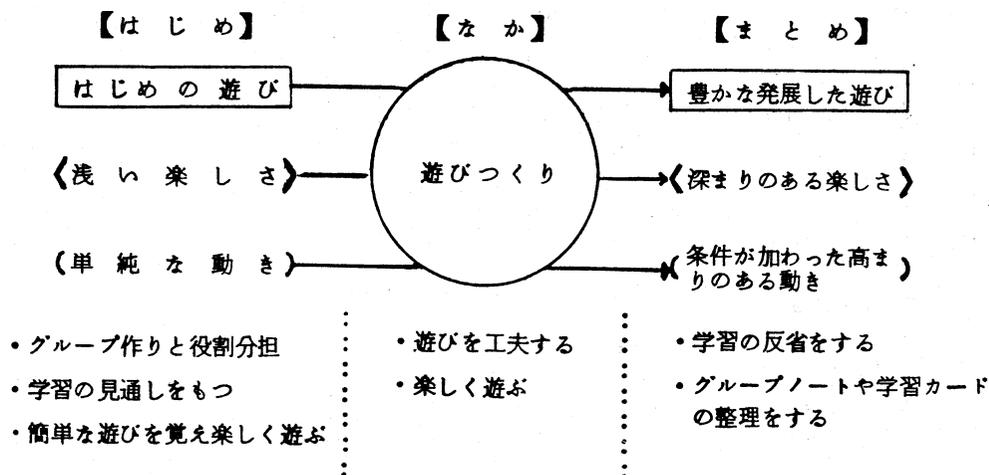
つまり、その運動の課題を遊びを通してわからせ、意味のある遊びとすること。さらに、よい動きからよりよい動きにまで高めることが大切である。

(よい動きとは、リズムカルな動き、スピードのある動き、ダイナミックな動き、バランスのよい動き、タイミングのよい動きをいう。)

これらの積み重ねを大切にし、その結果、将来の各種の運動の基礎となる能力や態度を育成しようとするのが、基本の運動である。

この基本の運動は、本校の体力づくり活動の中でとり上げる要素が非常に多くあり、教科体育の中ではもちろん、本校が日常的におこなっている「朝の運動」の中でもとり入れるよう、その研究をすすめている。

基本の運動の学習課程



(4) 日常活動の中での体力づくり

本校が体力づくりのために、日常的にとり組んでいる身体活動の主なものは、「朝の運動」「歩き運動」「はだか・はだし運動」などである。その他に、冬期の「乾布まさつ」や、昼休み・放課後の「遊具を使った遊び」「そうじ」「給食指導」なども、体力づくりの一環としてとり組んでいる。以上のような取り組みを始めた訳はいくつかあるが、それらのうち主なものを挙げてみると次の通りである。

○ 児童の体力や体の機能が低下してきた。

全国的にあらわれてきた傾向であるが、生活が便利になり、子供たちの体をきたえるような労働がなくなってきた。一昔前なら、家に帰るといろいろな仕事がまわって、働く中で、自然に筋力や手足の機能が発達してきたと考えられるが、今はそういう仕事がなくなり、子供の体力や体の機能の低下が目立ってきたと考えられる。本校の児童もそのような傾向にあり、事実、体力テストなどにも、そうしたことの結果と思われる現象がおこっている。

○ 戸外で元気に遊ぶことが少なくなってきた。

以前の子供たちの遊びの中には、自然の中でおもいきり体をつかう遊びがあったが、最近の子供たちの多くは、戸外で力いっぱい遊ぶのではなく、家の中にとじこもり、テレビを見たりゲームをしたりして遊ぶようになってきている。そのことは、学校生活の中にも現れ、昼休みなどの休憩時間に運動場で遊ばないで、校舎内でたむろする子供がふえてきた。

○ 病気に対する抵抗力がなく、かぜをひきやすい子が多くなってきた。

以前は、郡内の小学校で真っ先に流感にやられるのは本校であり、当時は寒くなると必要以上に衣服をきて、ぶくぶくした格好で登校していた。

以上のようなことが重なって、子どもの体力や気力の不足が顕在化し、そのことが学習面にも影響して「1時間目からあくびをする」、授業中「集中力がない」「あきっぽい」「ねばりがない」などの現象となってあらわれ、切実な問題となってきた。

そこで、教科体育の時間だけでなく、日常的に子供たちの体を鍛えるような活動を、学校教育の中にとり入れていかなければならないと考え、昭和52年前後から、体力づくりのとり組みを積極的にはじめたのである。

ア. 朝の運動

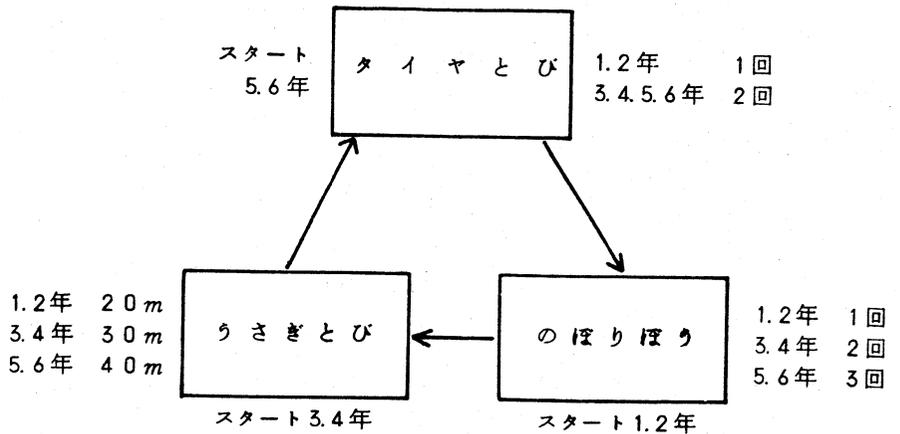
現在、「朝の運動」を、朝の会の前に全校一斉に実施している。以前、冬期は4限終了後に実施していたこともあったが、昼食前の空腹時で適当でないと考え、朝の運動を授業の前に実施するようになった。

もともと「朝の運動」のねらいの中には、身体活動をすることによって脳の働きを活発にするということもあった。事実、朝「朝の運動」をやり始めてから、何人かの児童を抽出して、脳の働き（活動水準）を測定するフリッカー値測定器でフリッカー値を測定すると、朝学校に登校してきた時よりも、朝の運動終了後の方がフリッカー値が高いという結果が出た。それ以後、朝、身体活動をすることによって子供たちの頭をすっきりさせ、1限目の授業にとりかかることが、子供たちの学習に効果があるという確信を得て、朝の運動を実施してきた。

○ 朝の運動の内容

朝の運動の中味は下図に示す通りである。運動のコースには「タイヤコース」と「走りコース」があり、奇数学年と偶数学年が、それぞれのコース運動を交代で実施している。このような形式で実施をはじめたのは昭和53年度からで、体力テストの結果、背筋力・跳力が弱かったので、それを補強するような種目を多くとり入れている。

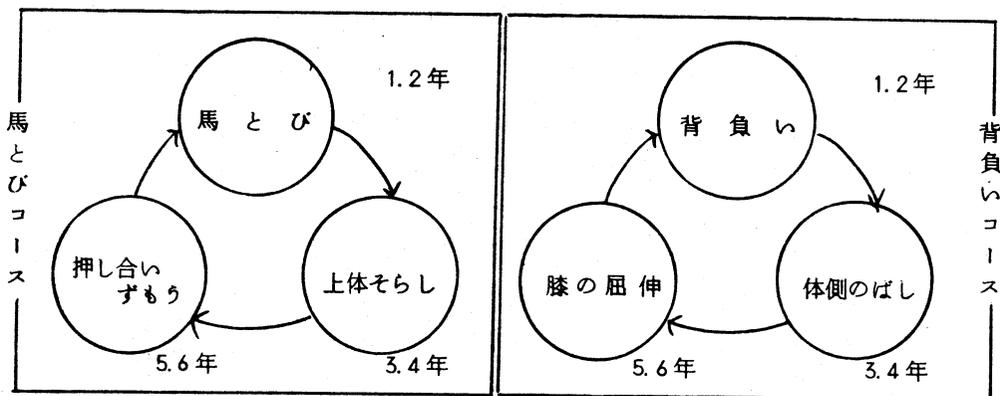
朝の運動コース (タイヤコースの例)



冬朝の運動

冬になると運動場が凍り、平常の朝の運動ができないので、昭和55年度から、次のような朝の運動を実施するようになった。この運動では、本校の児童の実態から、主に背筋力・腕力柔軟性を高めるような種目を取り入れている。

朝の運動コース(冬)



雨の日の朝の運動

朝の運動は、毎日継続してやった方がよいという考えから、雨の日や運動場が湿って使えないときでも、廊下でできる運動を実施するようになった。(昭和56年度より)

1. 歩き運動

本校児童の実態から、日常生活の中で歩くことをもっと重視して、歩く機会を意図的に作る必要があり、次のようなねらいをもって昭和52年度から実施している。

- 足腰を強くし、有酸素的能力を向上させ持久力をつけさせる。

- 毎日努力を積み重ね、最後までやり通すことの大切さや喜びを実感させる。

(方法)

運動場を中心に設定した1周250mの歩き運動コースを、始業前、休憩時間、放課後の自由時間に、自分のペースでさっさと歩く(走ってもよい)ことにしている。1日4周(1km)を学校の基準として、最低これだけは回るようにしている。まわった距離がはっきりわかるように、子供たちひとりひとりに「歩き運動カード」を持たせて、色をぬらしている。

毎年、子供たちが目指すカードの目的地を東京にしたり、大阪往復のコースにしたり、和歌山県1周にしたりして、地理的な関心も持たせて子供たちのやる気を喚起している。また、1周250mの歩きコースも、階段あり、坂道ありで変化にとんでいる。児童の自主性にまかせたこの歩き運動は、いろいろな手だてをしなくては放任ということになり、結局は何もしなかったということになり勝ちである。

学級指導において、歩き運動の目的をしっかりとつかみ、創意と工夫に満ちた取り組みをした場合は成果があがっている。

以下は、その取り組みの1例である。

- 低学年においては学級独自の記録用紙をつくり、それに歩き運動をした時間毎に回った回数を記入させ、終りの会で集計し、「歩き運動カード」に記入するようにしている。
- グループ競争をとり入れ、励まし合いながら努力するようにしている。
- 高学年の場合は、学級の基準を設定したり、グラフ化して意欲的にとり組むようにしている。
- 朝の会で「今日の基準」を確認し、終りの会ではそれを点検し反省している。

ウ. はだか・はだし運動

(ねらい)

- 皮ふを直接外気にふれさせることにより、皮ふの感覚をつよめ、暑さ寒さに対して自分の体をコントロールする力をつけ、適応力をつけることによって、じゅうぶんな体をつくる。
- 足の裏の刺激によって体の調子を整える。
- 足の機能を向上させる。(土ふまずの形成、指の機能)
- 土の感触を知り、土に親しませる。
- すぐ衣服や薬にたよるといような、外からの保護にたよるのではなく、できるだけ自分の力で対処するという生活態度を育てる。
- はだか運動は昭和51年度、はだし運動は53年度から実施している。

(方法)

- 学校にいる間、男子はランニングシャツと短パン、女子はノースリーブシャツと短パン又はニッカーズで過ごす。冬は、その上に長袖か半袖のシャツを着てもよい。
- 朝の運動や昼休み時間は全員はだしになり、2年以下の女子と男子全員が上半身はだかになって、運動したり遊んだりしている。
- はだか運動は年間通して実施しているが、特別に寒い日はシャツを着るようにしている。
- 土ふまずの形成をみるための足裏調査は、夏休みの登校日を利用して実施している。
- はだか、うす着運動とも関連して、児童の服装の検査もおこない、上記のような服装の徹底

をはかっている。

エ. 遊具を使った遊び

遊びの中で体力・運動能力がつくことに注目し、遊具を使った遊びの中から体力が向上してくるであろうことに期待して、平行棒やクライミングネット、リングジム、タイヤなどの遊具を使った遊びを大いに奨励している。

そうした中で、子供たちは遊具を使った独創的な遊びを考え出して、遊ぶようになってきた。

(器具運動カードの1例)

① 登り棒 できる…○ できない…× ○1こで1点

また、児童が自主的に取り組むように「体力手帳」の中へ、器具を使った運動について、いろいろな運動例を示し、それに挑戦し克服するように指導している。

種目	学年		年		年	
	6月	11月	6月	11月	6月	11月
1 手と足で登る						
2 手と足で登る(3回連続して)						
3 手だけで登る						
4 手だけで登る(3回連続して)						
5 横わたりをする						
得点						

オ. 乾布まさつ

(ねらい)

乾布まさつをすることによって寒さに対する抵抗力を強めるとともに、はだかで寒い外へ出るときの気持ちの準備をととのえる。

(方法)

12月から3月までの寒い期間、給食後の5分間、教室や廊下の窓を開け全校一斉に、放送に合わせて腕・胸・背中・足の順にタオルで体をこする。

3. 研究の成果と今後の課題

(1) 成果として考えられるもの

- 体力づくりの実践を過して、教育課程の研究がすすんだ。
- 教科体育や学級指導の指導内容、指導法の研究を深めることができる。
- 児童が体力づくりの諸活動を通して、体力づくりの意義や楽しさを実感し、体力づくりに進んでとり組む姿が見られるようになった。
- 児童の中に、自分の体を自分で管理しようとする態度がみられるようになってきた。
- 家庭の理解も深まり、学校における日常的な諸活動が定着してきた。

(2) 今後の課題

- 児童ひとりひとりが生かされる体力づくりの研究。
- 体力づくりの生活化の研究。
- 体力づくりを更に家庭、地域に浸透させるための方策。
- 児童の、手・腕の筋力・腹筋・背筋の強化の方策。

- う歯対策の強化。

4. おわりに

以上述べてきたほか、保健指導・安全指導・給食指導・学校行事等を研究主題に結びつけ、計画的に立案、実施しているが、実践方法等については紙面の都合もあり割愛した。

尚、本校は、昭和54年度より56年度にわたって、文部省から「体力づくり推進校」の指定をうけて研究、実践を続けてきたが、この研究を深められた当時の校長・教頭・体育主任等が退職・転任をされ、今は本校に在職していないことを付記したい。

現在は、このような先達のあとを引き継ぎながら、より高いものをめざして、模索しながら体力づくりに取り組んでいる。

研究同人

浜中 節夫	嶋原 和夫	山本 倍子
水谷 三男	池本 敏子	坪野 泉
浜口 晃行	土山 達之	大西喜作子
◎松下 稔	尾崎 君代	糸川 千鶴
向畑 和子	上 正久	山下 三保
向山知勢子	杉本 佳紀	大堀 恵
西 明美	道本 幸浩	

前田 廣
太田 桂三
平澤 康男
浜 登喜子

(S.56年度 退職・転任)

強いからだと豊かな心を求めて

—ひとりひとりが喜んで参加する運動学習—



島根県江津市立郷田小学校
校長 坂根 弘之



研究主任 教諭 林 忠

〒695 島根県江津市江津町536番地 ☎(08555)2-2114

1. はじめに

かつては、市内最大規模であった本校は、あらゆる教育活動で活気を呈し、なかなづく対外試合では常勝校として、自他ともに認める市の中心的存在であった。しかし、ここ10数年間、市の発展とともにドーナツ現象により児童数は急減した。これに反し、数校の小学校は、児童が増え、既に本校を大きく上まわっている。そんな状況の中であって、昭和49年頃より児童の体位、体力も低下し、対外試合も完敗で児童の士気にもふりがちであった。そこで53年度より再び体育活動を重視し、54年度より、「ひとりひとりが喜んで参加する運動学習」という主題をかかげ、体育の研究に取り組んできた。

2. 主題のめざすもの

(1) 強いからだと豊かな心

「強いからだと美しい心」をもった児童の育成を教育目標としてその具現化につとめているが、体力の面で、特に、柔軟性、筋持久力がやや低下の傾向にあり、必ずしも、適切な発達がなされているとは言いがたい。また、生活面では、主体性の欠如、忍耐力、実行力の不足、連帯意識の低下など人間性の歪みを示す多くの要因が日常生活に見られ、ゆたかさ、たくましさをめざし、心のふれあう教育の研究と実践が急務である。

(2) 体育の日常化、生活化

日常化、生活化につながる運動を楽しむ自主的、自発的態度は、教科体育がその基本であり、ひとりひとりの能力に適した学習の課題を具体化し、課題に立ち向って挑戦し、克服した達成感、成就感を十分味わわせる指導を考えていかなければならない。あわせて、業間運動などの教科外体育の充実と家庭や地域への広がりを図るとともに、より望ましい体育的環境づくりに留意するなど、日常の体育的活動が一層促進されるよう努めたい。

(3) 個性、能力の伸長

近年、とかく詰め込み知識主義の弊害から、児童の調和的な発達がおろそかになり、多くの児童が学習生活上に不適応現象を示し、落ちこぼれを出す教育が問題視されている。今回の教育課程の改善のねらいの一つとして、「児童、生徒の個性・能力に応じた教育」の必要性が、特に強調されている所以である。

学習生活における不適応現象による落ちこぼれをなくし、どの子も大切に、どの子にもある可能性を精いっぱい伸ばすためには、まず、ひとりひとりの児童の実態を的確にとらえ、学習集団として望ましい学級づくりの中で、ひとりひとりの児童のやる気を育てながら、ひとりひとりを生かす授業のあり方を追求しなければならない。

(4) 基本的行動様式の習得

体育科は、その方法的な特性から言って、集団として行動する場が多く、集団行動の主な行動様式を習熟する上で、その成果が最も期待できる教科である。本校児童は、集団としての秩序正しいきびきびした行動や、集団の一員としての適切な行動がとれない場合があり、体育学習を中心として意図的、継続的な取り組みの中で育てなければならない。

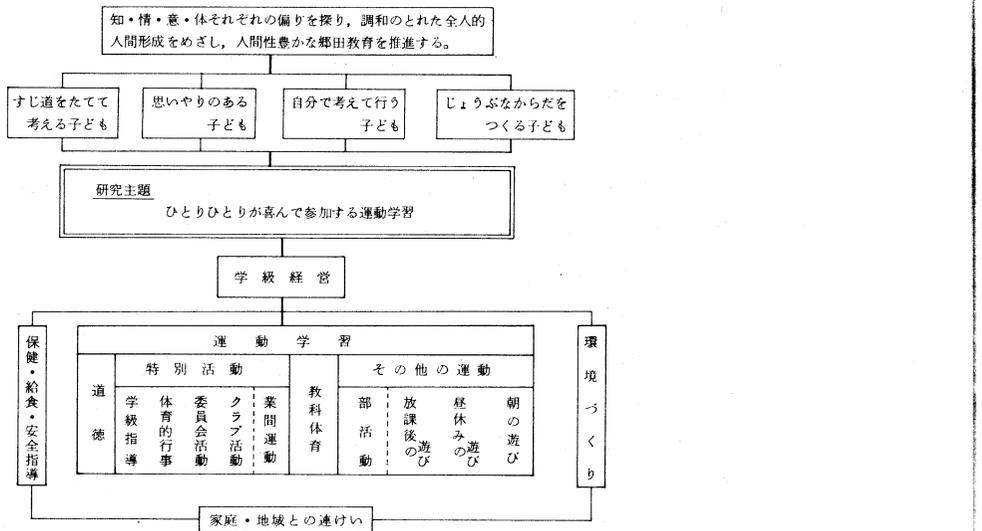
(5) 体育の知性化

体育を「身体活動による知育」と受けとめ、考えることを排除し、機械的に繰り返すだけの型にはめ込む学習ではなく、学習の過程で「どのようにしてできたか」、「できない理由は何か」について、いっしょに考え合うなど、子どもの判断力や思考力を育てる知性ある運動学習をめざしたい。本校のめざす授業像は、子どもが課題をもって自主的に取り組む中で、「子どもの理論」が大切にされ、子ども自身が考えながら作り上げていく授業でなければならない。

3. 校内研究実践計画

(1) 本校における運動学習のとらえ方

本校では、運動学習を次のようにとらえている。



(2) 研究の視点

研究の実際にあたって、児童をとりまく体力や健康面の実態、児童の運動への興味の実態、それにかかわる諸要因について検討し、その推進の視点を次のように決めた。

- ア. 体育科の果たす重要な役割を再確認し、健康、体力の維持増進、人間性の回復をめざす中心的な実践場面を運動学習に置き、その指導の充実を図る。
- イ. 生涯スポーツに備えるための体育活動の展開にあたっては、児童に運動の楽しさを体得させ、また、技能上達への意欲をもたせる。
- ウ. 研究推進のための諸条件の整備、改善に創意と工夫をする。

(3) 研究の内容

- ア. 児童の実態調査

(ア) 実態調査の実施（スポーツテスト、意識調査、日常実践等）

イ. 教科体育の充実

(ア) 授業研究

(イ) 指導計画の作成

ウ. その他の体育活動の充実

(ア) 活動時間の設定、計画、内容の設定

エ. 保健、給食、安全活動の充実

オ. 施設・設備の充実活用

(ア) 固定施設 (イ) 運動用具 (ウ) 教育機器

カ. 家庭、地域との連携

4. 実践活動

(1) 授業実践にあたっての基本的な考え方

ア. 運動の特性を捉える

教師が確たる教材観をもち、指導の方向、手順、方法等を適切に、具体的に捉えるためには、まず、運動の効果や運動そのもののしくみの上から、各運動の一般的特性を捉えるとともに、さらに、児童がその運動をどんな欲求に基づいて行うのか、どんなおもしろさ、楽しさを味わうのか、児童と運動との接点に着目し、児童サイドから見た運動の特性も明らかにしておかなければならない。

運動の楽しさが、その特性に触れる楽しさであることから、児童の捉える各運動の特性を明確にすることは、児童のための授業づくりへの第一歩である。

イ. 児童理解に徹する

体位、体力、運動能力、技能など、児童によって千差万別であり、運動に対する興味欲求にも大きな個人差がある。運動種目によって取り組みの姿勢が異なる場合も多く、鉄棒運動には消極的だが、ボール運動や水泳になると、俄然、意欲的になる児童、運動は苦手だが、ゲームで作戦を練る段になると、すばらしいアイデアを出してみんなから認められ、参加の喜びを味わう児童などさまざまである。ひとりひとりの運動への取り組み方を捉えることは、運動の仕方や参加の仕方を指導する上にきわめて重要である。ひとりひとりを生かし、個人のもつ可能性を最大限に伸ばすためには、まず、児童理解に徹することであり、実態に即した指導を考え、特に、遅れがちな児童に対する応能的な配慮を忘れてはならない。

ウ. 児童の思考、発想を生かす

児童は遊びを作る天才である。業間時間や自由時間には、多種多様な遊びに喜々として取り組んでおり、児童の考案によるユニークなものも数多く見られる。

授業における教材づくりや練習の方法、ルールづくり等にもこれを生かし、児童とともに作りあげていく授業をめざしたい。教師の押しつけや一方的なリードによる授業ではなく、児童の思考や発想を生かした授業を求めることは、「体育の知性化」につながり、さらに自分に合った運動の仕方や運動の楽しみ方を発見することによって、「体育の日常化、生活化」へのつながりも大いに期待できると言える。

エ. 学習の場を工夫する

㊦ 教え合い、励まし合い場

友だちといっしょにうまくできた、助けてもらった、グループの中で仲良くできた…等、児童が「楽しい」と感じる重要な要件の一つに、集団内の望ましい人間関係がある。

ひとりひとりを大切にし、対等、平等を基盤にしながら、能力に応じた一定の役割を分担して、共通の目標に向かってみんなで努力していくグループ学習は、本校のめざす方向からもっとも重視したい部分の一つであり、遅れがちな児童が他の暖かい援助を得てできるようになったり、グループ内で仲間といっしょに協力して運動したりする場を大切にしている。

(2) 授業研究の視点

「よい授業」の基盤を学級経営におき、学校教育目標具現化のための学年別、月別の具体的実践行動目標を設定し、まず、望ましい学級づくりに努め、上記事項(a)～(e)を捉えて「授業研究の視点」を設定し、主題にせまる授業実践を積み重ねてきた。

ア. めあて

- ㊦ 具体的、焦点的、行動的なめあてが設定されているか。
- (イ) 児童ひとりひとりが明確に捉えているか。

イ. 教材づくり

- ㊦ 特性に応じた教材づくりがなされているか。
- (イ) 適切な運動課題が用意されているか。

ウ. 指導法

- ㊦ 子どもの思考や発想を大切にしているか。
- (イ) 全力を出し切る場が設定されているか。
- (ウ) 教え合い、励まし合いの場が設定されているか。
- (エ) 用具に創意工夫がなされているか。

エ. 評価

- ㊦ 授業の過程や終末の段階で、適切な評価がなされ、ひとりひとりが成就感、満足感をもつ工夫がなされているか。
- (イ) 全力を出し切る場

体育の授業で、教師の説明や話し合いの時間が多くを占め、実際に体を動かす時間や運動量が軽減されてはならない。児童は精いっぱい運動し、活動欲求が充足された時に楽しさを感じる。

説明や話し合いの場と実動の場との兼合いを十分考慮し、児童が全力を出し切って運動する場を確保するよう努めている。

(ウ) 認め合い、賛え合い場

みんなの前で進歩の状況を認められ、自分の力を具体的に知ることは、児童にとって新鮮な喜びであり、次への意欲をかきたてられるものである。

本校では、学習活動をできるだけ観察可能な行動目標の形で捉え、学習過程で児童を励ます評価のことばを用意するよう努めている。

児童の自己評価、相互評価、教師からの評価の場を随時、随所に設定し、フィードバックして、新しい考えややり方で再挑戦させたり、どんな小さな進歩も見逃さないで、それをみんなで賛え合い、成功感や自信を持たせたり、特に遅れがちな児童が、やる気をもって運動学習に参加し得る評価法を、工夫している。

オ. 用具を工夫する

授業の効率を高める用具、授業を楽しくする用具、安全面に配慮した用具など、体育の授業を支える基礎条件の一つに「用具の創意工夫」がある。本校では特に児童の興味や意欲を喚起する用具の工夫、遅れがちな児童が積極的に参加するための補助的な用具の工夫に意を用いている。

上記事項を踏まえて、授業研究の視点を設定し、主題に迫る授業実践を積み重ねてきた。

(3) 「全力を出しきる場を設定した指導」の事例

ア. 学習指導案

1校時 第1学年星組 体育科学習指導案(屋体) 指

指導者 山藤タミ

1. 単元名 ほしたか山であそぼう(固定施設や器具を使っての運動)

2. 基盤

○ 本単元は、固定施設や器具を使って多様な動きを工夫することの楽しさを味わわせ、基本的な動きを身につけることをねらいとしている。この時期の児童は、学習と遊びが未分化であるため、総合的な学習形態で遊びを通して動きづくりをすることは意義があると思われる。また、子どもの好きな動物(〇〇さん)になりきらせることによって、高さや回転に対する不安を示す子どもも楽しく運動できるものとする。

○ 本学級の児童は、男子14名、女子12名、計26名である。固定施設や器具を使った運動は1学期に「海浜公園づくり」の学習を通して、遊び場をつくって運動した経験をしている。児童たちは大へん興味を示し意欲的に学習に取り組んでいたが、その動きには、新しい動きを試みようとする子がいるかと思うと、一方では、いつも決まったパターンの動きしかできない子もいた。また、より楽しい場につくりかえて運動しようという意識も低かった。学習は、まだ自己中心的で友だち間の協力も少なかった。

○ 指導にあたっては、児童が日頃から親しくしている星高山を想定させ、楽しく力いっぱい動きづくりができるような学習場面づくりをさせたい。そして、児童には好きな動物になりきらせ、自由な思いきった発想をうながし、多様な動きをうみ出させるよう工夫させたい。

児童が新しく創り出した動きには、それぞれ名前をつけ、学習カードに記入させ、その動きを全体の児童が身につけられるようくり返し練習させていきたい。そして、この学習を通して児童が自然に親しみ、自然の中でいろいろな動きができ、自発的に運動実践をしていくよう生活化をはかりたい。また、みんなと仲よく教え合ったり助け合ったりさせていきたい。

3. 目標

- (1) いろいろな施設や器具を使って、自己のからだを操作して力いっぱい運動することができるようにする。
- (2) 安全をたしかめ合い、約束を守って仲よく運動ができるようにする。

4. 指導計画

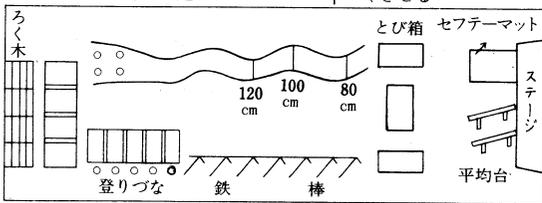
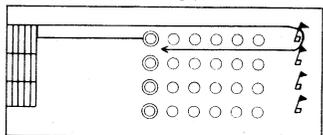
時分	1	2	3	4 (本時)	5	6
10	動物になって運動する (うさぎとび, かえるの逆立ち, おさるさんまわり, 馬とびなど)					
20	○学習計画を立てる	○いろいろな動きを考えて練習する		○それぞれの場で考えた動きが, よい動き(大きい, 早い, リズミカル等)になるよう工夫する		○発表会をする ・自分の得意な動きを見せ合う。
30	○星高山らしい場づくりをする	・枝あそび (鉄棒)		・ぶらさがる	・とぶ	
40	○試しに動いてみる。	・つた登り (登りづな)		・よじのぼる	・まわる	
		・テレビ塔 (ろく木)				
		・星のおとう (とび箱, 平均台)				
		・谷わたり (輪)				

5. 本時の学習

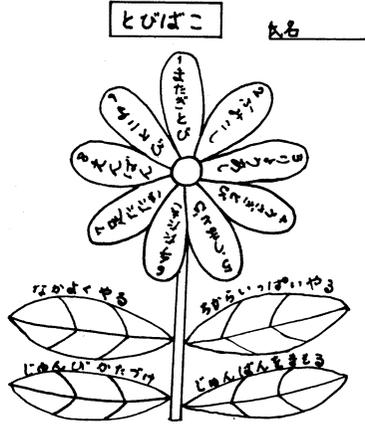
(1) ねらい

- それぞれの運動の場で作りだした動きを, 大きな動きになるように工夫できる。

(2) 展開

学習活動	指導上の留意点	準備
1. 集合する <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつをする ・本時の学習のめあてを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・健康観察をする ・「今までの動きより大きな動きができるようにする」ことを課題とし, 確認させる 	
2. 人麿神社の広場で運動する <ul style="list-style-type: none"> ・うさぎとび ・かえるの逆立ち ・さるまわり (前転, 側転, ブリッジぐりぬげ) など 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな動物になりきって運動させる ・1人や2人組になって, せいいっぱい大きな動きができるようにさせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・タンブリン
3. 星高山の場づくりをする <ul style="list-style-type: none"> ・予想される場の設定 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備はグループで協力して, 安全にすまかせ 	<ul style="list-style-type: none"> ・とび箱 ・マット ・平均台 ・鉄棒 ・ろく木 ・登りづな ・セフテーマット ・カセット
4. 星高山で運動する <ul style="list-style-type: none"> ・グループで運動の場を移動しながらいままで学習した動きをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの場になれる 	
5. 集合して友だちのよい動きを見る <ul style="list-style-type: none"> ・ひとつの場でひとりずつよい動きのできる友だちのようすをみる 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちのよい動きに目を向けさせ, 自分の動きづくりのヒントにさせる 	
6. 大きな動きづくりに挑戦する	<ul style="list-style-type: none"> ・動作はぎこちなくても, 工夫した動きをしている子や, がんばっている子をほめ意欲を高めさせる 	
7. おさるさんリレーをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲よく協力して, 力いっぱい走らせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ろく木
8. 後片付けをする	<ul style="list-style-type: none"> ・もとの場所へきちんと置かせる 	
9. 学習のまとめをする	<ul style="list-style-type: none"> ・前時よりも大きな動きができるようになった子や, できなかった動きがはじめてできるようになった子をほめ, 次時への意欲づけをする 	

イ. 学習カード



ウ. 学習カードの活用結果

とび箱	<ul style="list-style-type: none"> 1段のとび箱は、前ページの9項目が全員できた。 2段のとび箱は、少し動作がこぎちない子が4名いたが、他児童は全員調子よくできた。
-----	---

項目		できる	できない
鉄	腕立てとび上がり、前回り下り（つばめのまえまわり）	26人	0人
	足ぬきまわり（前後連続5回）	24	2
棒	こもりふり（5回）	26	0
	さかあがり	18	8

のぼりつな	天上の高さ(6m)	できる	谷わたり	距離	またきとびができる	両足とびができる	つたわり(6m)	
	天上まで手がつく	21人					少しわたれる	7人
のぼりつな	青色 $\frac{3}{4}$ m	2	り	1 m	2	4	半分わたれる	6
	赤色 $\frac{1}{2}$ m	2		1m 20cm	9	12	全部わたれる	13
	緑色 $\frac{1}{4}$ m	1		1m 40cm	15	10		

エ. 授業後の考察

1年生は、物事への興味関心が強い反面、あきっぽく長続きしない傾向があるので、一つの場で1時間運動を続けることはできにくい。そのため、多くの運動の場をつくり、短時間ずつローテーションしていく学習は活動意欲を持続させる上からも効果的であった。

ローテーションをする場合、グループがなかよくまとまっていなければ、よい運動学習はできない。そこで、グループに名前をつけさせたり、目じるしに旗を作らせたりした。また、お父さん、お母さん、兄さん、姉さんと役割を決めて家族的な雰囲気をつくり、並び方もお父さん、お母さんを前後につけるなどして、みんなで協力して助け合ったり教え合ったり励まし合ったりするようにした。

運動の取り組みについては、恐怖心の強い子や興味関心を示さない子らのために、動物やまん面の主人公に変身させ、「おさるさんになって綱をするするのぼってみよう。」「ターザンになって大きくゆらしてみよう。」などと助言や説明を加えると、1年生はすぐそのものになりきって楽しく力いっぱい運動することができた。各場所でのよい動きをカードに書き出してめあてとし、できたらシールをはって励ました。よくできる子にはよい動きを工夫させ、できない子には教え合い助け合わせるなどして精いっぱい動けるようにしたら、意欲的に取り組むことができた。

(4) 成果の概要と今後の課題

紙面の都合で一例にすぎないが、体育嫌いで友だちの中に入れなかった児童が、適切な手だてによって少しずつ変容してきた。授業の中で児童ひとりひとりのよい点を認めることがどんなに大切であり、児童を変えうるものであるかを痛感した。運動嫌いな児童でも「思う存分からだを動かしたい」「仲間になりたい」という願いは持っている。本時の学習の視点や練習の成果を記録した「学習カード」「グループノート」や「激励、賞賛、助言」等は、学習への意欲づけに効果を上げた。

今後は、評価の研究をさらに深めたい。指導過程の中で、いつ、どんな場面で、どんなことばで評価したらよいか十分検討していきたい。そのためには、教材内容を分析・吟味し、児童ひとりひとりをよく知ることである。

(5) 業間運動

本校では、業間運動を日課の中に位置づけている。児童が自主的に取り組む場として業間運動は格好の場であると考え、ひとりひとりが運動の楽しさ、喜び、満足感を味わえるように、昭和54年度から次のような取り組みをした。そして、名称も業間体操を業間運動と改めた。

ア. 業間運動の目標

- 児童の創意工夫による運動、遊びを通して主体性、社会性を育てる。
- 健康の増進、体力の向上をめざし、その生活化をはかる。
- 集団行動を通して、規律正しい生活習慣を身につける。
- 運動により児童と児童、教師と児童の心のふれ合いによる好ましい人間関係を育てる。

イ. 業間運動の視点

- 学年やグループに応じて創意工夫した運動や遊びを、より楽しいもの、挑戦するものに作り変えていく喜びを味わわせる。
- 興味、関心を持続させ、意欲的に取り組ませる手だてを考える。
- 本校の児童の弱点である柔軟性、筋持久力を伸ばす運動や、集団行動の場を意図的に取り入れる。
- 上下学年の交流による子ども集団（社会）の育成につとめる。

ウ. 業間運動の位置づけと運営

本校では、2校時と3校時の間の30分間を業間運動の時間にあてるように位置づけている。テーマ音楽により各運動場所に集合する。曲に合わせて全児童がかけ足を5分間行う。曲が変わると並足で次の運動場所へ移動し、自分たちの創意工夫した運動を15分間行う。運動終了後に5分間ずつの準備、後片づけ、休憩の時間を設けている。また、できるだけ多くの児童と児童、児童と教師の心のふれ合いをもたせ、次のように計画した。

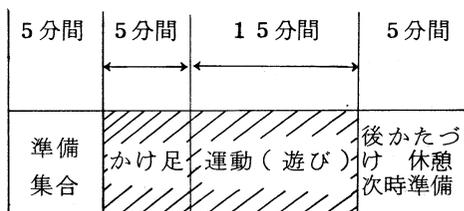
○ 日課への位置づけ

曜 時刻	月	火	水	木	金	土	曜 時刻
8:15	自由活動						8:15
8:30	学級の時間						8:30
8:40	①	⑥	⑪	⑰	⑳	㉑	8:40
9:25	休み (10)						9:25
9:35	②	⑦	⑫	⑱	㉒	㉓	9:35
10:20	業間運動 (30)						10:20
10:50	③	⑧	⑬	⑲	㉔	㉕	10:50
11:35	給食 (40)					学級の時間	11:35
12:15	昼休み (30)						11:50 11:55 集団下校
12:45	そうじ (15)						
1:00	休み (5)						
1:05	④	⑨	⑭	㉖	㉗		
1:50							
2:00	⑤	⑩	⑮	㉘	㉙		
2:45	学級の時間						
3:00	自由活動	総合学習	⑯	委員会 クラブ	委員会 活動	総合学習	
3:45	部活動						

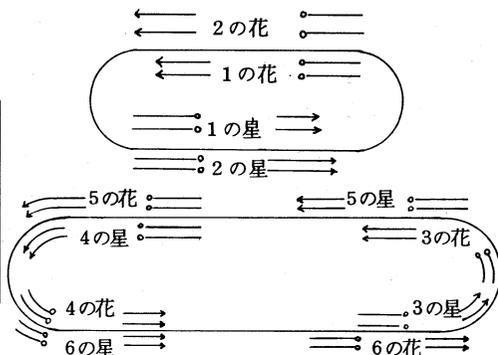
○ 業間運動(遊び)の1週間の予定

曜 分	日	月	火	水	木	金	土
5	10	準備・集合					
		かけ足行進					
25	10	自由遊 び (第 一 月 曜 日 は 集 会)	学 年 編 成 に よ る 運 動	運 動 (通 学 分 団 別)	縦 割 編 成 に よ る	自由遊 び	
							後かたづけ・休憩・次時準備

。 時間配分



。 かけ足の集合位置



エ. 効果の概要と今後の課題

従来の本校の児童は、歩いたり走ったりする姿勢が悪かったこと、集団の中で走っていても、集団の中の自分という意識が少なかったこと等があった。かけ足行進は単純で形式的指導のようであるが、大集団の中で曲に合わせて全員が「そろろう」ことをめざして努力させた結果、連帯感を高めがんばる心を育てることに大きな役割を果たした。また、集団になれば、ひとりであるよりリズムに乗り易く、更には、緊張感や快感も味わうことができ、ねらいを達成でき易いことも検証できた。

学年別編成及び通学分団別縦割編成による運動は、児童と児童、児童と教師の心のふれ合いを持つ大切な場となった。異なった年齢の子が一緒になって遊ぶとなると、そこには当然体力の差が問題になってくる。しかし、下学年に運動の仕方を教えたり補助したり、賞賛、激励したりするなどほほえましい姿が見られた。また、お互いの立場を自覚し、それぞれが自分の役割と責任を果すようになってきた。このように、学年編成及び通学分団別縦割編成による運動は、人間関係を育てる好適の場となったが、下学年と上学年が同一の運動では、運動量の面で満足できない場合もある。今後も実践の中から資料を持ち寄り、望ましい業間活動のあり方を求めていきたい。

(6) 環境づくり

本校は、児童の心をゆさぶる学校環境をめざして、4か年の歩みを続けた。子どものアイデアを取り入れ、PTAの協同作業による金のかからないサーキットコースの再編成をはじめとした体育施設の整備充実をはかった。

これらにより新設、改善された施設遊具を児童は喜んで使い、新しい遊びを次から次へつくった。

5. おわりに

「強い体と豊かな心」をもつ人間づくりをめざし「ひとりひとりが喜んで参加する運動学習」を研究主題としての私たちの取り組みも4年目を迎えた。

幸い、3年次の昨年度は、望ましい授業実践、業間活動とこれらを支える他の教育諸活動のあり方を追求し、第5回島根県小学校体育研究大会の会場校としての取り組みを公開することができた。

この大会を機に教師の適切な指導と、PTA及び地域の方々の積極的な協力、援助を得て、学習環境をはじめとする諸条件が整備され、教師の構えと子どもの取り組む姿勢とが両々相俟って、私たちがめざしている5つの方向に少なからず接近し得たことを喜びたい。

しかしながら、今後の研究に委ねられる部分も多く残しており、更に研究を深めていきたい。

健康でたくましい子供の育成

—めあてをもって楽しく活動する体育学習—



長崎県長崎市立横尾小学校
校長 桑原 新



研究主任 教諭 栗原 昇

〒852 長崎県長崎市横尾2丁目16番1号 ☎(0958)57-4409

1 本校の実態

本校は、長崎市北部の滑石団地に隣接して広がる旧時津横尾を併合した横尾団地の新興住宅に、昭和52年4月、大園小学校から分れて開校された新設校である。

開校当時は、児童数559名、18学級であったが、住宅・アパートの造成にともない現在（昭和58年2月）児童数1,237名、30学級であり、今後とも人口増の可能性大である。学年始めの転出、転入児の異動も市内、県内、県外と広範囲にわたり、その数も年間200名前後である。当然保護者の職業も多岐にわたっているが、教育に対する関心が高く、有識者が多い。必然的に児童も都市型傾向が強く、体力、気力に乏しく、ひとりよがりでも他人に対する思いやりに欠けているところが見られた。

- 朝会（集会）が少し長くなるとバタバタ倒れる子供。
- かぜにかかりやすい子供。
- 戸外での遊びを好まず室内で過ごす子供。
- 仲間との交流関係がうすく、けんかする子供。
- 友達と進んで遊んだり、運動したりできない子供。

などが開校当初の子供たちの特徴的な姿であった。また、運動能力や体力も全国平均に比べかなり劣っているのが実状であった。

2 研究の歩み

前述したように、本校児童の実態をふまえて、開校当初から知・徳・体の調和のとれた全人的発達をめざして「ゆたかな情操とたくましい体力を持った子ども」を教育目標の重点目標に掲げ、その具体目標として、(1) 生きてはたらく確かな学力を備えた子供。

(2) 心豊かで協力し合い最後まで行動する子供。

(3) 物ごとをありのまま見つめ、正しい考えと判断のできる子供。

をめざす横尾の子供像としてとらえ、この教育目標の具現化と特色ある学校づくりを図るために、一貫した経営方針のもとに「自然に親しむ、からだづくり」の研究を次のように推進してきた。

昭和52・53年

本校児童の「からだづくり」の基盤になっている「はだか、はだし」のとりくみ、業前の「走れ走れ運動」は、開校とともに推進してきた。

校内研究として、次の3つの研究の視点を設定し、自主的継続研究を進めてきた。

- (1) 学習指導法の研究（理科）
- (2) 体力づくりの実践的研究（体育）
- (3) 係活動の組織と効果的指導法の研究（特活）

昭和54年度

体育科を中心として実践研究にとりくみ、児童の体力向上や、体育学習のあり方について、長崎市教育委員会の研究委託を受け、「自ら進んで体力づくりにはげむ子供」の主題のもとに研究を進めた。

- (1) 教科体育の指導の充実
- (2) 教科外体育の指導の充実
- (3) 体育施設・用具の充実と活用の方法

昭和55年度

あらたに保健が長崎市教育委員会の研究委託を受ける。

子供の体力をさらに確かなものに高めつづけるために、前年度の研究内容を手がかりにして、研究実践の高まりと内容の充実を図りながら次のように研究を推進した。

- (1) 体育学習、特別活動（学級会、保健指導）の授業研究をとおしての学習指導法の研究
- (2) 保健体育の行事の活動、裁量時間の活動、遊びの効果的な指導の手だての研究
- (3) 健康な生活の習慣化をめざす効果的な保健指導の研究
- (4) 体力づくりを支える施設用具や資料充実と活用の方法の研究

昭和56年度

体育は、再度長崎市教育委員会と長崎県教育委員会の委託と指定を受け、「健康でたくましい子供の育成」という主題を掲げて、体育は「めあてをもって楽しく活動する体育学習」、保健は、「健康な生活の習慣化をめざす保健指導」の副主題のもとに研究を進めてきた。そして、56年11月に、体育は中間発表、保健は2年間の成果の発表として、29学級の全学級を公開し、歩みの一端を披露した。

3. 昭和57年度の研究

(1) 研究主題

健康でたくましい子供の育成
めあてをもって楽しく活動する体育学習

(2) 主題について

これからの学校教育は、人間性豊かな児童の育成を志向し、学校教育活動全体を通して、子供の心と体の健康づくりを推進していくことが強調されている。このことから、学校教育を推進するためには、子供の健康の問題と体を育てる教育をおろそかにしてはならないし、子供の生命を尊重し生涯を生きぬくたくましい児童を育てることが重視されなければならない。

そこで、本校では、過去5年間の研究を基盤にして、新しい時代に活躍する人間を育成することが、教師に課せられた責務であると考えた。そして、体育の研究をよりいっそう深めることによって、日々の授業が充実し、子供達の意欲的な学習のとりにくみができることを期待している。それはやがて健康な生活や運動に親しむ習慣が身につく、「健康でたくましい子供」が育っていくことを確信し、この主題を設定した。

しかし、体育だけで主題を達成できるものではない。体育を中心にすえながら、全教科、全領域の教育活動に広げていくとりにくみを重視したい。

ア. サブテーマについて

わたしたちは、自分の力でめあてをつかみ、みんなと協力しながら、ねばり強く運動し、楽しく授業に参加している横尾の子供の姿を描いた。

そのためには、教師がもっと子供の意識にそった授業を展開しなければならない。つまり、課題意識を持続させ、個別指導の徹底が図りやすい学習場面を設定し、十分な運動量を与えること、また、子供たち1人1人には、自分の力を知り、その自己の力にあつためあてを持つ能力や、めあてを意識し、友達と協力しながら運動する態度と、さらに自分の力の伸びに気づくような確かなめあてを持たせることが必要だと考えた。

このような授業にせまるため、学級集団づくりを基盤にして体育の研究にとりくむことにした。

1. 仮 設

研究推進にあたっては、本校の主題を達成するために、次のような仮設を設定した。

(ア) 教材の特性や子供の実態を把握し、「学習課題」をおさえていくことにより、子供が自主的に意欲を持って学習するだろう。

(イ) 学習課題をひとりひとりの子供のめあてにするためには、課題の提示を適切にし、課題に即して子供の自己評価、相互評価を活発にさせ、それに教師の指導と評価を加えていけばよいだろう。

(ウ) みんなで技や力を磨き合う場面を学習過程に設定することにより、好ましい人間関係や学習への取り組み方が教科経営、他領域に転移し、学級経営の充実がいっそう図られるであろう。

(エ) 効果的な話し合いをすることにより、友達の動きをよく観察し、認め合い、励まし合い、教え合いながら意欲的に学習するであろう。

(オ) 学習形態の工夫、施設・用具・資料の活用とくふうをすることによって、子供が意欲的にとりくむであろう。

(カ) 体育学習においては、常に体育の生活との結びつきを考えて指導する必要がある、それが学習の意欲にもつながるだろう。

(3) 研究の基本構想

児童の健康づくりを推進するためには、学校教育活動全体の中で子供が自ら意欲的に実践できるような環境を設定し、教師がそれらの場を組織的・計画的に企画し、適切な指導の方法を考えることが大切である。本年度は、前年度の反省に立って次のような基本構想のもとに研究を進めた。

㉞) 校内研究会は、毎週木曜日に実施する。但し、教科部会等で欠けた場合は必要に応じて火曜日に行う。

(イ) 校内研究会

第1週 研究全体会

第2週 研究全体会

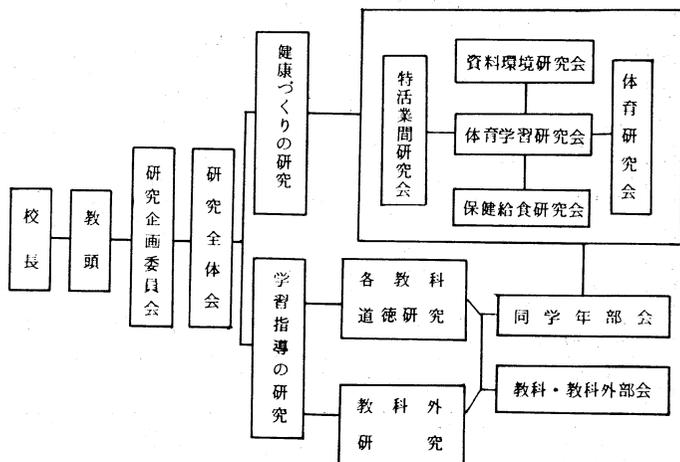
第3週 各週研究会(3週以外にも必要に応じて実施する。)

第4週 研究全体会(各種研究会で研究したことについて共通理解をはかる。)

(ウ) 企画委員会は、必要に応じて行う。

イ. 研究の組織

前年度は、研究組織を体育と保健にしぼって研究を進めたが、健康づくりをもっと多角的にとらえた組織づくりが必要だとの反省にたち、体育(からだづくり)、特活(仲間づくり、保健・給食・資料・環境)の4つを柱にしながら研究にとりくんだ。今年度は、その中でも特に「体育」を中心にした研究に重点をおき実践を深めてきた。



ウ. 研究部の構成

㉞) 各種研究会

学年 研究会	1	2	3	4	5	6	専科
体育	森山	井本	永川	江口	今道	鈴木	
保健・給食	山下	河内	立石	有永	吉岡	田崎	石本
特活・業間	大浦	藤田	塚本	松添	溝田	才津	鈴木
資料・環境	龍	松原	品川	早瀬	大賀	益田	大石

(イ) 研究企画委員

○教頭	山元	○教務主任	鈴木	○研究主任	栗原
○養護教諭	矢口	○体育	今道	○保健給食	河内
○特活業間	溝口	○資料環境	早瀬	○学年代表	1年 大浦 3年 立石

エ. 研究部の分担

(ア) 研究企画委員会

研究全般についての企画立案，資料を作成するとともに，各研究会の調査にあたる。

(イ) 各種研究会

いずれかの研究会に全職員が所属し，各研究会の計画のもとに，具体的な実践研究を行う。
研究のための推進的役割を果たす。

(ウ) 研究全体会

全職員で構成し，研究実践の諸問題について協議し解決する。

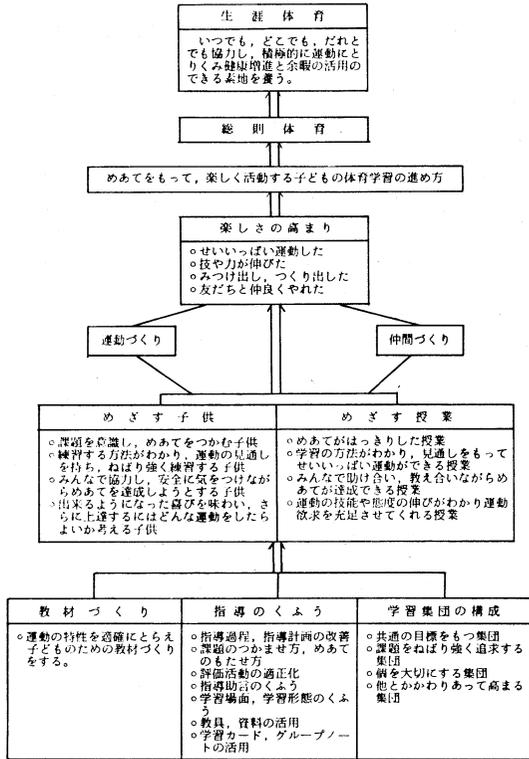
オ. 研究のための年間計画

段階	月	1 週	2 週	3 週	4 週	企画委員会	
研究の基本的方向と基盤づくり	4月		13日(火) ○研究計画提案 ・研究主題について ・研究の進め方について ・研究グループ決定 ・企画委員の決定	27日(日) ・前年度までの研究実践についての共通理解をはかる。 ・体育、保健の実験 ・走れ走れについて ・運動づくり ・仲よしタイムの提案		・企画委員決定 ・前年度までの研究内容 ・研究の進め方	
	5月	4日(日) ・年間研究計画の提案 ・研究の進め方 ・授業者の決定 ・実践記録のとり方		18日(日) ○各種研究会 ・研究のための年間計画をたてる。 ・研究内容の話し合い	27日(日) ・各種研究会で話し合ったことについて討議し共通理解をはかる。	・研究計画主題について 研究の内容 基本構想 研究部の構成	
研究深める(学習指導の実践研究)	6月	3日(日) ・体育授業 (5の3今通)	10日(日) ・体育授業 (2の4原田) ・体育授業 (5の1吉岡)	15日(日) ○各種研究会	24日(日) ・各種研究会の報告 ・体育授業 (6の2栗原)	・主題の具体化と 研究の手順 資料づくりについて	
	7月	1日(日) ・実技研修会(体育)指導 教育事務所指導主事	8日(日) ・1学期実践の反省 ・休業中の研修について ・環境・資料づくり等			・夏季休業中の研修について 指導案形成の確認	
研究の検証と発表(まとめ)	8月	教材研究 環境づくり 各種講習会参加 指導案作成 1学期実践記録の整理 資料づくり					
	9月	2日(日) ・指導案の検討 ・紀要原稿の書き方	9日(日) ・体育授業 (2の5松原) ・体育授業 (6の4田崎)	14日(日) ・各種研究会	30日(日) ・各種研究会の報告 ・体育授業 (3の5水川)	・発表当日の日程について ・2学期研究進捗の確認	
研究の反省と次年度への方向づけ	10月	5日(日) ・体育実技研修会指導 長崎市教委指導主事	12日(日) ・体育授業 (1の4龍) ・体育授業 (3の1中村)	21日(日) 各種研究会	28日(日) ・各種研究会の報告 ・体育授業 (4の2早瀬)	・発表会運営の計画 器具、用具の調査 発表会原稿について 紀要について	
	11月	4日(日) ・体育授業 (1の1竹下) ・体育授業 (4の3松系)	11日(日) ・発表会の準備についての確認(係分担) ・予想される質問の分担	19日(日) ・県、市委託 体育研究発表	25日(日) ・研究発表結果の反省	・発表会のための諸準備について (係分担)	
	12月	2日(日) ・研究発表の反省にもとづいた問題点の検討と今後の実践	7日(日) ・年間指導計画の見直し (1～2学期)	14日(日)		・年間計画の修正の進め方について	
	1月		13日(日) ・体育授業 (2の4原田)	18日(日) ・各種研究会	27日(日) ・各種研究会の報告 ・体育授業 (4の3松系)	・今年度の実践のまとめについて	
2月	3日(日) ・体育授業 (3の5水川)	10日(日) ・今年度の実践の反省	15日(日) ・今年度の実践の反省 (各種研究会)	24日(日) ・次年度の研究計画について		・次年度の研究計画について	

4. 体育の実践研究

(1) 体育学習の進め方

本校では、研究テーマを追求するために、次のような解決のための筋道をたてて授業を進めた。



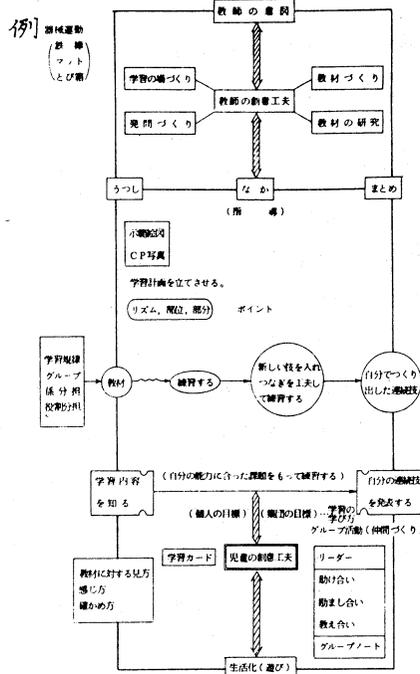
(2) 「めあてを持って楽しく学習する子供」

づくりのための指導過程(表1, 表2)

表1

段階	一次(はじめ)	二次(なか)	三次(まとめ)
指導過程	理解 • 学習内容を理解させ、学習の見通しを持たせる	身に付け、高め、変化、発展 • 学習内容を確かめさせる • 学習内容を高め、変化、発展させる	まとめ、発表 • 学習内容をまとめさせる • 発表させる • 発展させる
学習過程	学習内容を知り、学習の見通しを立て、学習計画をたてる	学習内容を確かめる • 課題を解決するための要点をつかみ練習をする	まとめの練習をする • 学習成果をグループ、個人で発表する
学習場面	課題をつかむ • 個人やグループで練習する	さらにわざをねる • 新しいわざに挑戦する	ゲーム大会をする • 学習内容の反省をする
学習場面	見る、選ぶ、まねる、試みる、つかむ	探る、みつける、考える、くらべ、返す、みがく、おきなう、みつける、おきなう、みつける、おきなう、みつける、おきなう	味わう • おきなう • ふりかえる

表2



(3) 授業研究の記録

体育科学習内容の研究 No.1		9月10日 木曜日 5校時 年組 指導者()	
単元	学習内容	技能習得の場面	体力づくり
25	準備運動 走、跳、投、遊戯	話し合い(教師の指導)	称賞 ○ 走 × 跳 △ 遊戯
30	準備運動 走、跳、投、遊戯	話し合い(教師の指導)	教師の発問、児童の発言(意見、気づき等)
35	準備運動 走、跳、投、遊戯	話し合い(教師の指導)	○ 恥とびをしている実務について指導 ○ 前進をしているグループに、もっと促すよう指示 ○ 手押し車をしているグループに競争するよう指示
40	準備運動 走、跳、投、遊戯	話し合い(教師の指導)	○ 運送と歩幅を変えて動きを工夫しよう……発問、既得 ○ 「まず話し合いをしてから動きをつくること」 ○ 「話し合いがみんなだんだんつくこと」 ○ 「男子と女子と別々になったらダメよ」 ○ 「向きも変えないといけないね」
45	準備運動 走、跳、投、遊戯	話し合い(教師の指導)	○ 「4組やってみて」 ○ 「リズムにあっているか、運送はどうか」 ○ 「3組やってみて」 ○ 「あと少し時間をあけるから運送、歩幅、姿勢、方向の4つを変えてやってごらん」 ○ 「4つとり入れたら」
50	準備運動 走、跳、投、遊戯	話し合い(教師の指導)	○ グループごとと準備して下さい ○ 「34組が早かった」 ○ 男子よくとびにせう……発問、既得 ○ 手のつき方に注意しなさい ○ 「男子よくとべた人を薦めます」 ○ 名の発音に注意せよ。「高くしたい」 ○ 「今のみんなの姿を参考に、グループで練習」 ○ 「高さはみんなて話し合ってみよう」 ○ 「今日調子よくとべた 寺岡君」
55	準備運動 走、跳、投、遊戯	話し合い(教師の指導)	○ 発問を運動させた。 ○ グループ活動の進捗がもう一歩 ○ 課題を提示する発問を明確に、はっきりと ○ 既得内容に工夫を

- 授業研究のなかで上記の記録をもとに次のようなことを話し合った
- めあての与え方はどうであったか。
 - 運動量はどうかであったか。
 - 発問、助言はどうかであったか。
 - 学習形態は工夫されていたか。
 - 教材は適当であったか。

体育科学習内容の研究 No.2		9月10日 木曜日 5校時 年組 指導者(A教諭)								
番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
役名	リーダー									
氏名	小山	安部	中島	深江	林田	島本				
学習目標	G	運送、歩はばの動きの変化が不十分、ねらいをはっきりつかんでいない。								
の認識度	個人	◎	△	○	△	△	△	△	△	
準備運動の技能(セット)	ブリッジ	◎	△	○	△	◎	◎	◎	◎	
研究態度	個人	△	△	△	△	△	△	△	△	
練習態度	個人	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
話し	聞き方	△	△	△	△	△	△	△	△	
話し	話し方	○	○	○	○	○	○	○	○	
合い	内容	リーダーを中心とした、ねらいにそった話し合いがなされていない。(課題に対してのねらい、個人のねらいがはっきりしていない)								
技能	G	ねらいをつかんでいないため、練習内容(学習活動)不明確、伸びは見られない								
個人	個人	△	△	△	△	△	△	△	△	
協力度(参加度)	個人	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
用具管理	個人	○	○	○	○	○	○	○	○	
練習安全に対する態度	個人	○	◎	○	○	○	○	○	○	
目標の与え方	時期	発問「運送、歩はばを変えて動きを工夫しよう」……板書								
目標の与え方	G	指導、助言はなかった								
目標の与え方	個人	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
目標の与え方	内容	このG、個人への指導、助言がないため、子どもたちの学習活動が低調								
指導助言	G	なし								
指導助言	個人	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
指導助言	内容及びその聞き方	なし								
総評		○ 課題に対してのねらい、個人のねらいを達成するため何をどうすればよいかははっきりしていない。 ◎ 大へん良い ○ リーダーの養成が必要(グループ学習ができていない) ○ 良い ○ 動きづくりはよくできていた。 △ もう少し								

- 上記の授業記録をもとに、グループ活動の状態を討議した。
- グループの構成はどうかであったか。
 - リーダーの養成
 - グループ活動はどうかであったか。
 - めあてをはっきりつかんでいなかったか。
 - 技能の伸びはどうかであったか。
 - 新しい発見があったか。

5. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本校は、開校以来「豊かな情操とたくましい体力をもった子供」という学校教育目標の具現化と特色ある学校づくりをめざして6年目、学校教育活動全体の中で、継続してからだづくりを行うことを目標として「喜びと楽しさを味わいながら体力づくりにはげむ」ことのできる技能や態度を培わせることにより、それが健康でたくましい子供の育成につながるものと信じて実践を進めてきた。ア. 教科体育では、計画的に実施している授業研究の成果のすべてを、日々の授業の中に投入していく。その実践の積み重ねによって、子供たちは、めあてをもって運動にとりくむようになってきたし、生き生きした活動が見られるようになってきている。

1. 自作の固定施設及び配置を工夫した施設を活用した業間体育も、「仲良しタイム」「運動づくり」の実践をとおして、仲間との協力、思いやり、自主性、工夫する力などの心が育ってきている。

また、恵まれた校庭でのほだか、はだしの「走れ走れ運動」は、本校児童のからだづくりの基盤になっている。

ウ. 保健面では、「健康な生活の習慣化」というテーマでの前年度の研究成果もあって、手洗い、うがい、姿勢、虫歯の予防、うす着等の生活の習慣化も定着してきている。

54年度 よい歯の学校、長崎市健康優良学校努力校

55年度 長崎県健康優良学校準一位

56年度 長崎県健康優良学校県一位

57年度 全国健康優良学校

の受賞となった。これらの表彰は、心と体の健康づくりという実践の成果だと考える。

(2) 今後の課題

ア. 教科体育を中心に研究を進めてきたが、研究の積み重ねが日浅く十分な成果をあげるまでに至っていない。そこで、めあてをもち、楽しみながら運動するなかで、多彩で多様な動きをより深めて体力を高めること。その具体的な手だてを考える。

イ. 業間運動は、児童数の増加とともに場所の制約を受けてきたが、これらの課題をどう解決するか。また、活動がマンネリ化しないように、どう内容に変化をつけるか等の積極的健康づくり及び環境づくりの工夫改善が課せられている。

ウ. 保健では、身のまわりの清潔等、健康づくりのための習慣化をどうはかっていくか。

エ. 体力づくりの成果が、子供の生活にしっかりと定着し、それが発展して生涯体育への基礎になるためには、学校の実践と家庭、地域との結びつきをどのようにしたらよいか。

6. 研究者氏名(本校職員)

桑原 新(校長)	栗原 昇(研究主任)	益田しずか
山元 里海(教頭)	大浦 道子	田崎恵美子
品川フキヨ	吉岡 一男	龍 薫
塚本ツヤ子	江口 匡彰	原口 恭一
藤田 昭代	森井 斐子	松添 和子
立石 堅	竹下 暢子	矢口 京子(養護)
石本チエノ	小島香代子	坪井 千恵
早瀬 潤一	才津 久高	松尾 順子
有永 義光	今道 大祐(体育主任)	
鈴木 文雄(教務主任)	大賀 津子	
大石 民子	松本 治子	
山下 栄子	宇治原久江	
鈴田 功	永川 徹	
溝田 怡弘(特活主任)	松原 敏子	
河内 正和(保健主事)	中村 仁美	

7. 記載者 研究主任 栗原 昇

心身ともに健全な生徒をめざす格技指導

——ねばり強い気力と体力の育成——



福井県丹生郡清水町
清水中学校
校長 森田 豊



研究主任 教諭 渡辺 俊夫

〒910-36 福井県丹生郡清水町島寺2-55 ☎(0776)98-5009

1. 研究の目的と方法

本校は、昭和55年度格技指導推進校の指定を受けたのを機会に、従来実施してきた教科体育での格技(柔道)指導、クラブ活動、部活動の見なおし、指導者の指導技術の向上、施設・設備の充実をはかり、格技の一層の普及と発展を願い、全校を上げて取り組んできた。本校の従来の格技指導を見ると、クラブ、部活動においては15年の歴史の中で地区大会、県大会での優勝、また個人優勝、次勝とままずの成績を納めてきた。しかし、教科体育では、その実施も浅く、指導時数も36時間と少なく、全校生徒への柔道の普及は浅かった。しかし、町営体育館の新築にともない、立派な柔道場が完成したことは、格技指導推進に大いに役立った。

本校の教育目標、①心豊かな生徒、②積極的に学習する生徒、③ねばり強い気力と体力のある生徒、の実現をはかるために、格技の面から、精神の涵養(心)、技能(技)、体力(体)の調和のとれた発達を促すことが、その目標にせまる一方法であると考え。

格技は、その特性から敏捷性、巧緻性、瞬発力、持久力などの体力はもちろんのこと、学習指導全体をとおして、礼法、思いやり、公正さ、忍耐力、克己心などを養成しうるものである。従って技能の習得のみに重点をおくことなく、生涯体育、ひいては、人間形成の視点から、この主題を設定し、全校を上げて推進に取り組んできた。

(1) 基本方針

ア. 格技指導の目標

- 格技に対する興味・関心を高めるとともに、心身の鍛練をはかる。(精神の涵養、体力)
- 基礎的技能を習得するとともに、ルールを守って安全に運動する態度を養う。(技能の習得、公正・安全の実践的態度)
- 格技の特性を理解し、技能の向上に努力する態度を養う。(知識、理解、技能の向上)
- 格技によって培われた態度、習慣の生活化を図る。

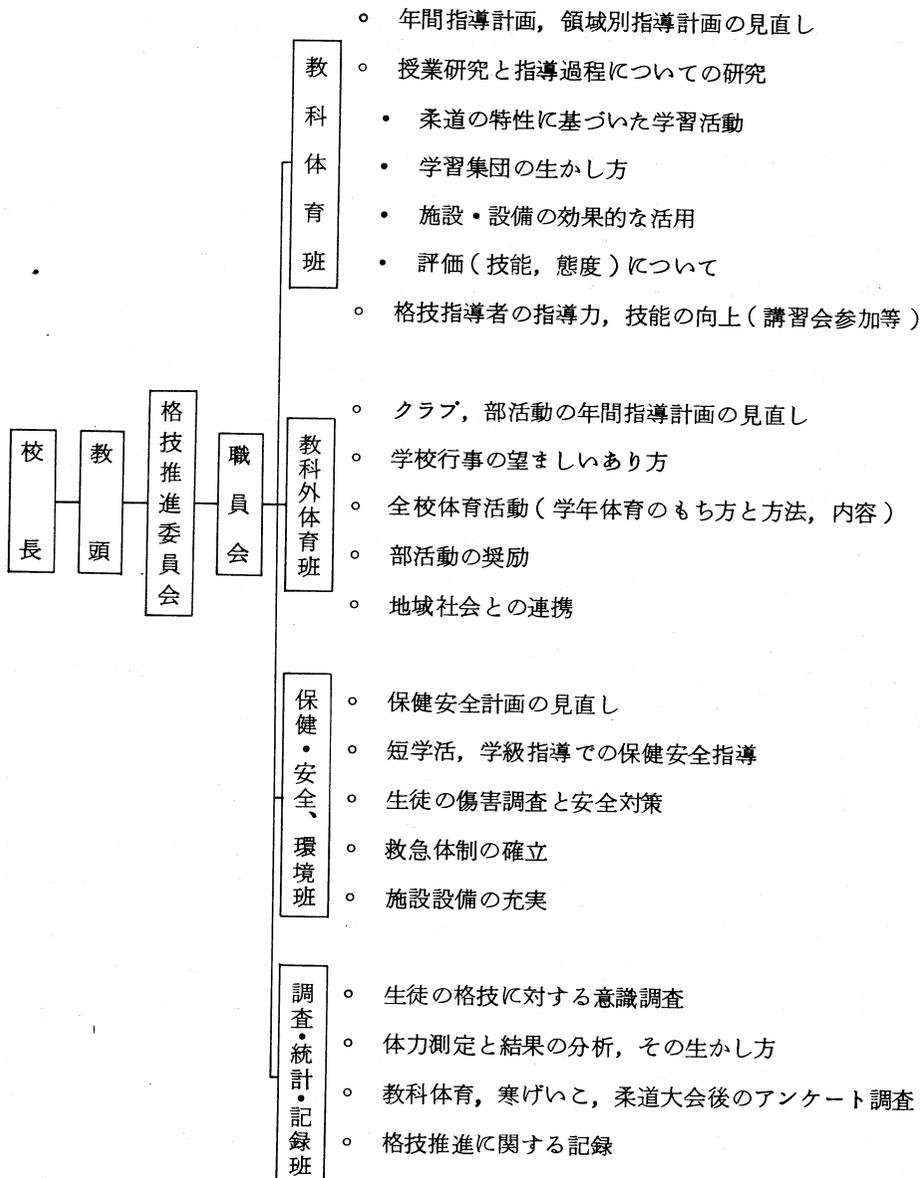
イ. 基本方針

- 狭義の格技指導でなく、体力づくりを基盤とした指導であり、全職員の共通理解のもとに、各職員の推進分野を明確にし、全職員による推進体制を図る。
- 教科体育を中心に、柔道クラブ、柔道部、全校体育活動等における格技指導を考え、その関連を明確にする。
- 格技についての知識、理解をはかり、基礎的技能の習得と合わせて、精神の鍛練を図る。
- 教科体育での格技指導と学校行事(学年体育、寒げいこ、柔道大会等)を関連づけ、楽しく参加できる場を設定するとともに、技能の習熟、体力づくりへの意欲の向上、さらに精神面の

育成につとめる。

- 教科体育での格技指導は、グループ学習の形をとり、安全で効果的な指導により技能の伸長をはかるとともに、社会性を養う。
- 格技指導において技能面の指導にのみ陥ることなく、生徒の精神面の充実と礼節など、のぞましい生活態度の習慣化を図る。
- 施設・設備の有効な活用と安全対策に心掛ける。
- 広報活動を活発にして、格技に対する父兄の理解を深める。

(2) 推進の組織と内容



(3) 推進の経過

〔 55年度 〕

格技指導推進校の指定を受け、県教委、地教連の指導のもとに推進基本方針を決定し、格技についてのアンケート、体力測定等による生徒の実態把握、職員の構成、施設・設備の実態から指導内容と方法、推進組織、主題を設定した。推進組織を4つの班とし、各推進班で実践項目を決め、数回の県教委、地教連の指導を得て取り組んだ。

- 教科体育班
 - ・ 年間指導計画、領域別指導計画の検討
 - ・ 授業研究（柔道の特性に基づいた学習指導）
 - ・ 指導力の向上
- 教科外体育班
 - ・ クラブ、部活動の年間指導計画の検討
 - ・ 全校体育活動と体力づくり
 - ・ 学校行事と格技推進
- 保健・安全・環境班
 - ・ 保健・安全計画の検討
 - ・ 傷害調査、危険箇所の点検と安全対策
 - ・ 設備の充実
- 調査・統計・記録班
 - ・ 生徒の意識調査と処理
 - ・ 体力測定の結果と分析

5月に県外の先進校を訪問し指導を受ける。そこで「体力にあった格技指導」という指導があった。これこそ大切な推進の基本であると考え、全校職員の協力のもとに、全校体育活動による体力づくりに心掛けるとともに、格技指導の推進を図った。さらに、学校教育全体の中で、基本的な生活の習慣づけを徹底した。

11月町営体育館の新築により、柔道場（98畳）が完成した。教科体育での格技指導及び寒げいこを終えてのクラス対抗の柔道大会（全員参加）は、生徒も意欲的に参加し、盛大に開催できた。

〔 56年度 〕

指導主事を招いての授業研究、講師を招いての柔道・剣道の指導、指導者の資格取得、全校体育活動の体力づくり、資料の作成と整理など各班での昨年の推進内容を一層深めながら、本年度は次のことに取り組んだ。

- 昇 級 審 査 会
 - ・ 柔道の学習に興味と関心を持たせ、意欲的に取り組ませるために、本校独自の級位を設け、審査会をした。（全生徒の名札を掲示）
- 寒げい古・柔道大会
 - ・ 昨年より技能、態度面も一段と向上し、盛り上がった大会となった。
- 女子 剣 道 の 実 施
 - ・ 女子の格技に対する理解を深めるとともに、体力づくりと精神の鍛練をねらい、学年体育・寒げい古に剣道を取り入れた。
- 黙想の時間の実施
 - ・ 落ち着いた学校生活をさせることをねらって、朝と帰りのホームのはじめに黙想の時間を設定した。短時間ではあるが継続することによって効果をねらいたい。
- 全職員の発表会参加
 - ・ 県内外の発表会へ全職員が参加し、研修につとめた。
- 施設・設備の充実
 - ・ 畳の下へ敷くスポンジマット、しない（180本）防具（20組）

視聴覚教材等を購入でき、活用することができた。

- 56年度のまとめ ・ 各推進班により56年度の推進内容をまとめた。

〔57年度〕

55・56年度の推進内容をより深めるとともに、格技推進の経過と内容をまとめる。

- 本年度の格技推進計画の作成と推進
- 教科体育、学年体育等の計画、推進、まとめについて指導を受ける。
- 女子剣道部、剣道クラブの新設
- 設備の充実 ・ 赤畳(18畳)◎指導用パネル、試合掲示板(1)、◎防具整備棚、◎しない立て、◎受け身の額など、◎は自作備品
- 推進のまとめの紀要・資料集の作成
- 発表会の準備

(4) 教育課程の編成

学校教育全体の中で、格技指導をどう位置づけ、生徒の教育にどのように生かすかを推進の基礎とした。そのため、格技の特性を次のようにとらえ、教育課程編成の資料とした。

ア. 柔道の特性

㊦ 技能の特性

徒手で相対する2人が、互いに相手の動きに応じて攻防しあう対人的な競技である。したがって、柔道の技能は対人でなければ成立しない。

㊧ 運動の特性

全身運動で非常な体力を必要とし、相手との関係で自分自身を完全にコントロールしなければならない。そのため、精神力、技能、体力の総合充実が要求される。

㊨ 学習時の特性

柔道の技能は身体で習得するものである。生徒全員が初心者であることを考慮して、技能の段階的な指導(とくに、基礎技能の指導工夫)をする。また、安全で対等な競技をめざすため安全のための技能を重視するとともに、禁止事項の徹底、練習場の安全確保、体重制等を考慮しなければならない。

㊩ その他

直接的に相手の身体を制するため、相手を尊重する態度や公正な態度が要求される。また、練習相手にはもちろん、自分に接する練習場などの施設に対しても、感謝の心を持つ。

イ. 教育課程の編成

教科体育は、格技推進の中核となるもので、次の点を配慮した。

- ・ 生徒の柔道に対する経験を深めるため、格技の指導時数を、1・2年25時間ずつ、3年16時間とし、総時数を66時間とした。
- ・ 基礎的の技能を身につけさせるため、指導にあたって楽しく学習できるように工夫し、格技の特性を生かした指導法の研究と実践につとめた。
- ・ 学校行事と関連づけて、生徒に興味・関心を持たせるため、校内の級位を設け、昇級審査会、

学年体育、寒げいこ、柔道・剣道大会を実施した。

ウ. 他教科との関連

格技推進の主題、指導目標は、格技の指導のみによって達成されるとは考えられず、学校教育全体のなかで達成されるものである。

- ・ 授業の始めと終わりのあいさつがしっかりできる。
- ・ 始業とともに学習の態度ができるようにする。
- ・ 他の人の発言を尊重し、最後まで聞く態度を養う。
- ・ 意見が最後まで言えるようにする。

エ. 特別活動

周知のように、望ましい集団生活を通して充実した学校生活を体験させることで人格の調和的発達を図り、健全な社会生活を営む資質を養うことが、特別活動の目標である。この目標を達成するために、格技の特性を取り入れることは、たいへん有効である。そのため、生徒活動における「オアシス運動」などによる基本的生活習慣の徹底や、学級会活動、クラブ活動などとの関連を図りながら、学校行事を充実していくことは、生徒の格技に対する関心や理解を深め、その特性を生活習慣として定着させることに有効である。

2. 研究の内容

(1) 生徒の実態

本校は、市街地に隣接した農村地帯で、生徒は全体的に素直でおとなしいが、その反面、積極性を欠く面が見られる。生徒の体力・体格は、平均的であると思われる。しかし、最近地域的に市街化の影響を受けるようになり、生徒の体格面で、わずかに肥満型の傾向を示してきている。また、行動面でも「ねばり強さ」「気力」に欠ける傾向が見えてきている。

(2) 平田式体力判定法による生徒の実態

ア. 結果の整理

㊦ 各項目の判定をまとめ、体格点、体力点、総合点を求める。

(イ) 総合点を主に健康度を7段階に分け、生徒に知らせる。

㊧ 各項目を学年ごとにまとめ、全体的傾向をとらえて、全校体育活動や教科体育などの努力目標にする。

(ロ) 各年度の結果を比較し、全体的な体力の伸びや、各運動部の体力の追跡調査をする。

イ. 結果の分析(55・56年度の比較)

㊦ 体格面

全校的に胸囲の伸びが大きく、広胸であることを示している。身長は2年女子をのぞいて、全国平均以上である。体格点は男女とも順調に伸びている。運動部員の体格では、柔道部、野球部の体格点が向上している。特に柔道部員は、体重、胸囲の向上が目立っている。

(イ) 体力面

1年生は男女共に体力不足が目立ち、格技推進に取りくみ出した2年、3年の男子は、順調に体力が向上している。特に2年男子が総合点ですぐれている。前年度持久力と跳力が劣っていたが、全校体育等を通して、持久力・跳力の向上につとめた結果、56年度は、全ての項目

で向上した。

運動部員についても、総合点では、野球部員の得点が大きいが、前年（55年）との比較では柔道部員が大きく向上している。

(3) 教科体育におまる格技指導

ア. 教科体育の目標と格技のねらい

㊦ 教科体育の目標

- 各種の運動を適切にさせることによって、運動に親しむ習慣を育てる。
 - ・ 指導内容の精選、段階的な技能の指導、計画的、合理的な学習
 - ・ 技能の習得・向上の喜びや、仲間とともに運動することの楽しさ
- ルールやマナーを尊重することによって、適切な行動様式や公正な態度を養う。
 - ・ ゲームにおける公正な態度、協力的な学習態度
 - ・ 自己に厳しく、粘り強く学習する態度
- 健康の増進と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。
 - ・ 健康、安全、体力についての知識・理解、計画的な運動実践と規律ある生活

㊧ 格技のねらい

- 柔道の技能を習得し、技能の程度に応じた試合ができる。
 - ・ 1学年 … 基本動作や初歩的な投げわざ、固めわざを身につける。
柔道的な動きを身につける。
 - ・ 2学年 … 多くのわざを習得し、攻防の基礎を身につける。
自分の体位、体力に合ったわざを身につける。
 - ・ 3学年 … 相手の変化に即応した攻防の技能を身につける。
連絡・変化わざを身につける。
- 互いに相手を尊重し、公正な態度で練習や試合ができる。
 - ・ 礼法の遵守、協力的な学習、活力ある学習（気合、敏速な行動）
- 健康、安全に留意して学習する態度を育てる。
 - ・ 身体、柔道着の清潔、練習場所の整備と安全確保、禁止事項の徹底

イ. 年間指導計画における格技の位置づけ

㊦ 柔道の指導時期と時数

学年 \ 月	10月	11月	12月	1月	計	
1, 2学年	5	12	6	2	25	66
3学年	2	8	4	2	16	

㊧ 柔道指導計画・・・省略

- 作成上の留意点
 - ・ 基本動作は、準備運動や補助運動に含め毎時間実施させる。その内容については、柔道の技能段階に応じたものを、指導する内容に合わせて適切に行わせるようにする。

- ・ 指導する技能については、同じ系統のわざを各学年に配当し、学年が進むにつれて発展的にとらえられるようにする。

ウ. 指導の要点

- (ア) 柔道の技能が、対人でなければ成立しないという特性から、対人で攻防を学習の中心とした。初歩的段階では、基礎的な内容が多くなるが、対人技能への発展を考慮し、相対での練習を多く取り入れた。(移動、体さばき、くずし、受け身など)進んだ段階では、基礎技能を発展させ、攻防における自分に合ったわざを研究する場や、約束手練を多く取り入れた。試合は、各段階のまとめとして実施した。
- (イ) 柔道は、その技能の特性から、受の指導を先行させている。特に初歩的段階では、受け身や投げわざにおける受けの動作(協力)、安全な投げられ方等は、技げること以上に大切な技能である。単調な基本動作や痛さを我慢しての受け身や投げわざの指導でなく、それぞれの技能の向上を図りながら、楽しく、粘り強く練習できるように、細かいステップの段階的指導をした。
- (ロ) 柔道を学習していくうえでの望ましい態度は、体育学習のみならず、学校生活や社会生活を送っていく場合にも欠くことのできないものである。そこで、
- 相手を尊重する態度(礼法、思いやり、協力、規律を守る、公正な態度)
 - 粘り強く学習する態度(向上心、探求心、気力)
 - 自他の安全に留意する態度(危険の予測、学習の場の整備、禁止事項の遵守)
- を、学習活動全体を通して指導した。

エ. 指導の実際

(ア) 柔道着について

柔道着は、す肌に着用するため、父兄の協力を得て全員個人持ちとしている。柔道着の管理(たたみ方、保管場所、洗たく等)とともに、授業の前には、自分の衣服やズックの整とんでも合わせて指導している。

(イ) 学習集団とその指導

- 各学年とも6~7人の体重別、異質グループを作り、柔道部員を必ず1名入れた。グループ内での役割分担(リーダー、記録、用具、安全係)を明確にし、ひとりひとりが活躍できる場を設けた。グループの中では、体位・体力に合わせた2人1組を単位とした。極端に体力や技能の劣る生徒には、指導力のある温厚な生徒と組ませた。
- 初期の段階では、2人の練習を中心とし、徐々にグループ内で相手をかえ、たくさんの違った相手と練習できるようにした。また、学習の大部分をリーダーを中心としたグループ活動とし、その中の人間関係、協力関係を好ましいものに向上させるように指導した。
- 指導者の構えとして、一斉指導で与える型の授業でなく、生徒が自ら問題点を見つけ、その解決をはかる学習や、自ら発見していく学習を大切にした。そのために、授業の型をつくり、生徒が、1時間のうちのこの時間は自分たちで考え活動するのだという意識を持たせた。そのために、技能の段階評価表(体育ノート)の記入や、コンセプトフィルムを交代で活用させる活動を多く取り入れた。

ウ) 柔道場の活用

柔道場は98畳であるが、40名前後の生徒が約束練習や自由練習をするのは危険である。そこで、グループの中でローテーションをして、練習をする生徒、わざのかけ方を見たり、記録や審判をする生徒に分かれて、活動を効果的に、柔道場を有効に活用した。

ク) 視聴覚教材の活用

体育掛図、指導パネル、VTRテープ：日本の武道（2本）、コンセプトフィルム（12巻）などを、それぞれの長所を生かした場面で活用させた。

オ. 安全対策

ク) 施設の安全

- 小体育館の練習場に、畳のずれ防止と衝撃緩和のため、スポンジマットを敷いた。
- 柔道場の整備につとめた。（畳の破損、畳のずれ、周囲の整とん等）

キ) 投げわざ、固めわざの指導における安全

- 技能の段階的指導（低→高、弱→強、遅→速、易→難、基本→応用）
- 基礎技能の徹底（受けの指導、取りの指導）
- 柔道場の広さと練習方法・人数の工夫（隊形の工夫、投げる方向、順序、移動の方法等）
- 投げわざ、固めわざにおける禁止事項の徹底

ク) 態度における安全

- 黙想の実施、礼法の遵守によって、落ち着いた態度、粗野な行動を慎む態度、相手を思いやる気持ちを持たせる。また、気合によって気持ちを引きしめ、真剣に学習する態度や活発な学習の雰囲気づくりをする。さらに、自分に合った柔道着を正しく着用させ、練習中乱れたら直ちに直すようにする。

カ. 評価

- 自己評価表を活用することによって、自分の技能を評価させ、次の段階の学習に意欲を持たせる。自分の技能の欠点や正しい方法を理解することによって、他の生徒へのアドバイスもできるようにする。
- 校内昇級審査の活用（既習のわざの定着度を1～7級の段階で審査する。）
- 試合形式による評価（技能に応じた試合で、技能、態度、審判の方法等を評価する。）
 - ・ 採点形式の試合 … 評価のポイント、わざを決めて採点する。（受け身、投げわざ等）
 - ・ 約束乱取形式の場合 … わざの限定、投げわざ（固めわざ）のみに限定する。
 - ・ 簡易試合 … 勝敗の基準を明確にし、態度、審判法も合わせて評価する。

キ. 学校行事への参加

教科体育柔道のまとめとして、1月中旬に寒げい古と柔道大会を実施している。授業で習得したわざを、寒の内に練習することによって心とわざと体を鍛え、柔道大会に備えた。授業では、寒げい古の意義や心構え、ねらいについて理解させ、全員が皆出席できるように指導した。柔道大会では、全員が団体戦に参加し、半数が個人戦に参加するため試合の方法について指導し、生徒が試合の運営や審判ができるようにした。

(4) 特別活動における格技指導

本校の格技指導は、教科体育（柔道）を基本に、全校体育（男子柔道、女子剣道）、柔道クラブ、剣道クラブ、柔道部、剣道部である。さらに、これらの学習の成果を発表する学校行事を実施した。

ア. 全校体育活動（学年体育）

月に2～3回（50分）ゆとりの時間の活動計画により、学年ごとに年間を通して実施した。

イ. 学校行事

- ・ 昇級審査会（学年体育の時間）寒げい古、柔道大会（男子）剣道大会（女子）を実施した。

ウ. 柔道、剣道クラブ（クラブ数18）

毎週木曜日の6校時に実施、クラブの活動計画に従って、クラブ長を中心に活発に発動した。

エ. 部活動（柔道部、剣道部）

56年度より、全員入部の指導をし、生徒全員が11の部のいずれかに所属している。そのため部員も多く、柔道部（42名）、剣道部：57年新設16名である。

部活動の目標、各部の活動計画に従って、熱心に活動した。柔道部は本年度地区、県大会で優勝し、北信越、全国大会へ出場した。また、8名が初段を取得した。剣道部は新設されたばかりであるが、地区大会の個人戦で3位入賞を果たすなど、着実に成果を上げている。

4. 格技推進の成果と反省

全職員が格技の教育的価値と、指導法の追求によって、格技指導に対する意識の高まりと、共通理解、協力体制のもとに推進できた。2年次後半から学年体育を通して、女子に剣道を取り入れることができ、3年次には、剣道クラブ、女子剣道部が新設され、格技推進を女子も含めた全生徒に対して推進することができた。

教科体育、特活、その他の学校生活において、冷静に自己を見つめ自己を高めていこうとする態度や、体力面、精神面でも、粘り強さや、礼儀正しさが見られるようになった。また、格技推進によって、安全に対する意識や健康、保健衛生の関心が深まった。

本年度で3年間の指定を終えるが、今後いかに継続、推進するかによって、出はじめた成果も、より確かなものになることを確信する。

幸い、施設、設備にたいへん恵まれているので、「歩みはじめた剣道」、「糸口のつかめた柔道」を無理なく継続、推進し、体力づくりと格技の特性を生かした日常生活の実践により、主題「心身ともに健全な生徒の育成」の一層の実現をめざし、人間性豊かな生徒が育成されるように努めたい。

運動の喜びや楽しさを味わい、親しみながら体力を高めていく生徒の育成 ——意欲的に取り組む 体育活動をめざして——



香川県高松市立勝賀中学校
校長 松本 俊文



研究主任 教諭 与田 英雄

〒761 香川県高松市香西南町565番地 ☎(0878)81-3141

1. はじめに

生徒は、自ら伸びようとする力を持っているが、本校生徒の活動をみると、学習や運動に対する意欲と活気に乏しいところがある。そこで「いかにすれば活気があり意欲のある生徒を育てることができるか。」ということが、本校教育実践の課題となっていた。ちょうど香川県教育委員会から昭和56年、57年度「学校体育」部門での研究指定校になったのを機会に、本校の課題について、活気ある生徒を育成するために、今教師がやらなければならないことは何かについて考え、それを運動面から取り組むことに共通理解をもった。それには、生徒の学習意欲と体力を高めることであり、実践方向として、学習意欲を育てることは学習指導法で、体力づくりについては、生涯体育に結びつく基盤づくりをすることであるという考えかたをした。

今後の体力づくりは、生徒自ら日常生活の中で運動を実践して生活化をはかり、保健体育科の時間はもちろんのこと、特別活動など学校教育活動全体を通じて指導し、一人ひとりの生徒に運動の喜びや楽しさを味わわせ、自ら運動に親しむ習慣を身につけさせることが重要であるとともに、それが生涯体育に結びつくという考えに基づいて、この研究主題を設定した。

2. 体力づくりを推進するための基本的な考え方

- (1) 体力づくりを教育活動全般でとらえる。
 - 教科体育・学活・道徳・学裁・クラブ・部活・休憩時間など教育活動全般でとらえる。
- (2) やる気を育て、自主的な活動を推進する。
 - 学習意欲を高め、運動の喜びや楽しさを味わわせる。
- (3) 体育の行事との関連をはかり、自主的な活動を活発にする。
 - 運動種目を学校行事と関連させ、自主的な活動を活発にするとともに行事を盛りあげる。
- (4) 記録をとり、その変化で生徒の意識づけや行動の変容を評価する。
- (5) 全職員で体力づくりに取り組む。

3. 生徒の実態（運動・体力に関する意識）

- (1) あなたは運動が好きか。 (㊶) (2) あなたは自分の体力についてどう思うか。(㊶)

項目	男 子			女 子		
	1	2	3	1	2	3
だい好き	50.4	53.8	52.3	58.9	50.8	51.0
好き	40.6	34.1	38.9	47.2	36.0	38.9
あまり好きでない	8.1	8.6	6.5	3.4	7.4	6.2
だい嫌い	0.9	3.5	2.3	0.5	5.8	3.9

項目	男 子			女 子		
	1	2	3	1	2	3
非常に強い	4.6	5.1	5.6	3.8	3.5	3.2
強い	31.0	33.1	28.1	35.4	30.2	25.5
あまり強くない	56.3	51.5	60.0	55.4	59.0	62.2
非常に弱い	7.3	7.9	7.3	7.1	10.6	9.1

(3) 1時間の自由時間があれば運動したいか。(%)

項目	男 子			女 子		
	1	2	3	1	2	3
おおいにしたい	64.2	57.9	57.3	54.0	45.0	44.4
少ししたい	27.5	29.7	31.5	39.0	39.6	42.3
したくない	6.5	9.2	6.3	6.3	11.5	10.9
全くしたくない	1.8	3.2	4.9	0.7	3.9	2.4

(4) あなたはさらに体力を高めたいと思うか。

項目	男 子			女 子		
	1	2	3	1	2	3
おおいに高めたい	60.8	53.2	51.4	53.8	46.3	41.5
高めたい	28.4	25.8	35.7	36.7	55.0	40.2
高めたくない	10.5	18.3	12.4	9.5	8.3	17.5
全く高めたくない	0.3	2.7	0.5	0	0.4	0.8

(5) あなたは家庭で体力づくりについてどのようにしているか。(%)

項目	男 子			女 子		
	1	2	3	1	2	3
現在している	36.5	31.0	27.5	24.7	20.0	18.9
しようと思っているが できない	44.1	48.9	50.0	61.8	57.0	55.1
していない	19.4	20.1	22.5	13.5	23.0	26.0

調査人数

1年男子	191	女子	168
2年男子	200	女子	192
3年男子	172	女子	176

(6) 実態の考察

ア. 運動が好きな生徒が約85%で、運動に対する興味、関心は高い。

イ. 自分の体力について約65%の生徒があまり強くないと思っている。また、自信がなく非常に弱いと答えた生徒が10%もあり、実に75%の生徒が体力について十分でないと考えている。

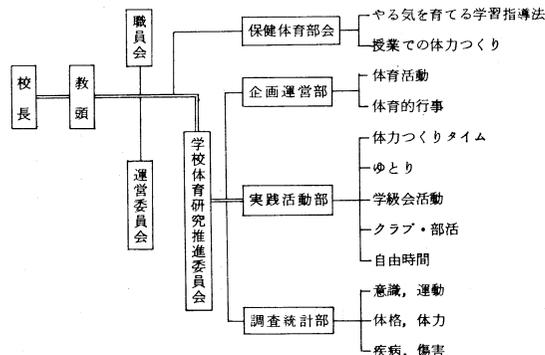
ウ. しかし、運動に対する欲求はかなり高く、運動をしたいと思っている生徒は85%もあり、教師が工夫したり、手だてを加えれば運動を実践するものと考えられる。

以上のことから、運動をしたいという欲求はかなり高いが、体力については自信のない生徒が多いことがうかがえる。

エ. それでは、運動を実際にどの程度の生徒が実施しているか。とくに、家庭生活での取り組みについてみると、男子で約25%、女子では15%程度の生徒しか実践していない。ここで注目したいのは約50~60%の生徒が、運動をしようと思っているが、なかなかできないと答えていることである。その主な理由は、場所、仲間、時間などの問題や学習との関連などをあげているが、体力づくりの必要性や方法についての理解不足のため実施していない生徒もかなりいる。いずれにしても、これらの諸条件を整備していけば、体力づくりに取り組む生徒はかなり増えるものと考えられる。

4. 研究組織・研究方法

(1) 組織



(2) 研究方法および内容

・研修日 毎月1回各部会および全体の研修日をとる。

学期に1回学校体育研究推進委員会を開催し方向をきめる。

・学校体育研究推進委員会

校長、教頭、教務主任、学年主任、現教主任、特活主任、生徒指導主事、各部会の部長および体育科職員で構成し、研究計画を立案し検討して研究推進の中核となる。

・企画運営部

体育的行事や自主的にスポーツ活動に取り組み、運動の生活化をはかることや、自己の体力を把握し、さらに向上させることなどの企画運営にあたる。

・実践活動部

運動に対する関心を高め、とくにスポーツ活動を実践し、その中で技能や体力を高めるとともに、運動に親しませ生活化をはかる。

・調査・統計部

生徒の運動や体力についての意識や体格、体力などの調査および統計にあたる。

5. 研究内容

(1) 教科体育

昭和56年・57年度の体育学習の研究目標を図Iのように考え研究を進めた。とくに、運動の喜びや楽しさを味わわせるためには、生徒にやる気を喚起させることが重要と考え、やる気を育てる指導法を研究する。また、授業の中で体力づくりをどうとらえて実践すればよいか。この二点について研究を推進した。

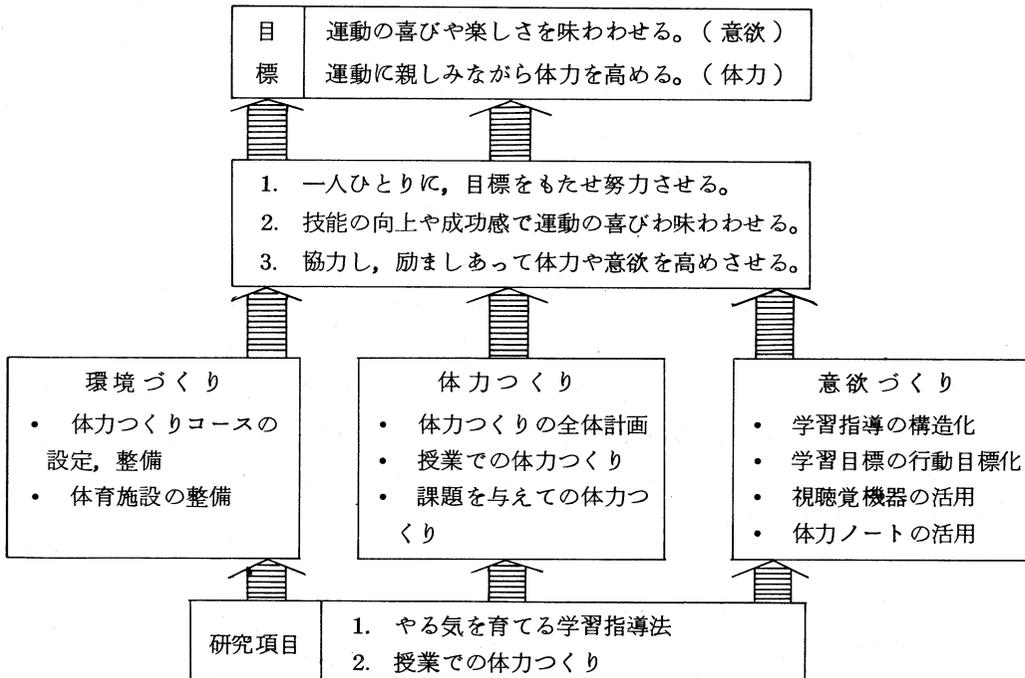


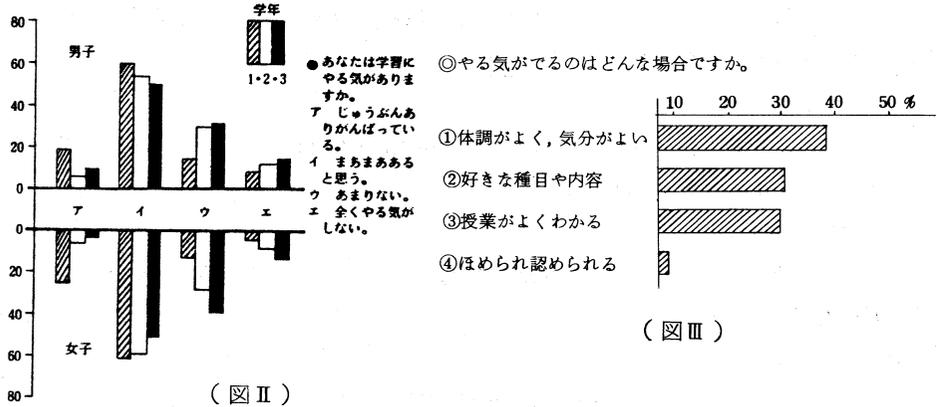
図1

ア. やる気を育てる学習指導法

㌆) やる気について

① 学習に対する「やる気」

学習に対する「やる気」にはいろいろな要素が複雑にからみあっているが、本校生徒の学習に対する「やる気」は低いようである。生徒は本来学習に対し「がんばりたい」・「力をつけたい」という欲望をもっていると考えられるが、技能でのつまづきが要因となって、学習内容が進むにつれて「やる気」を失っているのではないだろうか。(図Ⅱ)



(図Ⅱ)

② 「やる気」の要因

〔教師の認識〕

- ほめる, 認める, ◦ 興味・関心をもてる, ◦ 目標やめあてがはっきりしている,
- 授業がわかる, ◦ 生徒の活動量が多い, などにより「やる気」が育つだろう。

〔生徒の意識〕

- 生理的, 感情的欲求の充足感があるとき, ◦ 興味・関心があるとき,
- 授業がわかるとき, など「やる気」を感じるようである。

③ 「やる気」の要因と学習指導

「やる気」の要因を授業との関連で分析すると

- ㉞ 運動種目や学習内容に興味・関心をもてる場合……………(興味・関心)
- ㉟ 授業がよくわかる場合……………(成功感・成就感)
- ㊱ 学習することがわかり, 自分が活動できる場合……………(主体的・自主的活動)

以上のことから、「やる気」を育てる学習指導法とは、「よくわかる授業」を創造することであると考えた。生徒の心理的・生理的欲求の充足など生徒理解を考えながら、毎時間の授業をどのようにすれば「わかる授業」になり、生徒が意欲をもって学習に参加できるかという指導法について研究をすすめた。

(イ) 研究内容

① よくわかる授業について(図Ⅳ)

生徒を対象に実施したアンケート調査を、指導法の面から検討すると、

- ㉞ 基礎的, 基本的学習内容の指導

① 教師の指導目標および生徒の学習目標の明確な授業

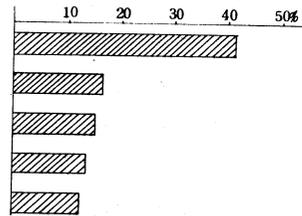
② 生徒活動を活発にする指導法の工夫

② 学習指導目標の明確化

③あなたにとって「よくわかる授業」とは、どんな授業ですか。

わかる授業を創造するためには、まず、教師に「なに」を指導するかという指導目標が明確であるとともに、生徒にも学習のめあてをはっきり認識させた授業が必要である。

- ①くわしくゆっくり進む授業
- ②要点をつかんで教えてくれる
- ③資料・例題の多い授業
- ④得意な興味ある内容
- ⑤楽しく勉強できる授業



(図Ⅳ)

③ 学習指導過程の工夫

生徒が自ら活動できる学習過程を組織することで、生徒活動の場と内容、方法を明確にし、評価を適切に取り入れた授業の工夫をする。

(ウ) 研究の視点

- ① 各時間の学習目標を具体的な行動目標で示し、生徒にも学習のねらいをはっきり認識させた授業を行う。
- ② 学習目標を分析して下位目標を抽出し、構造化することによって指導の重点化をはかる。
- ③ 学習の過程に目標達成のための作業を取り入れ、生徒活動を自主的に活発にさせる。
- ④ 学習過程を明確にするため、学習の流れを図式化・構造化したフローチャートによる指導案作りの研究をする。

(エ) 実践の重点

① 到達目標を考えた年間指導計画の作成

指導事項の内容を分析し、生徒の実態にあった目標を検討して、生徒一人ひとりに最低これだけはという到達目標を考えた年間指導計画を作成した。

② 学習目標の行動目標化

一時間の学習の中で生徒に何が「でき」・「わかる」ようになればよいか。そこに到達するまでに何が一つ一つ「できて」・「わかって」いかなければならぬかを教師がしっかりと握していることはもちろんのこと、生徒にも本時の学習のいきつくゴールが何であるかを行動目標ではっきり示すことを指導法の一視点とした。これは導入の工夫と相まって学習活動の原動力となるものであり、次の点を考慮して作成した。

⑦ 目標は観察可能な行動目標で示す。

⑧ その行動がどのような条件のもとで要求されるか明らかにする。

⑨ 目標の達成基準を明らかにする。

③ 活動を取り入れた学習

活動で学習の個別化をはかり、自主学習力を育てるものと考え、次の点に留意して一人ひとりに学習の成立をはかろうとした。

⑦ 「できた」・「わかった」という成功感・成就感が味わえるような内容を具体的な活動として取り入れる。

⑧ 学習目標を達成するまでに組み入れられた活動が、指導過程に適切に関連づけられている

とともに、集団学習や時間的制約の中で、一人ひとりが生かせるよう工夫する。

㉓ 活動することが、どのような能力を養い知識をつけることになるかを明確にしておく。

(イ) 教材提示法の工夫

指導法の定着は後退に結びつく。資料の提示、教育機器など、教材、教具についてのちょっとした工夫が理解を助けたり、興味や意欲づけになることがある。教師の創造性が生徒の「やる気」を育てる要因となる。

(ロ) 授業構造図の作成

本時の行動目標を分析し、下位目標を抽出して、そのつながりや、順序性を次の点を考慮して図式化することにした。

- ① 目標や評価を焦点化し、学習指導過程を明確にする。
- ② 学習状況の点検や個人指導を生かす。

(ハ) 学習の流れを図式化した指導案の作成

フローチャート方式の指導案には、

- ① 生徒活動の内容や学習の位置がよくわかる。
- ② 到達目標に対し生徒になにができればよいかをはっきりし、指導のあいまいさがなくなるという利点があるので、種目や教材のもつ特性によって問題点も予想されるが、困難を覚悟で挑戦した。

以上六つの実践努力点を掲げ、わかる授業を創造するために、この中から種目や教材のもつ特性や教師の指導観によって具体的にとり入れ、学習意欲の喚起につとめた。

「下農は雑草を育て、中農は作物を育て、上農は土地を育てる」という言葉がある。従来ややもすれば知的(技)な面にのみ目が向き、生徒の興味・関心・意欲などを軽んじた傾向にある。われわれはストレートに学力(技能)を考えるより、どうすれば学力の向上に結びつく学習意欲、つまり、「やる気」を育てる土をどのようにすれば耕すことができるかという方向で実践した。

1. 授業での体力づくり

各運動領域や種目の特徴を考慮し、主運動で養われる体力要素の分析および1時間の授業の流れの中で行う体力づくりを検討し実践した。また、教科外体育での体力づくりと関連をはかった。

(イ) 一時間の授業の流れの中でとらえた体力づくり

準備運動	主運動	整理運動
<ul style="list-style-type: none"> ・体温を上昇させる運動 ・筋肉をほぐす運動 ・基礎体力を養う運動 ・主運動に必要な体力を養う運動 ・主運動につながる補助・補強運動 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本練習 ・応用練習 ・試合・ゲーム <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">体力要素の分析</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸をととのえる ・リラクゼーション

とくに、準備運動で実施する体力づくりは、季節や運動種目により多少その内容が異なるが、基本的には、一定期間内容を固定し、自主的に実践できるようにした。また、基礎体力を養う運動は体力づくりタイムのサーキットとし、教科外での体力づくりと関連をはかった。

(イ) 準備運動の中での体力づくり

ウォーミングアップ	基礎体力を養う運動	補強・補助運動
体温を上昇させ、筋肉をほぐすために行う。 ランニング・柔軟体操など	一般的な体力を養う、とくに、筋力・瞬発力を養う。 サーキット、なわとびなど	主運動に必要な体力を養い、その基本技能を取り入れた運動をする。

(2) 教科外での体力づくり

週2～3時間の教科体育の時間だけでは体力を高めたり、運動の習慣化をはかることはできない。学習指導要領「総則3」に基づき、いろいろなところで体力づくりの場を設定し、生徒に運動する機会を多くした。

ア. 体育集会

㊦ 目的

体力づくりの必要性や方法を理解させ、実践する能力を養う。

㊧ 方法

- ① 対象 全校生徒
- ② 実施日 毎月1回(第3月曜日の1校時)ゆとりを活用する。
- ③ 内容 体操、ボールゲーム、体力測定、サーキット、ストレッチ体操など。

イ. 体育活動

㊦ 目的

スポーツ活動を通して、運動の喜びや楽しさを味わわせる。

㊧ 方法

- ① 対象 各学年団
- ② 実施日 3週間に1回(3学年でローテーション、木曜日6校時)ゆとりを活用する。
- ③ 内容 体育的行事との関連をはかり、球技、競争遊戯、持久走など。

ウ. 体力づくりタイム

㊦ ねらい

- ① 適切な運動を行わせることにより、生徒一人ひとりの体力を高めるとともに、運動の喜びや楽しさを味わわせる。
- ② 持久走や短距離走のように、全力をださざる運動で生徒の運動欲求を満足させ、かつ、最後までやりぬく気力を養う。
- ③ 体力づくりの方法を実践を通して理解させ、学校や家庭でも自主的に運動が取り組めるようにする。

㊧ 方法

① 活動時間のとり方と実施曜日

12:50 13:00 13:15 13:25

昼休み	更衣	体力づくり	移動	5時校
	移動	タイム	更衣	

曜日 内容	月	火	水	木	金	土
体力づくり	1・2年	3年	1・2年	3年	1・2年	
基礎学力	3年	1・2年	3年	1・2年	3年	

※実施しない学年は教室で学力の補充をする。

② 実施方法

学 年	グループ編成	運 動 種 目
1・2年	6 班	6種目(持久走・サーキット・ボール運動・なわとび、短距離走・ストレッチなど)
3 年	4 班	4種目(持久走・ボール運動・なわとび・ストレッチなど)

班で運動種目をローテーションする。2週間で一順する。

③ 活動の流れ

ア. 昼食後 音楽に合わせて更衣・実施場所への移動・器具の準備・整列・あいさつ

イ. 班長の指示で運動開始

ウ. 終了した班から あいさつ、あとかたづけをして教室へ移動

④ 具体的活動内容

ア. 持久走……………校舎外周(約700m)を2周する。

サーキット……………電柱や鉄棒などを利用し12種目の運動を2セットする。

ボール運動……………季節により内容変更をするが、パスやドリブルなどをする。

なわとび……………短なわ、長なわでいろいろな跳び方をする。

短距離走……………20秒間走, 30秒間走およびリレーなどをする。

ストレッチ体操……………基本運動, 柔軟体操などをする。

エ. 学級単位での体力づくり

㊦ 目的

学級の仲間と楽しく運動をする。

㊧ 方法

各学級の体育委員が中心となり、月毎に計画立案・実践・活動報告をする。

<計画立案>

月・私達の学級の体力づくり

①ねらい 年 組

②内 容

	月	火	水	木	金	土
いつ (時間)						
どこで (場所)						
なにを (内容)						

<実践報告>

月, 私達の学級の体力づくり実践記録

年 組

日 曜	いつ (時間)	どこで (場所)	なにを (内容)	何人で (人数)	感想や反省

オ. 長期休業中に課題を与え家庭での体力づくり

㊦ 目的

長期休業中に体力づくりを実践し, 運動の生活化をはかる。

㊧ 方法

① 体力づくりカードの配布

② 実践記録

③ 体力づくりカードの提出

6. 研究成果

(1) 生徒の意識の変容(生徒の作文)

2年 Aさん

初めは私も「あー、また体力づくりか。いやだなあ」と思いながらいやいや外に出ていたが、今はそんなことは思わなくなりました。まず、第一週目はなわとび、長なわや短なわでクラスのみならずわきあいあいにやっています。水曜日は短距離走です。記録をのばそうとがんばっています。金曜日はストレッチ体操です。「セーラー服と機関銃」「風立ちぬ」のリズムに合わせてする体操は楽しいです。

次の週の月曜日は嫌いな持久走です。木曜日にサーキットをして、最後は金曜日のポール運動です。ドリブルしたり、蹴ったりして時間をはかったり、リレーをするのは非常に楽しいです。この体力づくりは、とても役に立つと思います。記録がよくなったら、やはりうれしいです。よくないときは今度こそ!!と意欲がわいてきます。これからも体力づくりを一生けんめいにして、自分自身の体力の向上をすこしでもはかりたいと思います。

以上の例から

- ・ 運動意欲が高まり、運動の喜びや楽しさが味わえるようになった
- ・ 体力づくりの必要性を理解し、自主的に運動する習慣が身につけてきたことがうかがえる。

7. まとめと今後の課題

2か年の実践研究で運動に親しみ体力を高めさせるために、いろいろな方法で体力づくりを実践したが、より効果的であったのは「体力づくりタイム」である。なぜなら、それは日課になり、生徒も教師も習慣化され定着化をはかることができたからである。最初は集合するのに時間がかかり、運動に節度を欠いていたが、徐々によくなり、音楽にあわせ自主的に集合し、活動も活発になってきた。10分間の運動でどれだけ体力がついたかということは別として、生徒自ら運動に親しみ喜びを感じるようになったことは、それなりに成果がでていると思う。とくに生徒が変容した点は次のとおりである。

1. 体力づくりの方法を理解し、部活動や学級での体力づくりに活用されるようになった。
2. 体力に関心を持ち、つねに目標をもって取り組むようになった。
3. 記録に挑戦したり、仲間と楽しく運動して運動の喜びを味わえるようになった。
4. 体育的行事が盛りあがり、積極的に運動に取り組むようになった。
5. 昼休みなど休憩時間に自主的な運動をする生徒が増えてきた。
6. 集合する機会が多いが、集団行動がスムーズになり、敏しょうな行動ができてきた。

このように習慣化されると、生徒は喜んで運動に親しみ、継続することによって体力が高められるということをも身を持って経験したと思われる。

今後さらにこの研究を深め、一人ひとりの生徒が運動の楽しさや喜びを味わい、自主的に運動に取り組むようにするための方法や内容について検討していきたい。また、実践活動での体力の向上や評価については今後の課題とした。

8. 研究者氏名

◎与田 英雄 木下 真一 石川 貴義 高木 千恵 田中百合枝

より深く より楽しい体育学習

「自主性を生かした体育学習をめざして」

バレーボールの実践を通して



神奈川県立金井高等学校
校長 宮本 淳



研究主任 教諭 和田 実

〒244 横浜市戸塚区金井町100 ☎(045)852-4721

学習指導要領改定に伴なり研究推進校として、その主旨を生かすための授業研究を、昭和56・57年の2ケ年にわたり実施、考察してまいりました。研究主題として、「より深く、より楽しい体育学習」、副題として「自主性を生かした体育学習をめざして」をテーマに、年間指導種目を少なくし、長期にわたり、しかも、各分野の専門教師がそれにあたることによって、より深く学習をする。同時に、教師指導型でなく、生徒自身の創意工夫により授業を進め、みずから運動を実践する能力や態度を身につけ、生涯スポーツとして実践できることを目標とした。

実践研究種目としては、陸上競技・サッカー（1年生から2年生へと継続）、剣道・バレーボール（2年生から1年生へと移行）を実施し、各種目において教師自身の新しい発想と生徒の創意工夫が生まれるよう、又、研究目的に少しでも近づけるよう展開してきたわけである。

その中から、今回はバレーボールの実践を取り上げ、ここに紹介させていただく次第である。

バレーボールの実践を通して

1. はじめに

前年度は第2学年対象ということもあり、「ゲーム」を通じた学習の中で集団的技能に注目し、ゲームをさらに向上させるためにチーム独自のフォーメーション作りを研究し、その中から各種のねらいを引き出すことを試みたわけである。そして、一応の成果が得られ、その中から高校生にできる生涯スポーツへの動機づけとして『一つのきっかけから生まれる強い問題意識を持たせること』ではないかという結論を導くにいたった。そこで、本年度は昨年の経験を生かしつつ、この結論を立証するため研究に取り組んだわけである。

2. 研究のねらい

本年度は対象が1年生ということもあり、各段階を迫りなかに問題意識を引き出し、その意識の高まりの中から、みずから技術の向上と、チームの完成を目指し、あわせて、バレーボールを通して、集団のスポーツへの取り組む姿勢やその方法の習得をねらいとした。又、長期にわたって専門性を生かすということをふるに発揮する意味でも、部活動の持つ形態や要素を積極的に取り入れ、より大きな効果を期待したのである。そこで出てきたものが『4段階別指導法』であり、これは、長い期間を漠然とチーム作りするのではなく、学習過程を4段階（基礎期、鍛練期、完成期、試合期）に分け、それぞれに、ねらい・目標を持たせ「自分達は今、どういう時期にあるのか、又、そのためにはどのようなことをしなければならないのかを明確にし」各段階に即した指導を試みたのである。同時に、昨年の経験から試合を授業の中心にすえ、1次リーグから3次リーグ戦を開催することにした。

5. 学習内容とその考察

(1) 第1段階（基礎期）

ア.（内容） 従来の個人技の指導に共通する部分はあったが、中でも私の経験から効果的と思われる個人技の導入を行なう。又、それらを単なる個人練習だけで終わらせるのではなく、実践に結びつく複合練習へと移行していった。同時に、以上の練習と平行しながらネットを使用せずバレーボールの特色が生かせ、しかも勝負色の出せる3対3や4対4の乱打を多く取り入れた。従って、基礎期と記してはあるが、従来のパスから始まる基礎練習とは少々意味合いが違っている。

イ.（結果と考察） 短期間で個人技術の向上は望めるものではないが、ポイントをつかんだ生徒の成長は指導者がおどろくほどである。特にパス、レシーブに成長がみられた。又、ネットを使わない3対3や4対4の乱打にも多くの興味を示し、対抗色を強く打ち出すことによって生徒間で工夫がみられ、この時点ですでに変化攻撃を作り出すグループさえみられた。ここでのねらいの主旨に達成されたと思われる。しかし、この時点では技術における個人差があり、生徒間でそれを補正するようなことはほとんどみられなかった。又、ここで昨年成功をみた方法でチーム編成を行なったわけであるが、大変スムーズに行き、ここでまず昨年の経験が生かされる結果になった。（※1）

(2) 第2段階（鍛練期）

ア.（内容） チーム編成がされ、グループ活動の開始である。ここでの学習内容は生徒の創意工夫のもとに計画・立案され実践される。その活動はグループノートによって生徒と指導者とのコミュニケーションのもとに進められる。（※2）

又、1次リーグ戦では、技術、内容よりも『ムード作りを重視』した。そのためルールを簡素化し、特にハンドリングにおけるホールディングとドリブルを緩和した。

イ.（結果と考察）

(ア) **グループ学習から** 試合と平行しているため盛り上がりを見せたが、この時点ではチームとしてどのような練習をしたらよいかわからないというのが実情であった。又、ここで期待した創意をこらした練習はほとんどみられていない。しかし、そのような中でもチームのムードは確実に作られていき、第1段階ではみられなかった生徒間の技術補正がかなりみうけられるようになってきた。

(イ) **1次リーグ戦から** ほとんどフォーメーション的なものはみられない。そのためミスも目立つ。後半になってちらほらセッターを決めポジションのチェンジをするチームが現われはじめたが、このようにチームとしての約束ごと、選手の役割が明確になってきたチームに多くの勝がみられた。しかし、守備での約束、ブロックの約束、攻撃での約束はほとんどみられていない。

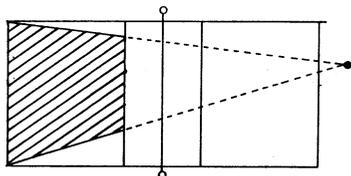
(3) 第3段階（完成期）……………（これより2学期）

ア.（内容） ここでの学習形態は第2段階と同様、グループによって計画・立案された練習と平行して試合が進められ、同時にグループノートが利用されている。2次リーグのポイントには、なんといっても条件を満たすことであり、審判の主観に任せるといふ不合理さは

あってもこの形式での試合は十分に成立していた。その条件とは次のようなものである。

(条件)		(得点)	(ねらい)
1.	Aクイック	2点	アタックのフォーメーション作り
2.	Bクイック	3点	
3.	Cクイック	3点	
4.	フェイント	2点	アタックレシーブのフォーメーション作り
5.	ブロック	3点	ブロックカバーのフォーメーション作り
6.	内でのサービスエース	2点	サーブレシーブのフォーメーション作り

(6.の内容)



1・2・3については影響力をポイント点に、4・5・6ではあくまでもノータッチのみ条件が適応されることとし、21点先取1セットマッチでゲームを実施する。

事前に両サイドのコートに図のような線を引いておく(斜線は除く)

以上の条件をチームとして満たす努力と、又、逆に相手チームの条件を阻止するための工夫とを要求し、それによって現われてくると思われる独自のフォーメーション作りをねらいとしている。

1. (結果と考察)

(ア) **グループ学習から** 最初は生徒にとまどいがみられたが、慣れるに従って条件を満たす努力がみられるようになり、それによってフォーメーションが芽生え始めた。

同時に、各班ごとの練習計画にも目的のはっきり現われ、チームが一つの目的のために一丸となって研究・工夫をしている姿を見ることができた。この第3段階でのねらいはまさに中のし、生徒のバレーボール観、あるいは技術に大きな変化を与えたものと確信している。しかし残念なことには、あまりにもチームの条件を満たすことだけが先行し、相手チームの条件を阻止するための工夫が不足していた感があったことである。

(イ) **2次リーグ戦から** 内容においては、セッターが決まり、フォワードポジションでの位置の入れ替わりなども行なわれ、その役割が明確化されたが、バックプレイヤーでのそれはみられていない。アタックのフォーメーションに多くの興味を示す。サーブレシーブのフォーメーションには各班とも力を入れており、効率的な守備がみられるようになる。W型が主流。アタックレシーブフォーメーションにおいてもフェイント処理専門家を入れることによって、少しずつではあるが型作られてきている。ブロックカバーのフォーメーションでは、指導者側から練習内容を提示したこともあり、動機づけはできているが、実践ではフォー

メーションとしては現われていない。しかし、近くにいる1人・2人はフォローに入っていることが窺われ、ブロックで決定されることが少なくなっている。

第3段階で生じた問題点

1. 授業が長期間にわたるため、途中長い休みが入ると、せっかく盛り上がってきた雰囲気が出切れる可能性がある。今回の授業では、第2段階から第3段階に移行する際の夏休みがまさにそれであった。このことは事前に予測されていたため、一時間のオリエンテーションと練習を組み入れていたが、やはり再度盛り上げる上では大変苦労したのである。このような中で、ムードを取り戻す一番のきっかけを作ったのが視聴覚ビデオ教材(ワールドカップ総集編)であった。この時ほど視覚からうったえる強さを感じたことはなかったのである。
2. 長い間、試合を通していているため、なれあいや、遊び的な傾向がみられるようになる。そこで、いかに試合の反省をチームの技術として結びつけさせていくかが課題になった。そのため、黒板や作戦板等を与え、問題意識をうながしたのである。

(4) 第4段階(試合期)

ア. (内容) ここでは試合中心の授業を展開する。今迄チームごとに積み重ねてきた総決算ともいべきものを披露する場である。そのため、試合形式もバレーボール競技規則に即したものを採用し、15点3セットマッチで実施する。又、グループ活動による最後の創造として、各チームにユニフォームの考案・着用(※3)を促し、チーム独自の統一されたユニフォームのものに試合にのぞむのである。なお、ここで総合評価(※4)を行なう。

イ. (結果と考察)

ウ) **グループ学習から** 試合期のため、グループの行動も必然的に試合と審判を繰り返す形になっているが、長い間試合を消化してきているために、その動きや方法には十分満足のものがあった。特に審判(主・副・線審・得点係)に関していえば、人のために精一杯の誠意をつくすこと、そして、それがやがて自分達に必ず還元されることを理解しつつあることがなによりも指導者としての喜びになった。特に3次リーグは長い時間審判をするケースが多かったが、最後まで乱れることなく、責任をもって取り組む生徒をみて、私は強くそれを確信するのであった。又、ユニフォームの着用では、各チームの特色が出され、過去のグループ活動内容をすべて物語るかのように個性と変化があったことが興味深い。

(イ) **3次リーグ戦から** 15点3セットマッチで実施したわけであるが、当初、時間がかかりすぎ、生徒が緊張を持続できるかどうか心配されたが、その逆に試合が白熱し、1次・2次リーグにはなかった追い上げや、逆転が3セットマッチの中にはあり、その緊張感が3次リーグに現われていたと思われる。又、ユニフォーム着用が、チーム間の競争心に拍車をかけ、試合の雰囲気を盛り上げるきっかけになっていたようである。

<p>(※1) チーム編成</p> <p>第1段階の終わりに試合を行ない、そこでチーム編成を行なう。</p> <p>○ (方法)</p> <p>クラスごとに身長順に3等分し、話し合いの上トレードを行なう。 (仮チーム編成)</p> <p>クラス対抗で試合を行なう。 (全員で観戦)</p> <p>試合後、再度クラス同士の話し合いトレードでチーム最終決定する。 (/チーム約7名)</p>	<p>(※2) グループノート</p> <p>個人との対話やチームに対する助言など、教師と生徒のコミュニケーションの場として活用。</p> <p>○ (使用方法)</p> <p>授業日の3日前に提出 (班長を中心に班員で練習内容を話し合い記載)</p> <p>指導者確認・助言</p> <p>授業で使用</p> <p>授業終了後、個人の感想・チームの反省を記載して、その日の5時に提出</p> <p>指導者確認・助言</p> <p>このグループノートは、第2段階以後、第4段階が終了するまで使用される。</p>	<p>(※3) ユニフォーム</p> <p>各チームの創造性のもとに、チームに即したユニフォームを考案し、着用する。但し、下記条件が必ず満たされねばならない。</p> <p>(条件)</p> <ol style="list-style-type: none"> あくまでも本校指定の体模着をベースとする。 お金をかけずに工夫をする。 グループ全員が統一されたものであること 金属類 (安全ピン等) の使用を、一切禁止する。 														
<p>○ (採分担)</p> <p>(班長/名、体模2名、用具2名、記録2名)</p> <p>このうち班長は、その班で一番バレーボールを知っている、向かつ積極性のある者という条件のもとに五選させた。これは、以後のグループ学習を考慮してのことである。又、体操係には準備体操とバレーボールのためのトレーニング (約/5分) 作りを指示する。</p> <p>○ (チーム名・ボイス)</p> <p>チーム編成の段階で、チーム名とそれに合ったチームボイスを決めさせる。ここにも部活動の要素を取り入れたのである。</p> <p>ここで作られたチームは、実践期間中は一切変更しないことを原則とするが、チーム名とボイスに関しては、第3段階 (2学期) 開始時に、再度のムード作りを兼ねて変更させる。</p>	<p>(※4) 評価</p> <p>第4段階において総合評価を行なう。評価の内容は下記の通りである。</p> <table border="1"> <tr> <td>個人評価</td> <td>○試合の中で個人の動きと技術</td> </tr> <tr> <td>チーム評価</td> <td>○グループ活動での個人の行動</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○筆記試験</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○試合 (2次・3次リーグ) 総合成績</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○グループ活動状況 (含む、グループノート)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○チームのムード作り、まとめ</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○フォォーメーション完成度 (条件達成度)</td> </tr> </table>	個人評価	○試合の中で個人の動きと技術	チーム評価	○グループ活動での個人の行動		○筆記試験		○試合 (2次・3次リーグ) 総合成績		○グループ活動状況 (含む、グループノート)		○チームのムード作り、まとめ		○フォォーメーション完成度 (条件達成度)	
個人評価	○試合の中で個人の動きと技術															
チーム評価	○グループ活動での個人の行動															
	○筆記試験															
	○試合 (2次・3次リーグ) 総合成績															
	○グループ活動状況 (含む、グループノート)															
	○チームのムード作り、まとめ															
	○フォォーメーション完成度 (条件達成度)															

以上、指導者側の立場から授業内容にそって各段階ごとのねらい、内容、考察と進めてきたわけであるが、次に、今回実施されたこの授業を、生徒はどのように受け止め、又、感じているのであろうか。

アンケート調査結果、並びに生徒の行動の変化等からその一部を考察してみることにする。

○アンケート調査〔調査日：昭和57年11月（第1週） 対象：1学年男子（265名）〕

6. 調査結果と考察

（アンケート1）. 長期にわたって剣道と平行して学習してきましたが

(1) いままでに、このような形態で授業を受けたことがありますか

はい	いいえ	
6%		94%

(2) 今回とられた授業形態はよかったと思いますか

はい	いいえ	どちらともいえぬ
57.3%	22.9%	19.8%

（考察） 今回実施された授業形態は、生徒にとってはほとんど初めての経験であり、良かったと感じている者は全体の約6割である。又、いいえと解答した約2割の者が気になるところであるが、その理由を集約してみてもそれほど否定的な感じはなく、これら短所とする内容を、良かったと解答した者では逆に長所と受け止めているようである。又、どちらともいえぬと答えた者は、初めての経験ということもあり、この長所と短所の葛藤に悩んでいる状態である。

（アンケート2）. 長期にわたるバレーボールの学習において

(1) バレーボール学習についやされた期間はどうか

長かった	短かった	丁度よい
7.1%	53%	39.9%

(2) みずから進んで授業をうけられましたか

はい	いいえ	どちらともいえぬ
83.7%	3.5%	12.8%

(3) 知識・技術が向上したと思いますか

はい	いいえ	変わらない
88.4%	4.1%	7.5%

（考察） この結果から驚かされたことは、指導者側としては、今回の授業をかなりの長期と考え、又、そのように感じていたわけであるが、生徒は決してそうは感じていなかったのである。同時に、この長期間にわたった授業に積極的に取り組んでいたことも窺われるのである。この積極性は生徒の行動からも見ることができる。たとえば、チャイムが鳴ってから授業を開始することはまずなく、その前には集合が完了されていたし、又、午後の授業においては、開始20分前には授業をしていたほどである。そして、この積極性は、確実に知識・技術の向上に結びついているようである。

このことに関連して、生徒は次のように述べている。

- 中学の時のようにわけがわからないうちに試合を終わってしまうより、長期にわたって、グループにより研究しながら進めていくバレーボールに対し、理解と愛着が芽生えてきた。
- とてもおもしろかったし、又、うまくなってきたので、急いで授業に行くくらいだった。

(アンケート3). 今回とられた4段階学習(基礎期・鍛練期・完成期・試合期)に関して

(1) 各段階における意図が読みとれましたか

はい	いいえ
86.7%	13.3%

(2) 完成期で実施した条件付きの試合はチームを完成させていく上で効果があったと思いますか

はい	いいえ
71.5%	28.5%

(3) チーム作りに4段階のどの期間が一番効果的であったと思いますか

基礎期	鍛練期	完成期	試合期	なし
9.8%	22.3%	33.9%	30.6%	3.4%

(4) 4段階のどの期間に一番興味を感じましたか

基礎	鍛練	完成期	試合期	なし
5.5%	4.4%	16.6%	71.5%	2.1%

(考察) 生徒は各段階のねらいは理解して授業を進めていたと推察される。その中でチーム作りの過程をみると、2次リーグ(条件付き試合)は効果的であったと感じているようである。

この方法が、個人、あるいはチームとしてのバレーボール技術の中に、問題意識を引き出させることには成功したと判断してよいであろう。しかし、この完成期が全学習過程を通してみると決して多くの数値を示していないのが残念のような気がするが、この結果は、チーム作りというものが、技術だけでなく、チームの和であるとか、ムードが大きく作用していることを物語るものであり、試合をする中でよりチームワークを確固たるものにしてきた証拠であろう。そのためか、生徒の興味は圧倒的に試合期に集中している。

では、長期にわたり試合を設定したことを生徒はどのように受け止めているのであろうか。

(アンケート4). リーグ戦に関して

(1) 試合数はどうでしたか

多かった	少なかった	丁度よかった
3.4%	56.1%	40.5%

(2) 1次リーグから3次リーグの中で、どのリーグに一番燃えましたか

1次	2次リーグ	3次リーグ	なし
8%	18.5%	67%	6.5%

(考察) 第2段階以後、常にリーグ戦形式での試合を消化してきて、指導者側としては試合が多すぎた感を持っていたわけであるが、この調査結果をみると、多いと感じていた者は全

体の3.4%ならずであり、ましてや少なかったと感じている者が56.1%もいることに驚かされるのである。その中でも特に3次リーグに燃え、又、一番興味を感じている。その理由として、試合だけに集中できたこと、3セットマッチ形式であったこと、ユニフォーム等でムード作りがされ、競争心がかり立てられたことなどがあげられるようである。

以上の結果を、指導者側の立場から考察してみると、これだけ多くの試合を消化しても尚、少ないと感じさせる要素に、1次リーグから3次リーグまでの間、同じ形式での試合を行なわなかったことがあげられよう。又、生徒には「今回の試合は、前回の試合とは違う」という高まりを与え、刺激することにより、生徒を乗せることに成功したと確信している。

今回の授業を終えて、生徒は次のように答えてくれました。

バレーボール楽しさを知り、チームの中の自分にめざめ、1本のレシーブを上げ、又、勝つことに喜びを感じ、負けることのくやしさを知り、そしてチームワークの大切さを知りました。その中からムードの作り方や団結を学び、それがまた、バレーボールの楽しさとなって返ってくる。

《アンケート調査：印象に残ったこと、特に自分で得たもの》の中から特に多くみられたものを抜粋し文章化した

私は、これを生徒の素直な気持ちとして受け止めていきたい。又、その正直な気持ちが、みずから進んで授業を受けた83.7%につながってきていると思いたいのである。そして、生徒にとっては、これらはすべて一つのきっかけから生まれた問題意識として心の中に生きづいていってくれることを願う次第なのである……………。

以上、今回の授業に関して、指導者の立場から考察をし、又、それに対して生徒側の受け止め方に関して考察を進めてきたわけであるが、これらはすべて本校の研究テーマにそって実施した一例にすぎない。そこで、もしこの方法を一般化した場合にはどうなるのか、そこに生じてくると思われる事柄に関して考察してみることにする。

考察1. 専門性をくいだいた場合

今回実施した形式で誰でもが十分実施できると思われる。なぜならば、生徒みずからの手によって技術を向上させ、チームを作っていく方式だからである。大切なことは、グループに応じた、又、進行過程に応じた適切なアドバイスを出せることが必要になってくるのである。勿論、そのためには基礎技術的なこと、応用技術的なことの知識を必要とするが、これらは指導者側の勉強と、それをより生かせるための創意工夫にかかってくるわけである。又、グループノートを生徒とのコミュニケーションや指導の場として重視するので、根気強さも必要であろう。相当な努力が要求されることはいうまでもないが、あとはどれだけムード作りを助成し、生徒を乗せていくかにかかってくるわけである。

考察2. 長期にわたる授業がそれほど望めない場合

実情に即して4段階の中から選択することで可能である。そのような場合には、私は第3段階と

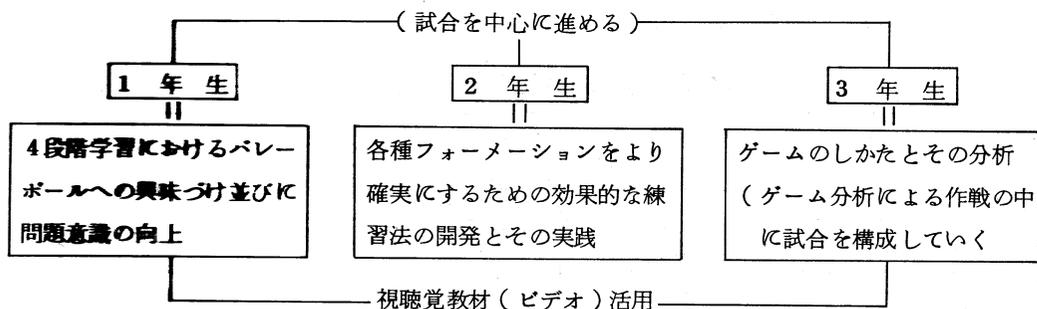
第4段階の採用が効果的かと思う。基礎、鍛練期をはぶき、すぐ条件づきの試合に入り、その中でチームを完成させていくわけである。あくまでも、試合を授業の中心にすえて進めるべきと考える。

考察3 女子における指導の場合

男子に比べ、女子の場合には技術的に高いものは望めない。そこで、第3段階（完成期）における条件に工夫をすればよいのではないだろうか。その際に、女子のゲームにおける特性を考慮すれば、いろいろな条件が設定できるはずである。要は指導者が何をどこまで引き上げていきたいかによって条件をつけていけばよいわけである。又、1次リーグの時に、ワンバウンドゲームなどのレクリエーション的なゲームを考案し、リーグ戦を通して導入していくのもよいと思われる。

考察4 3年間を見通した計画

もし、今回の形態で3ケ年にわたり実施するのであれば、次のような方式も可能ではないかと考え、その一例をここにあげておくことにする。



7. まとめ

『一つのきっかけから生まれる強い問題意識を持たせること』これが高校生にできる生涯スポーツへの動機づけではないか。昨年の研究の中から生まれたこの一つの結論を立証するため、本年度も取り組んできたわけである。試行錯誤の中でとられた今回の方法は、あくまでもそれを追求するためのものであり、すべてではない。しかし、実践研究をしていく中に確実に問題意識に触れさせ、その意識の高まりも得ることができと思われる。確かに、問題意識を持った生徒は、今まで気づかなかったことに気づき始め、行動を起こし、創造する。又、それが一人ではなく集団であればより大きなものを創造するのである。そのきっかけを与えるのが指導者の努力であり、創意にもとづく工夫であると考え。そして、その努力、工夫の中からいかにムードを作り出し生徒を乗せるかにかかってくるわけである。「乗った生徒」はみずから楽しみ、又、より深く追求しようと努力するものであり、そこには無限の可能性を見ることができる。私は、この姿こそ本校のテーマにかかげた「より深く、より楽しい体育学習」をめざす柱になるのではないかと考えるのである。

以上、2年間にわたって実践研究を進めてきたが、この研究はこれで終わったわけではなく、今、始まったばかりである。それゆえ、この研究を通して得たさまざまなことを今後の体育指導に生かし、より高次の目的にそった体育学習をめざしつつ、発表にかえさせていただく次第である。

あ と が き

1年に1度出す「学校体育研究」を、学体連の機関誌らしくしてみようという編集委員会の意向を大切に、このようなものを作りました。

大石会長は、この内容をひっさげて、今夏ロンドンに行かれるといひます。日本を8つの地区に分け、小学校5校、中学校2校、高等学校1校を無作為に選び、その県の教育委員会保健体育課に推せんをお願いした結果が、下の表のようになりました。迅速にご推せん下さった各県の保健体育課に改めてお礼申し上げます。

各学校には、46字×36行の原稿用紙9枚におさまるように原稿をお願いしました。第3学期の特に多忙の時、快く応じて下さった各校長先生、研究主任の先生、本当に有難うございました。

子ども達、生徒達をよりよく育てようと、心血を注がれた研究と実践が全国に紹介されて、活用されれば、喜びこれにすぎるものではありません。(重田 一)

学校体育研究第16巻掲載研究発表学校一覧

地区	県	学 校			校 名	〒・所在地・電話	校長氏名	研究主任氏名
		小	中	高				
東北 北海道	山形	○			上山市立 南小学校	999-31 上山市長清水字石崎411 02367-3-3131	北沢利光	戸田芳雄
関東	神奈川			○	県立 金井高校	244 横浜市戸塚区金井町100 045-852-4271	宮本 惇	和田 実
東海	愛知	○			豊川市立 東部小学校	442 豊川市三谷原町石坪1-1 05338-6-4346	石黒芳美	大須賀久
北陸	福井		○		丹生郡清水町 清水中学校	910-36 丹生郡清水町島寺2-55 0776-98-5009	森田 豊	渡辺俊夫
近畿	和歌山	○			東牟婁郡太地町立 太地小学校	649-51 東牟婁郡太地町3436 073559-2019	浜中節夫	松下 稔
中国	島根	○			江津市立 郷田小学校	695 江津市江津町536 08555-2-2114	坂根弘之	林 忠
四国	香川		○		高松市立 勝賀中学校	761 高松市香西南町565 0878-81-3141	松本俊文	与田英雄
九州	長崎	○			長崎市立 横尾小学校	852 長崎市横尾2-16-1 0958-56-9709	桑原 新	栗原 昇

財団法人日本学校体育研究連合会編集委員会

発行日 昭和58年3月31日

発行者 大石三四郎

発行所 財団法人 日本学校体育研究連合会

〒151 東京都渋谷区代々木神園町3番1号
国立オリンピック記念

青少年総合センター内

☎ 03-465-3954・7464

学校体育研究協賛広告一覽

1. 児島株式会社
2. 文溪堂
3. 近畿日本ツーリスト株式会社
4. 株式会社井上製作所
5. 日本教育シューズ協議会
6. 明石被服興業株式会社



コロンバイン

Columbine

着る身になって良い品づくり

コロンバイン®

スポーツウェア

(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員

児島株式会社

倉敷市児島小川2丁目4番60号 TEL(0864) 72-2830 (代表)
営業所 (名古屋・東京・大宮・盛岡・札幌)

運動のたのしさ、喜びを体得させる

1-6年生の体育

監修 筑波大学教授 山川岩之助

- 全学年見やすいワイド判(B5判)
- 学校の創意を生かして指導できる領域別編成
- 運動の仕方や練習方法がよく分かる豊富な写真や図版



児童書250円 教師用指導書1200円

株式会社 **文溪堂**

東京都千代田区神田錦町1-21-3 〒101 電話(03)293-8505(代)
 東京都練馬区豊玉中3-10 〒176 電話(03)993-4411(代)
 岐阜市長住町9-26 〒500 電話(0582)51-1121(代)
 羽島市江吉良町2-7-17 〒501-62 電話(0583)98-1121(代)
 大阪市西成区北津守1-1-2 〒557 電話(06)562-4535(代)

旅のことはならおまかせください

ツアーリストは、旅行組合会社、どんなタイプの旅にもお応えいたします。家族旅行やグループ旅行、ハネムーン、職場旅行・ビジネス旅行(出張)など、お気軽に窓口をご利用ください。

●ブランド商品 日本の家メイト：日本の四季(セット旅行)、ハネムーン、メイト特選旅行(エスコート付)メイトハイヤー、メイトバス、メイトスキー、職場旅行セットなど、世界の豪華ホリデイ：ハイライト、フリータイム、ロマンの旅、ヤングホリデイ、教養旅行、海外産業視察、スキーホリデイ、マイツアーなど。

●団体旅行 国内旅行も海外旅行も、団体旅行のことならツアーリストにお任せください。研修旅行、研修旅行、職場旅行、コンベンションなど。



- 宿泊プラン(コンピューターによるホテル旅館の即時予約) おたのしみクーポン、日本の宿、ホテルプラン、マイロード、受験生の宿、ペンション、民宿、貸別荘など。
- 乗り物キップ(最新コンピューターによる即時予約) 国鉄券：普通乗車券、指定席券、定期券、団体乗車券、ビジネス回数券、周遊券、ワイド周遊券、ミニ周遊券。航空券：日本航空、全日空、東亜国内航空、日本近距離航空。

その他：近畿日本鉄道の特急券、全国の私鉄、カーフェリー、レンタカー、レンタサイクルなど。

- クーポン 宿泊、食事、弁当、入場券、拝観券など。
- ツアーリストギフト旅行券 贈って喜ばれるツアーリスト旅行券1,000円・5,000円・10,000円があります。

ツアーリストは皆さまの窓口です。

お支払いは便利なクレジットカードで

ツアーリストで扱う全商品のお支払いには、サインひとつでお手軽な下記クレジットカードをご利用ください。(ただし定期券・ツアーリストギフト旅行券・トラベラーズチェックは除く)



世界でご利用いただけるツアーリストトラベラーズチェックも発売してあります。ご利用下さい。

〒231 横浜市中区弁天通6-85 宇徳ビル3階
 近畿日本ツーリスト 横浜ユーストラベルセンター
 電話 045-201-6551 (代表)

新商品発売

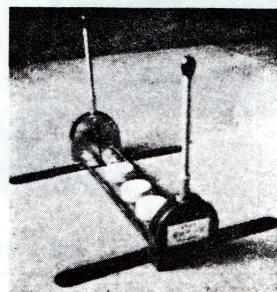
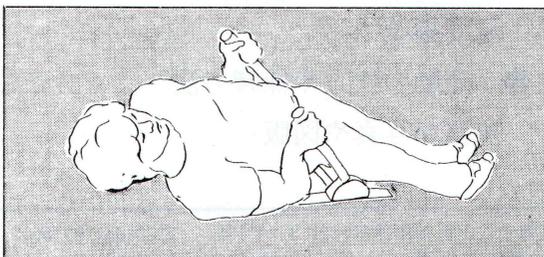
セルアップ[®] 健康を守る新兵器

セルアップ
(商標登録名)

背骨専用押圧運動具用
(実用新案登録済)

セルアップは自分の体重とテコを利用して、自分で自由に背骨を押圧し、背骨およびこれに連なるすべての神経を正常化させる運動具です。

此の運動具は手動式ですから、自分の状態に合わせて静かにアップして下さい。



収納時容積

高さ 15cm

巾 15cm

長さ 50cm

室内で簡単にご使用になれます

セルアップ運動は実行することにより効果が証明されます。

首筋・背骨・背筋・腰の疲れた時

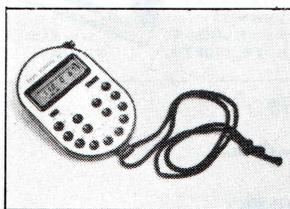
特にお子様受験期等には学習の合間に背骨をアップすることにより疲れずに根気良く楽しく勉強ができます。

長命には若さを保つことが最も必要です。「セルアップ運動」は若さを守る新兵器です。すでに健康雑誌等でご承知のとおり、背骨を押圧することにより血圧などが正常化される事も証明されています。

- ◎セルアップの運動は背骨およびこれに連なるすべての神経を正常化し、体力の回復をうながし、健康美を増進する効果があります。
- ◎特に女性の方は美肌を守る運動具としてご愛用下さい。

セスコードーⅡ型

これがスポーツ万能測定器です



(P.C.T.特許出願済)

これさえあればスポーツに必要な時間測定はすべてOK!!
一般体育授業に最も優れた性能を發揮します。
音楽演劇放送ダンス等のタイミン
グ調整など最適です。
電池の持続時間は連続2,500時間
です。小型で軽量です。

— 製造元 —

(株) 井上製作所
アイ・エス・シー

東京都練馬区関町1-3
〒177 ☎(03)929-3758(代)

教育(呼吸)シューズ®

商標登録第1412578号



●実案公報 昭53-40340 ●商願 51683号 ●意願 3895号

☆☆☆☆☆ 3つのドキュメント ☆☆☆☆☆

- ※靴底に絶えず新鮮な空気の流れる …………… 呼吸シューズ
- ※運動の度に吸気、排気を忠実に実行する …………… 呼吸シューズ
- ※靴底に輝かしい光のさし込む …………… 呼吸シューズ

☆☆☆☆☆ 3つの適性 ☆☆☆☆☆

- ※運動靴皮膚炎の予防……………学校シューズの保健措置は
この呼吸シューズで
- ※靴内気候の改善……………温度・湿度の上昇防止は
この呼吸シューズで
- ※体育館・校内上ばき用……………素適な履心地と適度なストップ効果は
この呼吸シューズで

財団法人 日本学校体育研究連合会 特別賛助会員

日本教育シューズ協議会

本部事務局 岡山市西川原210番地
〒703 TEL(0862)72-5437(代)

児童・生徒の為に最適な体育衣料を真剣に考える



Yacht[®] スポーツウェア

のびのび ザブザブ
動いて 洗える



富士ヨット

日被連 標準型学生服

財団法人日本学校体育研究連合会

賛助会員 **明石被服興業株式会社**

岡山県倉敷市児島田の口 1-3-44 〒711

☎0864-77-7701

支店・営業所関連会社

- | | | | |
|------|-------------|--------------------------------|------------------|
| 東京都 | 東京支店 | 東京都中央区東日本橋1丁目4番10号 | (03) 861-1917 |
| 大阪府 | 大阪営業所 | 大阪市東区北久太郎町4丁目55番船場グランドビル7F703号 | (06) 245-7461 |
| 山口県 | 宇部営業所 | 宇部市厚南区際波 | (0836) 41-7311 |
| 福岡県 | 福岡営業所 | 福岡市博多区豊2丁目4-70 | (092) 451-6920 |
| 北海道 | 北海道ヨット服(株) | 札幌市中央区北四条西11丁目東栄ビル7F | (011) 281-1707 |
| 北海道 | 函館ヨット服(株) | 函館市万代町7-7 | (0138) 45-3262~3 |
| 秋田県 | 秋田ヨット服販売(株) | 横手市卸町5-12 | (01823) 3-1243 |
| 福島県 | 福島学生衣料(株) | 福島市松山町198-4 | (0245) 31-5731~2 |
| 滋賀県 | 近畿ヨット服(株) | 大津市中央2丁目3-26 | (0775) 22-8861 |
| 香川県 | 香川ヨット服(株) | 高松市木太町2780番地の5 | (0878) 33-3891 |
| 鹿児島県 | 富士ヨット(株) | 鹿児島市卸本町5-21 | (0992) 60-2951 |